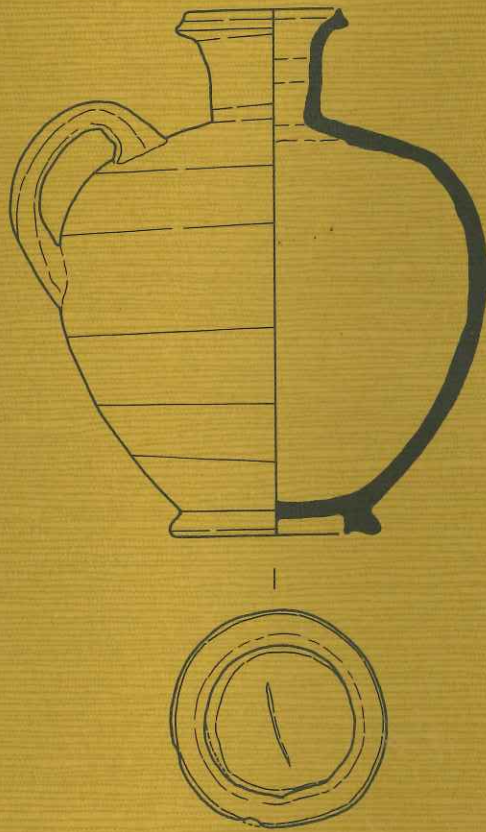


栗東町埋蔵文化財調査

1993・1994年度 年報Ⅱ

—手原遺跡、高野・辻遺跡、伊勢遺跡、下鉤遺跡—



手原遺跡井戸出土須恵器

1996

栗東町教育委員会

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋蔵文化財調査

1993・1994年度 年報Ⅱ

—手原遺跡、高野・辻遺跡、伊勢遺跡、下鈎遺跡—



手原遺跡井戸出土須恵器

1996

栗東町教育委員会

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は財団法人栗東町文化体育振興事業団が1993年度に実施した手原遺跡、辻・高野遺跡の発掘調査報告、および1994年度に実施した辻・高野遺跡、伊勢遺跡、下鉤遺跡の調査報告である。
2. 本書の刊行は1993年度、1994年度の「年報」を補足するものである。
3. 本書の執筆は、第1章を雨森智美、第2章を近藤 広、第3章を佐伯英樹、第4章を藤岡英礼が行った。全体の編集は近藤が行った。
4. 調査体制は以下のとおりである。

1993年度 手原遺跡 辻・高野遺跡	1994年度 辻・高野遺跡 伊勢遺跡 下鉤遺跡
栗東町教育委員会社会教育課 課長 杉江 功三	栗東町教育委員会社会教育課 課長 杉江 功三
文化財保護係 係長 原田 上	文化財保護係 係長 原田 上
主査 清水 好洋	主査 清水 好洋
主事 松本 正人	主事 松本 正人
(助)栗東町文化体育振興事業団 課長 仲井みさゑ	(助)栗東町文化体育振興事業団 課長 竹村 利三
埋蔵文化財発掘調査課 係長 平井 寿一	埋蔵文化財発掘調査課 係長 大崎 隆志
調査担当技師 近藤 広 雨森智美	調査担当技師 近藤 広 佐伯英樹 藤岡英礼

5. 現地調査および報告書作成に当たっては、以下の方々に御協力を得た。
 上田和江 大岡道代 教野妙子 辻井一二美 牧野富子 横山こと 石原恵子 森智美
 川崎うた 国松好子 清水宏行 富田由美子 藤原恵美 大角貴則 池田清子
 千代清美 徳住英子 今村梅子 西岡たよ子 井上良子 井上恵子 井上妙子
 西村寮子 久徳良子 木下政子 平松しず子 塚本紀代美 西田百合子 竹村ヒロ子
6. 遺構・遺物写真撮影にあたっては、松村浩（栗東歴史民俗博物館）の御協力をえた。
 遺物復元、実測、トレースにあたっては、畑本陽子（同館調査員）、大橋美和子、長濱恵美子、森智美（調査員）、奥村美枝子、木村三津子、宮嶋八重美、穴戸貴子、藤原恵美（整理員）の御協力を得た。
7. 遺構の略語は、奈良国立文化財研究所の方式を使用した。
8. 図面に使用した方位は、特に明記しない限り、全て磁北である。
9. 本書で使用した標高は、T P（東京湾平均海面高度）である。

目 次

例 言

目 次

第1章 手 原 遺 跡

1. 位置と環境	1
2. 調査の経緯	3
3. 調査の概要	5
4. 小 結	19
図 版 1 ~ 12	26

第2章 辻・高野 遺 跡

1. 位置と環境	37
2. 調査の経緯	37
3. 調査の概要	38
4. 小 結	42
図 版 1. 2	45

第3章 伊 勢 遺 跡

1. 位置と環境	47
2. 調査の経緯	48
3. 調査の概要	49
4. 小 結	55
図 版 1 ~ 5	56

第4章 下 鈎 遺 跡

1. 位置と環境	61
2. 調査の経緯	61
3. 調査の概要	62
4. 小 結	65
図 版 1. 2	69

手原遺跡発掘調査概要

1. 位置と環境

栗東町は滋賀県の南部に位置し、滋賀県の中心部に県全体の6分の1の面積を占める琵琶湖に対して東南部にあたる、湖南と称される地域である。

栗東町の地勢は三区分され、南部は湖南アルプスと称される山地の一部、金勝山地にあたる。その北側が丘陵地で、さらに北側は野洲川扇状地にあたる。手原遺跡は扇状地のなかでも丘陵に近いところに位置する。遺跡内には、六地蔵の古琵琶湖層丘陵地に源を発する葉山川が西流していたが、現在ではつけかえられて、遺跡の南端を流れている。

町内でみられる最も古い遺跡は、野洲川左岸の辻・高野遺跡で、縄文時代前期初頭前後の遺構、遺物が出土している。下鉤遺跡では、縄文時代前期の住居址がまとまって出土している。縄文時代中～後期になると、霊仙寺遺跡や野尻遺跡などの沖積地や、丘陵縁辺の狐塚遺跡で、遺構・遺物がみついている。晩期にも各地で遺跡がみられるが、なかでも霊仙寺遺跡では、弥生時代前期の土器も出土する。より耕作しやすい北部の低地から、弥生の村が誕生したのである。

弥生時代中期になると集落の範囲はさらに広がり、栗東町でも下鉤遺跡・中沢遺跡・坊袋遺跡などで遺構や遺物が見ついている。弥生時代後期になると、下鉤遺跡や伊勢遺跡で大型掘立柱建物がみつかるなど、拠点的な集落があったことがわかっている。

古墳時代になって大規模な集落がみられるのは、野洲川左岸の辻遺跡・高野遺跡・岩畑遺跡である。なかには辻遺跡のように玉づくりを行っていたムラや、岩畑遺跡のように鉄器を多くもっていたムラなどの特徴があらわれる。

栗東の丘陵地にあたる孤立峰の安養寺山西麓には、馬具・武具などの豊富な副葬品をもつ、新開古墳をはじめとする古墳群がつくられる。また丘陵端部では、県下最大の帆立貝式古墳である椿山古墳（全長99m）や、大塚越古墳、「木製埴輪」が出土した狐塚3号墳が存在する。また安養寺山とは金勝川を隔てて、南側の丘陵端部では、四世紀代より北谷11号墳・下戸山古墳があり、5世紀代になると椿山古墳と類似した形の地山古墳（全長90m）がつくられる。

白鳳時代では手原遺跡で、瓦が多く出土しており、正方位の地割がのこることから、寺院の可能性が考えられている。同じころ、金勝川左岸の岡遺跡では桁行が長い掘立柱建物が出現する。8世紀代になると桁行の長い建物が回字状に配置される。また総柱建物群など異なる機能をもつ建物群が溝によって区画されることから、律令期栗太郡衙に推定され

ている。岡遺跡では8世紀後半になると規模をやや縮小して9世紀まで役所としての機能が存続する。手原遺跡では8世紀後半以降、企画性のある建物群が出現する。長岡京期以降は手原遺跡内に東海道が通ると考えられている。

岡遺跡と手原遺跡の中間地点には狐塚遺跡があるが、7世紀末～8世紀前半代の遺構、遺物が発見されており、墨書土器が出土している。また、岩畑遺跡、辻・高野遺跡、小柿遺跡でも奈良～平安時代の集落がみつまっている。生産地としては、丘陵部に山田窯、辻越窯などが存在する。

中世になると、栗東町内の遺跡の数は急増する。江戸時代になると現在の集落の姿になっていくと考えられ、調査で発見されることは少ない。

参考文献

『栗東の歴史』第1巻 古代、中世 栗東町 1988

『栗東の歴史』第4巻 資料I 栗東町 1994



- 1.手原遺跡 2.蜂屋遺跡 3.下鉤東遺跡 4.上鉤遺跡 5.狐塚遺跡 6.坊袋遺跡 7.岡遺跡
- 8.安養寺古墳群 9.灰塚山古墳群 10.和田古墳群 11.五百井神社古墳群 12.大塚越古墳 13.椿山古墳
- 14.椿山池ノ浦遺跡 15.小野遺跡 16.佐世川古墳群 17.山田遺跡(窯) 18.上砥山遺跡 19.中村遺跡
- 20.佐世川遺跡 21.石場山遺跡 22.北尾遺跡 23.上砥山古墳群 24.堂山古墳群 25.日向山古墳群
- 26.唯心教寺遺跡 27.高野遺跡 28.林遺跡 29.岩畑遺跡 30.辻遺跡 31.出庭古墳群 32.野尻遺跡 33.下鉤遺跡
- 34.小柿遺跡 35.中沢遺跡 36.小槻古墳群 37.滝遺跡 38.北中小路遺跡 39.霊仙寺遺跡 40.十里遺跡

図1 調査地周辺図(1:40000)

2. 調査の経緯

今回の調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字手原3丁目926、929-1に所在する。

1993年4月3日、中村定次氏により926番地における貸倉庫建設に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼がだされ、また、4月6日に里内健氏により倉庫付事務所建設に伴う埋蔵文化財調査の依頼がだされた。申請地の周辺では奈良～平安時代の遺構遺物が確認されており、申請地に広がることが予想されたため、栗東町教育委員会では本調査の実施を決定した。これを受け、(財)栗東町文化体育振興事業団では調査を受託し、926番地の建設予定地にあたる235㎡をT-1、926-1番地の75㎡をT-2として調査した。調査期間は1993年4月20日から5月31日までである。



写1. T-2調査前の状況



写2. 作業風景

表1 調査の日程

		T-1		T-2	
		遺構掘削		遺構掘削	
		記録		記録	
1993年 4月	20	表土除去 遺構検出	写真撮影	22	表土除去 遺構検出
	22			23	
	26			27	
	27	柱穴段掘り		SD-1 柱穴段掘り	全景写真
5月	1~5	G 排水 そうじ 埋め戻し 撤収	SK-1 SB4~6 ↓ SB-1~3 ↓	1~5	G 排水 そうじ 柱穴精査 ↓ 桝内精査 ↓
	6			6	
	7			7	
	10			10	
	11			11	
	13			19	
	17			20	
	19			21	
	20			24	
	21			25	
	24			26	
	25			27	
	26			28	
	27			31	

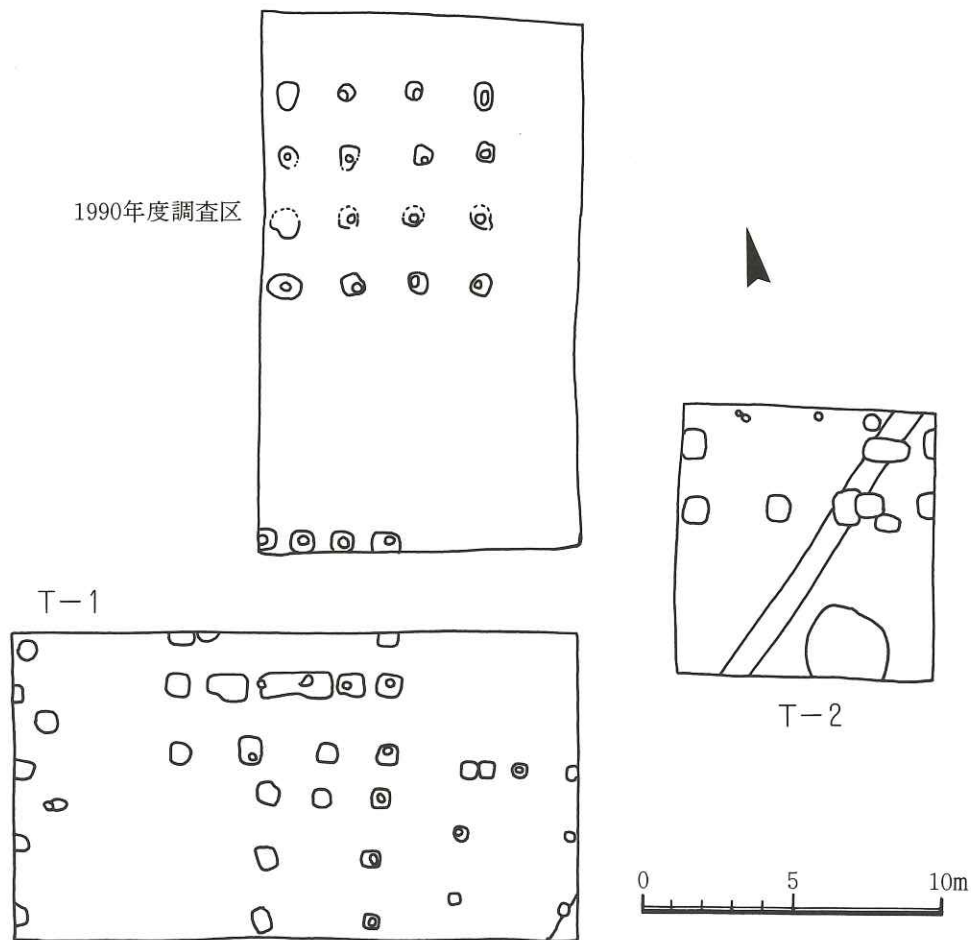


図2 調査地遺構図

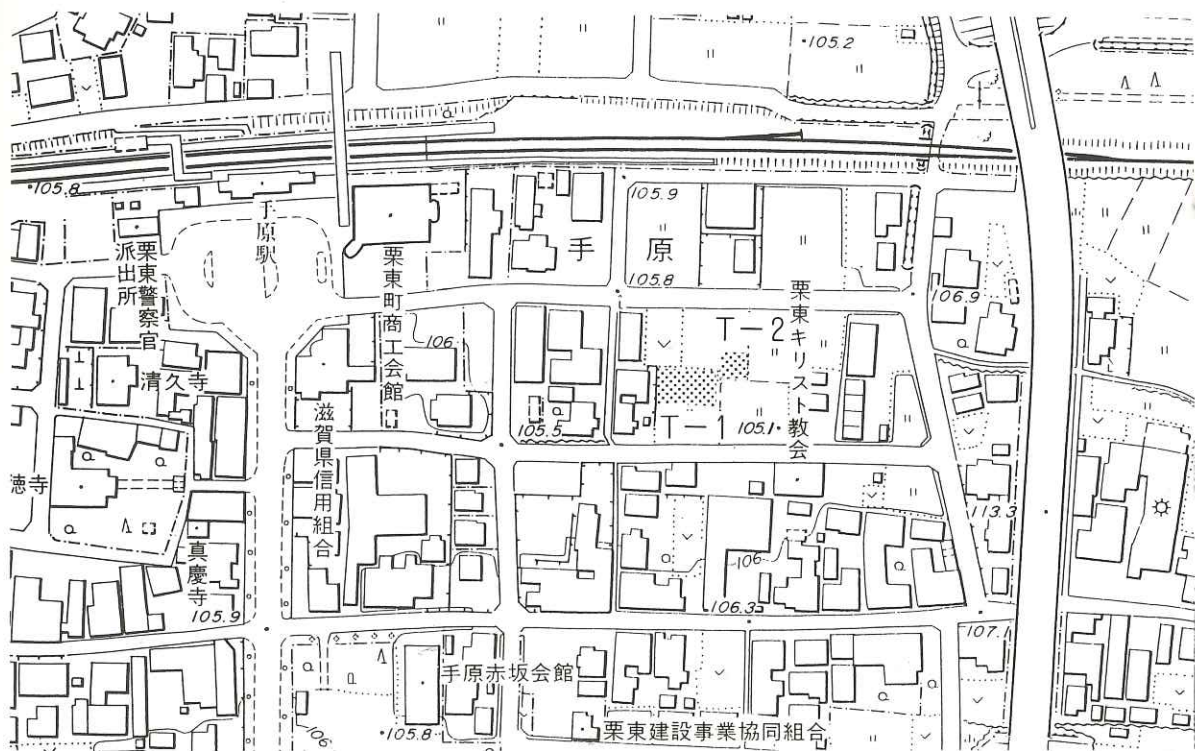


図3 トレンチ配置図 (1:2500)

3. 調査の概要

(1) T-1

基本土層 上から耕作土（層厚16cm）、床土（橙灰色土、層厚8cm）、明黄灰色粘質土（層

厚6cm）、黄灰色粘質土（層厚3cm）が堆積し、黄灰褐色粘質土の遺構ベース面にいたる。

検出遺構 掘立柱建物（SB）7棟、溝（SD）、土坑（SK）が検出された。

SB-1 3間×1間の掘立柱建物である。柱間は、桁行で0.7~1.0m、梁行は2.5mである。柱穴は円形で、直径約0.2m、検出面からの深さは0.1~0.5mである。埋土は上層が黒褐色土、下層は明黄灰色土である。

SB-2 2間×1間の掘立柱建物である。柱間は桁行で1.1~1.5m、梁行で2.9~3.2mである。側柱列中央がやや外側に張り出している。柱穴は円形で、直径約0.2m、検出面からの深さは0.1~0.35mである。埋土は上層が黒褐色土、下層は明黄灰色土である。

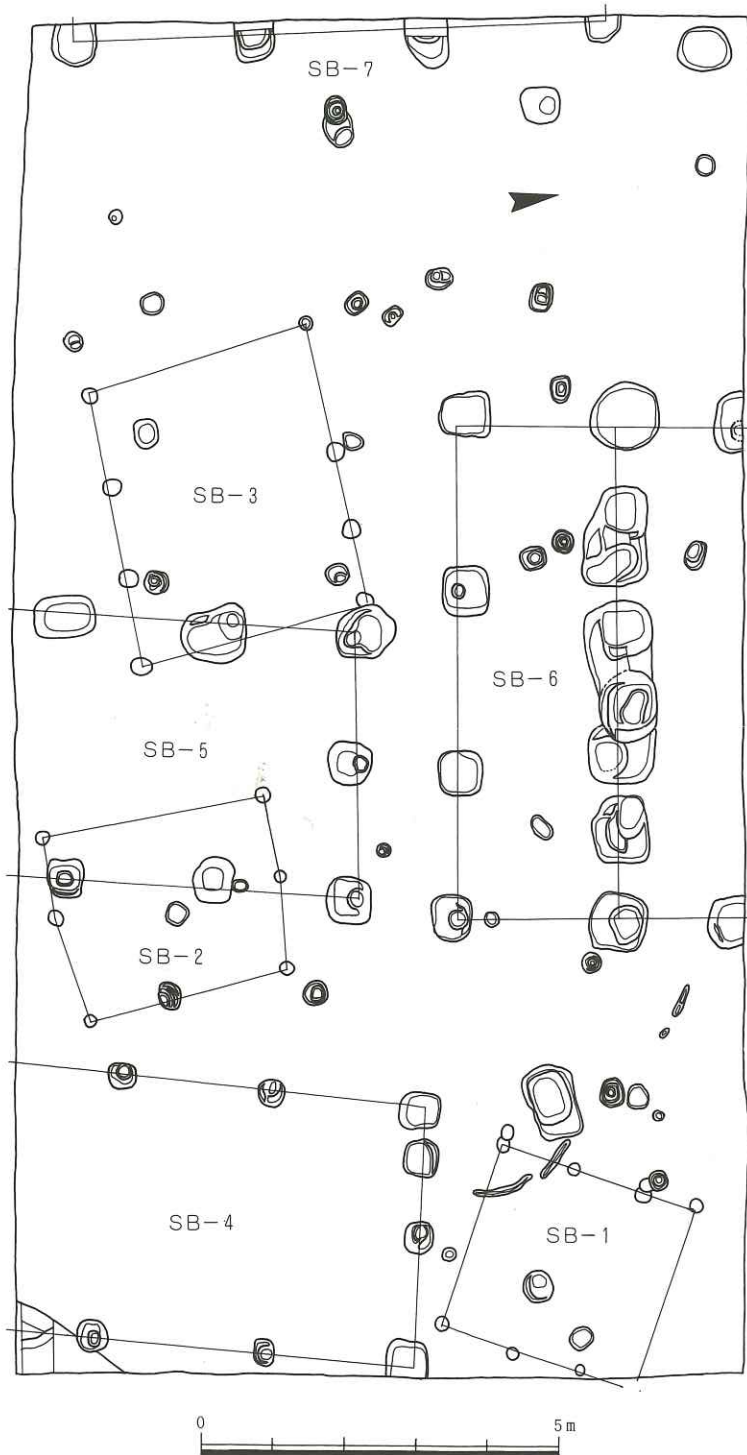
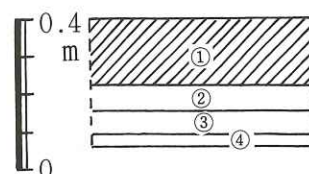


図4 T-1遺構図



- ①耕作土
- ②橙灰色粘質砂質土
- ③明黄灰色粘質土
- ④黄灰色粘質土

図5 T-1基本土層

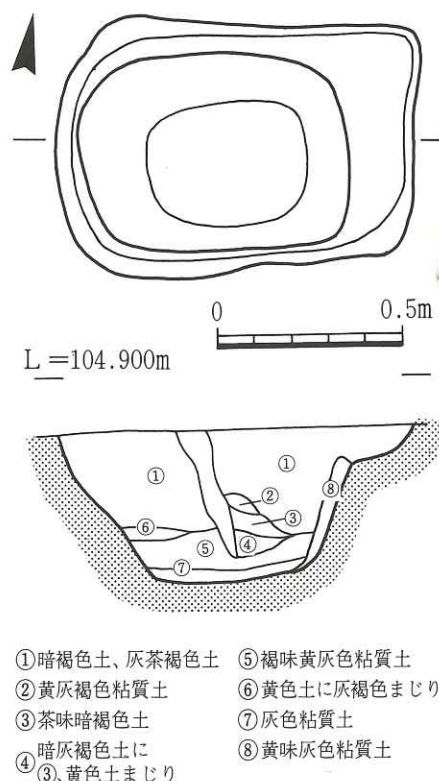
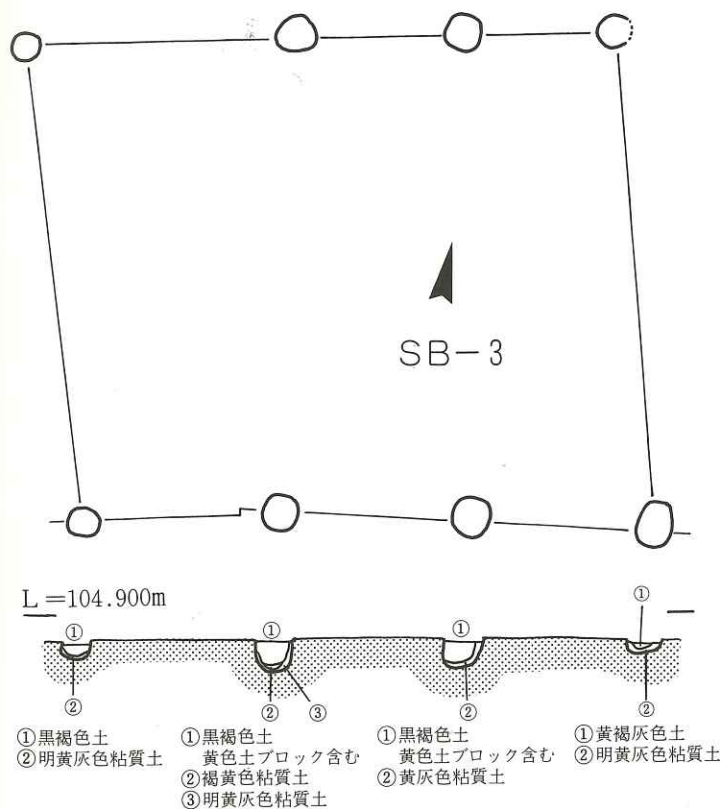
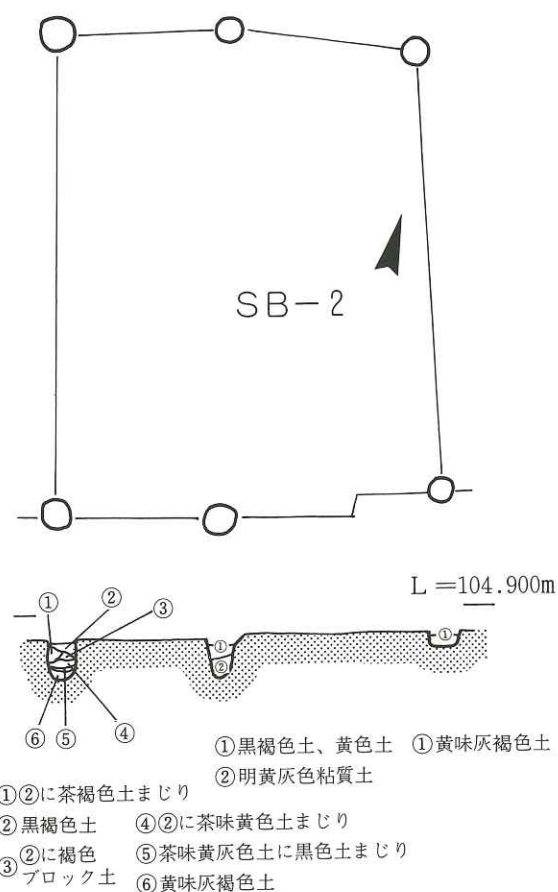
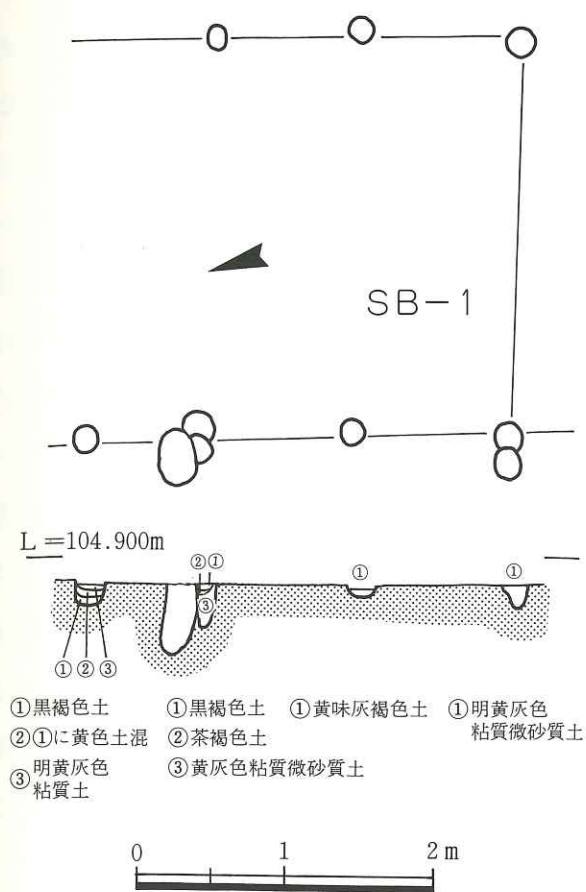


図6 遺構実測図 (SB-1~3)

図7 遺構実測図 (SK-1)

SB-3 3間×1間の掘立柱建物である。柱間は桁行で1.1~1.8m、梁行で3.1mである。柱穴は円形で、直径0.25m、検出面からの深さは0.1~0.35mである。埋土は上層は黒褐色土、下層は明黄灰色土である。

SB-4 3間以上×2間の掘立柱建物である。柱間は桁行で2.1~2.2m、梁行で1.8~1.9mである。柱掘り方は隅丸方形で、1辺が0.35~0.55m、柱痕は直径0.2mを計る。柱穴の深さは検出面下0.3~0.4mである。埋土は柱穴が茶味灰褐色粘質微砂質土、掘り方は黄灰色土、黄褐色土、茶褐色が層状に埋められている。軸方位はN-14°-Eである。

SB-5 3間以上×2間の掘立柱建物である。柱間は桁行で2.0~2.3m、梁行で1.9~2.0mである。柱掘り方は、東側柱列が隅丸方形で1辺0.5~0.6m、西側柱列は隅丸長方形で、長辺が約0.9mである。柱痕の直径は約0.2mである。柱穴の深さは検出面から0.3~0.7mを計る。埋土は柱痕が茶味灰褐色粘質微砂質土、掘り方は黄灰色土、黄褐色土、茶褐色土が層状に埋められ、ブロック状になる層がある。軸方位は、N-13°-Eである。

SB-6 5間×3間の掘立柱建物である。SB-6の北側は調査区外に延びるが、北側柱列の一部が、1991年度の調査でみついている。建物の南側には3間の庇がつけられて

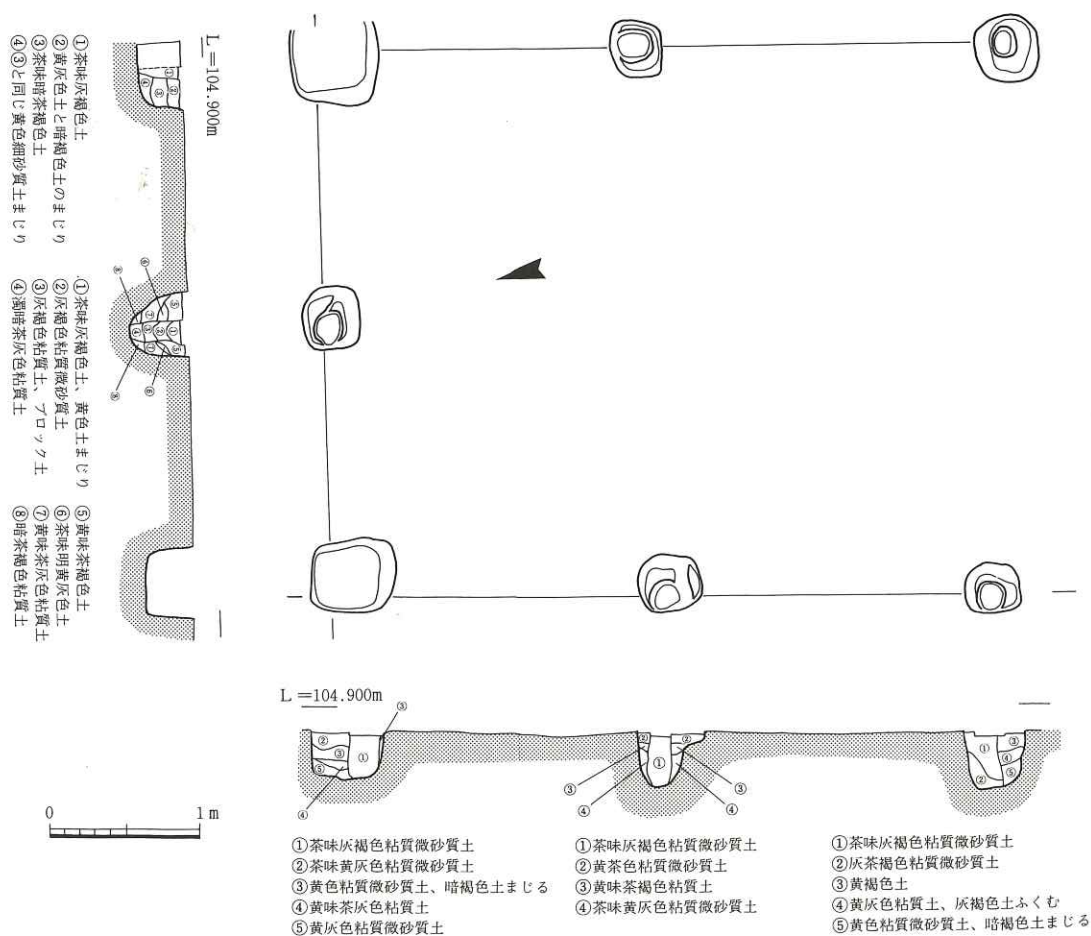


図8 遺構実測図 (SB-4)

いる。身舎の柱間は桁行で1.2~1.5m、梁行で1.5mである。底列の柱間は2.0~2.5mで、中央の柱間が広がっている。底の出は2.3mである。桁行のうち北側柱列では、柱掘り方が1辺0.8mの隅丸方形で、柱穴の深さは0.6~0.7mである。南側柱列では、柱掘り方は1辺0.6~1.0mの隅丸方形もしくは不整形、柱穴の深さは0.5~1.0mで中央の柱が最も深い。南側柱列のうち西から2~4番目の柱では1度長楕円形に掘削されてから再度柱穴が掘り込まれている、いわゆる「溝もち」^①である。底列の柱掘り方は1辺約0.7mの隅丸方形で、柱穴の深さは0.35mである。SB-6の柱根は直径0.2mである。

埋土は柱痕では灰褐色粘質微砂質土である。柱掘り方は、茶褐色土・黄色土・暗茶褐色土・灰茶色土などが層状に埋められ、ブロック状になる層が多い。南側柱列にみられる「溝もち」の部分は黄灰色土・灰茶色土・暗灰褐色土などが、比較的均一な層で堆積しており、柱掘り方の埋土とは明確にちがいがみられる。軸方位はN-9°-Eである。

SD-1 調査区南東隅で部分的に検出された溝で、T-2に延びていくものである。深さは検出面下約0.3mで、SB-4の柱穴に切られる。埋土は、灰茶褐色粘質土である。

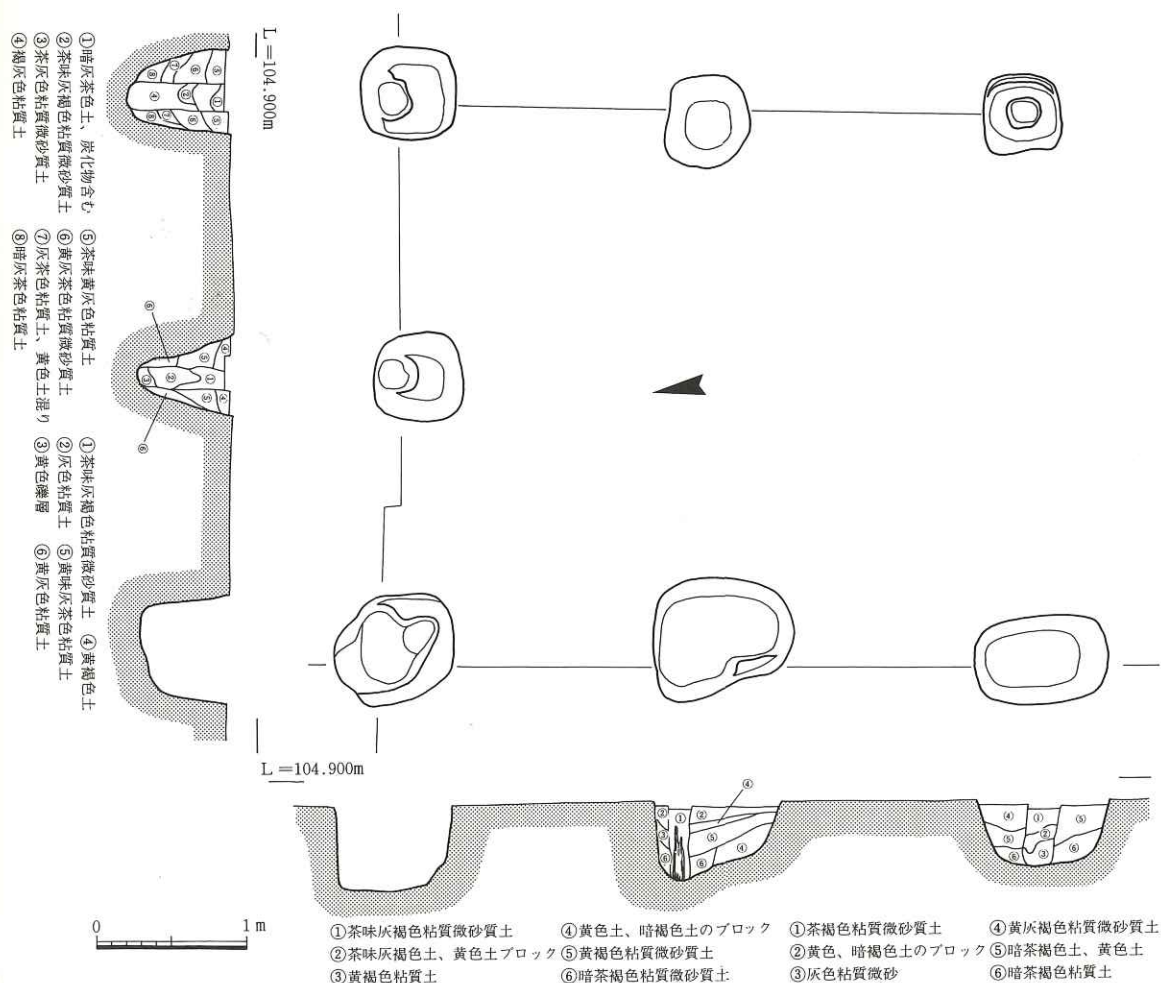


図9 遺構実測図 (SB-5)

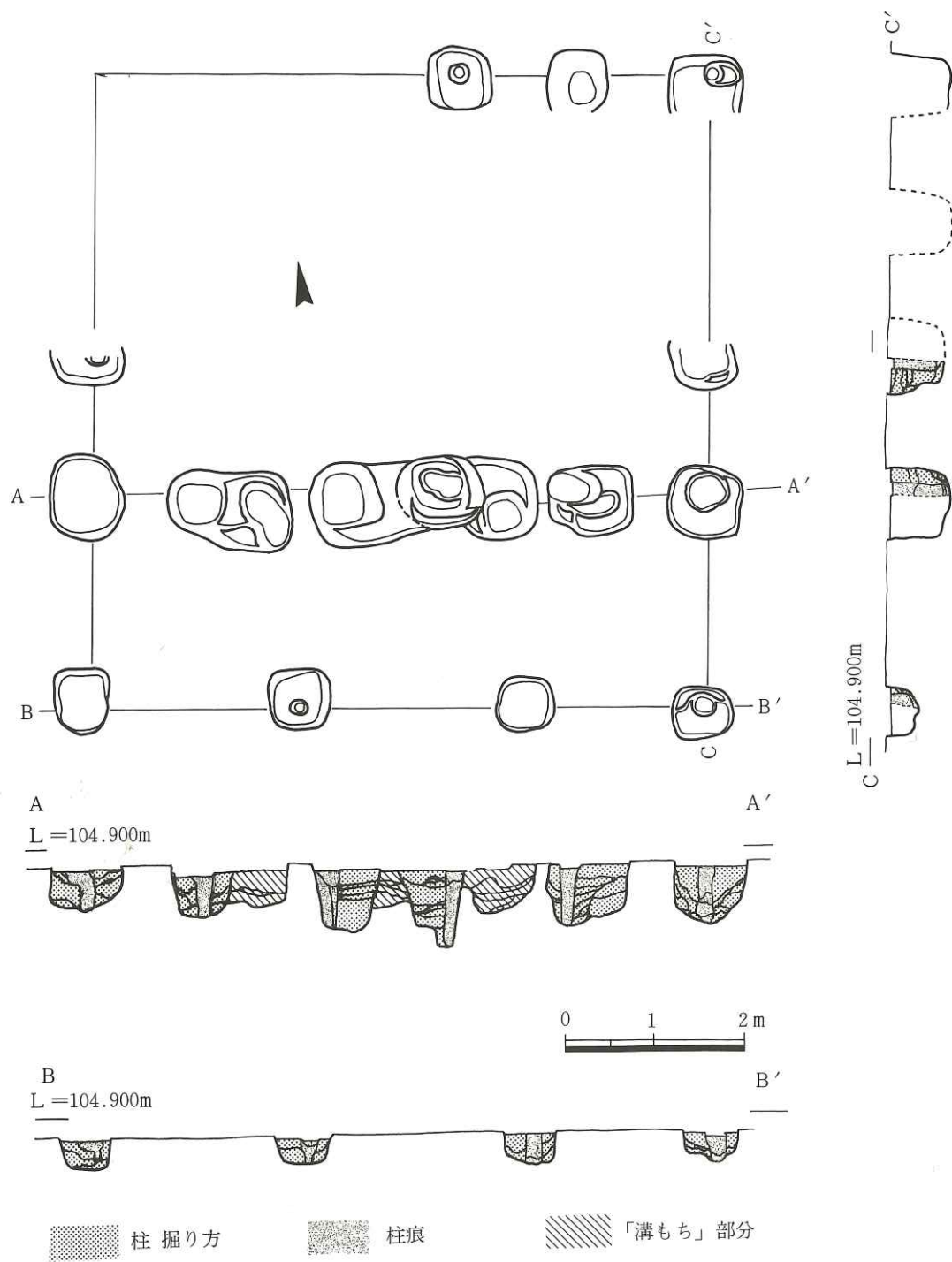


図10 遺構実測図 (SB-6)

SE-1 T-2 南東端で検出された井戸である。掘り方は不整円形で、直径2.7mを計る。掘り方の埋土は灰茶褐色砂礫で、固くしまっている。

検出面下約0.05mでSE-1 中央部分が礫混じりの灰褐色粘質土となり、検出面下約0.8mで枠上端部分が検出される。枠は三種類の異なる材が組み合わされている。上部は方形の構造で、四隅の柱のみ検出されており、横材などは残っていない。ただ、下部枠内からは板材が出土しているのでそれらが横材となる可能性がある。方形枠の中央部には、径0.7~0.8mの丸太材を縦に三ッ割にし、割りぬいたものを組み合わせた枠が設置されている。枠の厚さは約8cmである。組み合わされた枠は、土圧によりかなりの変形をうけており、内径で0.7~0.45mの楕円形を呈している。外径は0.6~0.8mである。割りぬきの枠の長さは現存する部分で3.15mである。割りぬき枠の下端には曲物が据えられ、井戸の底にいたる。曲物の直径は約0.65mで、深さは0.35mである。割りぬき枠と曲物枠は土圧により、水平方向に大きくずれが生じている。枠内は、青灰色粘質腐植土、および礫が埋土となっている。

SE-1 からは奈良時代~平安時代の土器および木器が多く出土している。割りぬき枠の上端部近くからは、墨書土器（灰釉陶器）が出土している。枠内のうち、下半部からは、検出面下2.7mで須恵器壺（漆容器）^②および土師器杯身、-3.0mで小型の曲物が出土した。さらに-3.4mでは斎串・瓦および須恵器広口壺、-3.7mでも斎串が出土している。このほかに割りぬき枠内からは燃えさし2点、ヒョウタン類の果皮が出土している。下部の曲物枠内からは、須恵器把手付長頸壺、土師器杯身が出土している。

注

①大上周三「掘立柱建物の掘り方形態—布掘系譜を中心に—」『青山考古』第9号 青山考古学会 1991年

②漆容器については、後日別稿にて報告する予定である。

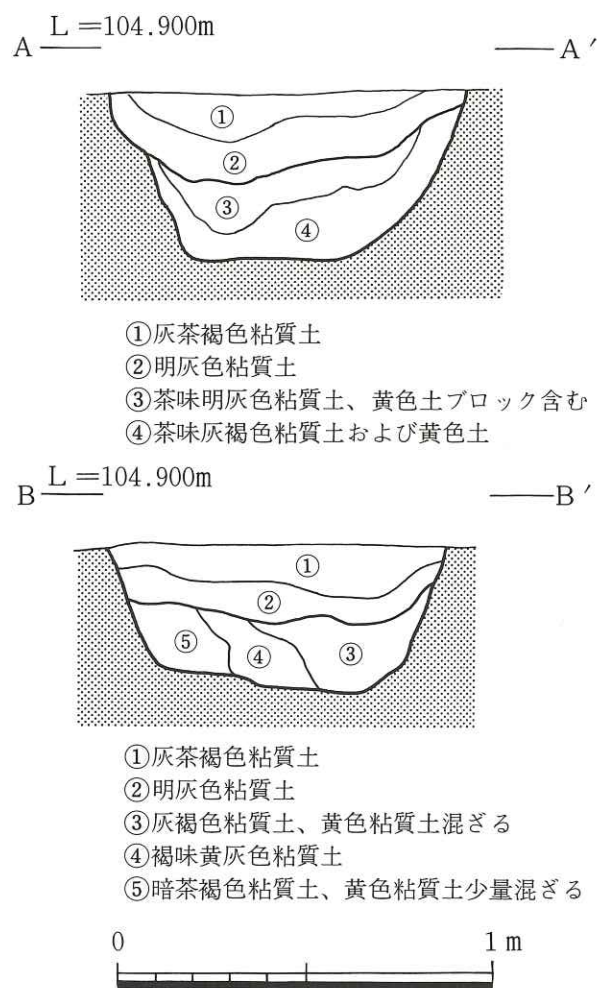


図13 遺構断面図（SD-1）

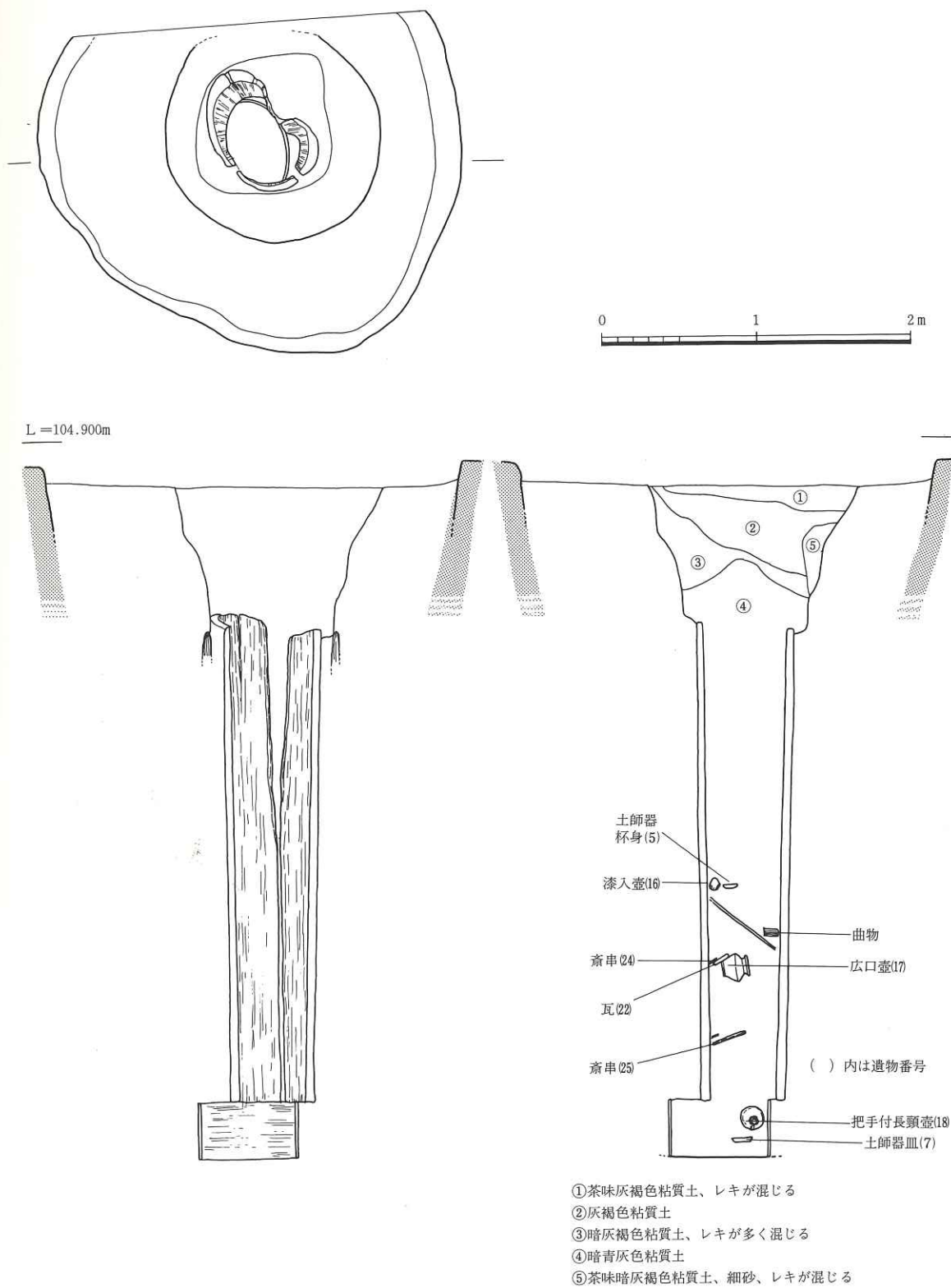


図14 遺構実測図 (SE-1)

出土遺物

土 器

古墳時代初頭 1は器台受部である。3は甕で「く」の字状に外反する口縁部である。2は、甕もしくは壺の底部である。いずれも遺存状態がわるく、調整は不明である。布留式古段階に相当する。

奈良～平安時代

土師器 4～7は土師器杯身である。6、7は口縁部が内弯して外反し、平坦な底部をもつ。6は内外面剥離しており詳細な調整は不明である。7は内面端部に沈線を巡らす。内面底部には粗いラセン状暗文を施し、口縁部内面は大半に斜放射状暗文がみられる。外面底部はナデによる。6、7は平城Vを前後する時期に相当する。5は、底部が丸味を帯びる杯身である。4は口縁部がやや外弯して外上方にのびる、ロクロ土師器である。10世紀代のものである。8は甕で、口縁部は外反して内面端部に段がみられる。体部内面、肩部外面はナデ、体部外面はヘラケズリによって調整する。

須恵器 9は杯蓋である。天井部は平坦でツマミがはりつけられていた痕跡がみとめられる。10～15は杯身である。10は断面方形の高台をもち、内端で接地する。

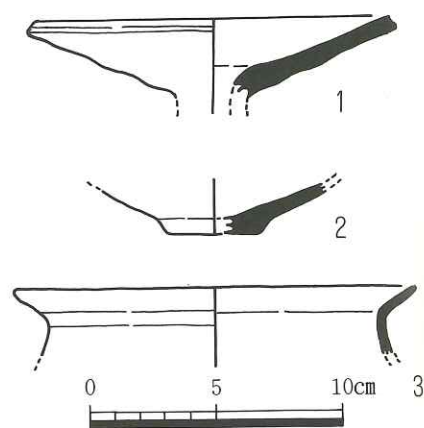
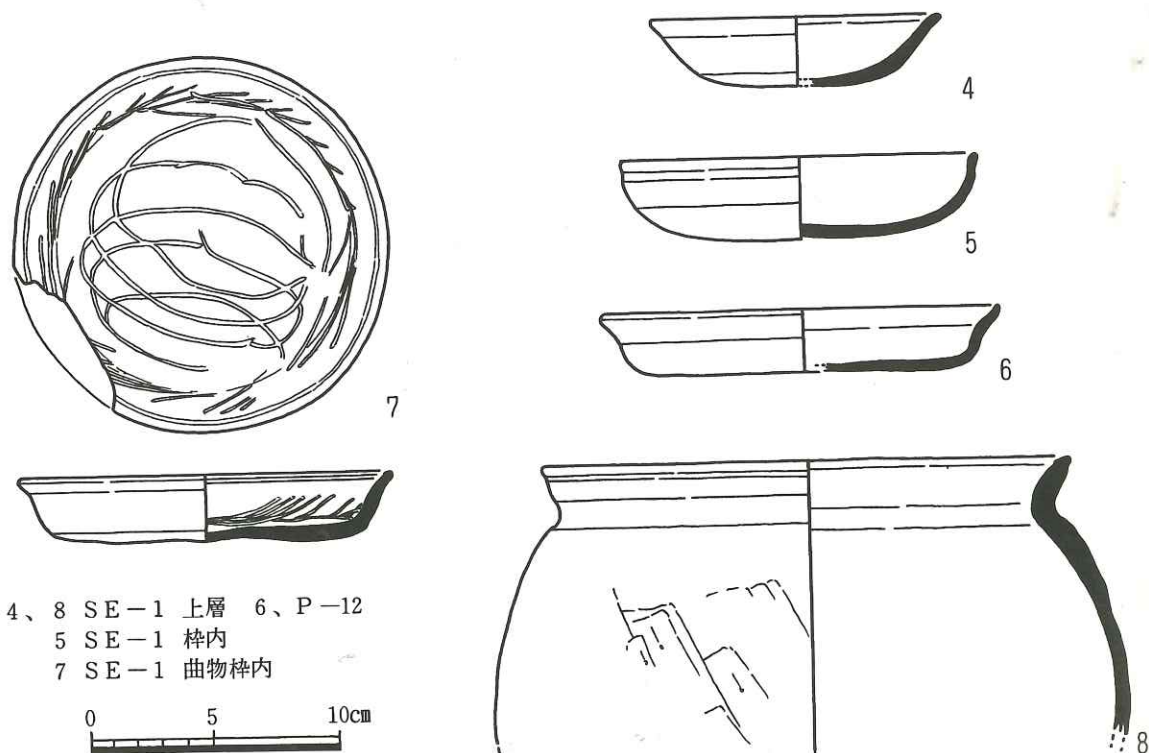


図15 T-1出土土器
1. 3. SK-1 2. SB-3



4、8 SE-1 上層 6、P-12
5 SE-1 梓内
7 SE-1 曲物梓内

図16 T-2出土土師器

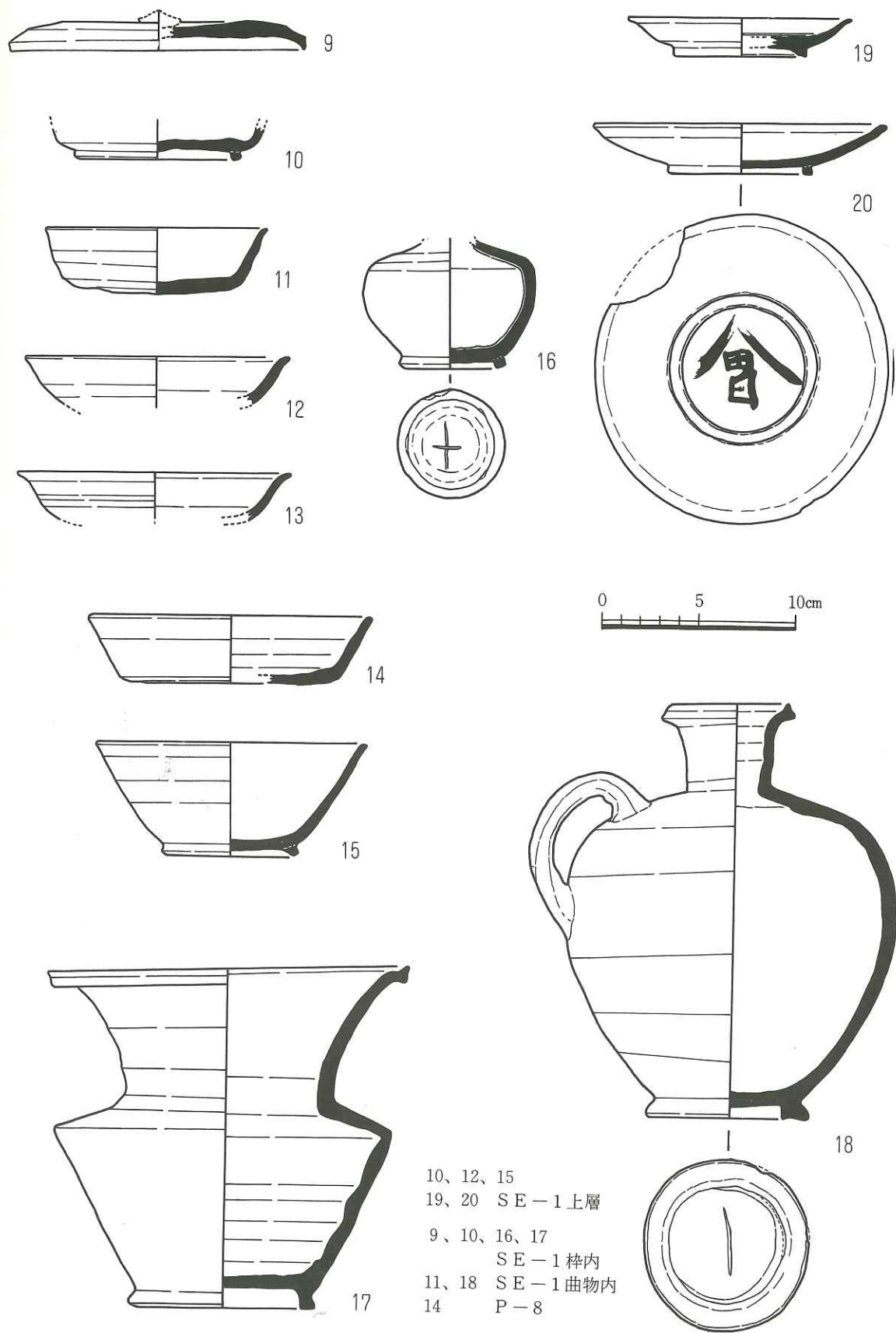


图17 T-2 出土須恵器

11は平坦な底部から外上方に口縁部をたちあげ、端部を外弯させる。口縁部は回転ナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切り未調整である。12、13は口縁部が外弯気味に外上方にのびる杯身である。14は口縁部を直線的に外上方にのびる杯身である。15は器高の高い杯身で、平坦な底部から内弯気味に口縁部が外上方にのび、端部をやや外反させる。底部に断面三角形の高台をはりつける。底部外面は回転糸切りをナデてすり消す。口縁部は回転ナデによる。16は壺である。肩部は直線的で体部下半は丸味を帯びる。底部に断面方形の高台をつける。内面には厚さ1～2mm程度の漆膜が付着している。外面にも黒色の付着物があり、漆容器と考えられる。底部には「十」のヘラガキがみられる。口縁部は欠損している。17は広口壺で、体部が直線的に外上方にひろがり、肩部で明瞭な稜をもって屈曲する。口縁部は外弯し、端部は外上方にたちあげる。底部は平坦で、断面台形の高台をつける。高台接合部の内側には瓜状の圧痕がみられる。18は、把手付長頸壺で、体部は丸味があり、口縁部はやや外反して直立する。口縁端部は外弯して直立する。底部は平坦で、八の字にひろく高台をつける。肩部には1ヶ所把手がつき、底部には「ノ」のヘラガキがある。体部上半には淡緑色の釉がかかる。1～14、16～18は平城V、IVを中心とする時期である。

19は緑釉陶器皿である。高台の内側に段をもつもので、10世紀後半から11世紀後半代のものである。20は、灰釉陶器の皿で、底部外面には「曾」の黒書土器がみられる。底部には断面方形の高台がはりつけられる。黒笹14号窯併行期に比定できる。

瓦 21、22は平瓦片である。21は凸面の縄目叩きを一部擦り消し、凹面は布目痕がのこる。

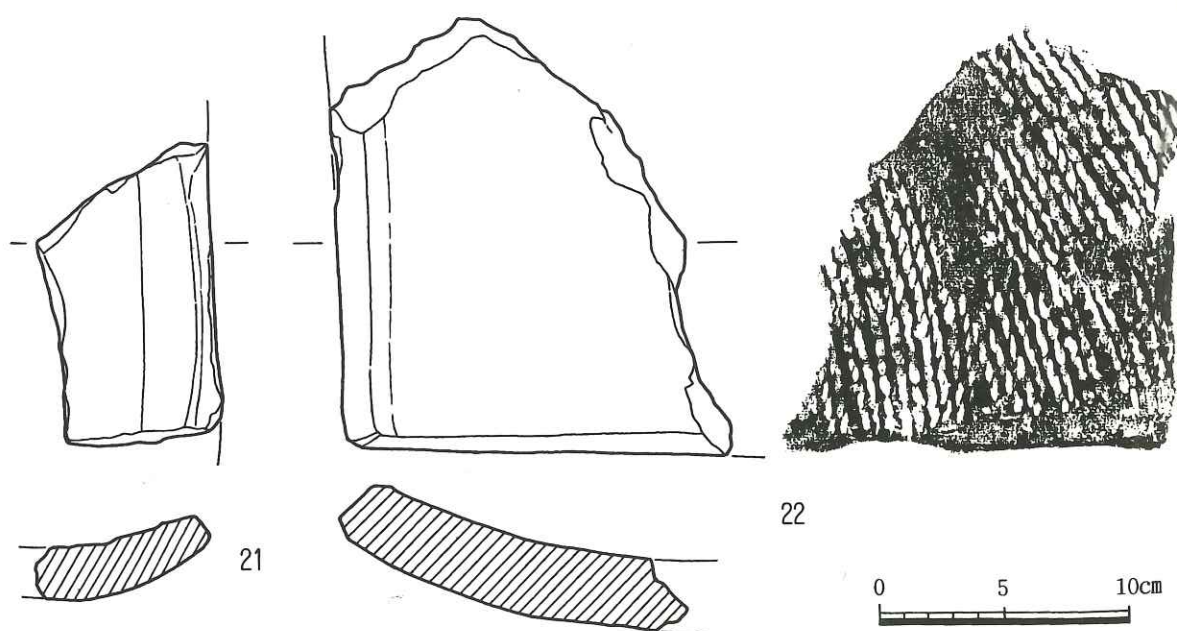


図18 SE-1出土瓦 21 上層 22 枠内

端面は面取りを施す。22は凸面を縄目叩きにより調整する。凹面の布目痕は、擦り消されている。端面は面取りを施す。部分的に火を受けた痕跡がある。

木 器

齋 串 23～25は、CⅢ型式の齋串である。23、25は上端部より一度の切りこみがあり、24は、端部よりやや下から切りこんでいる。23は現存長13.2cm、幅2.5cm、厚さ0.35cm、24は現存長15.1cm、幅3.35cm、厚さ0.1～0.2cm。25は全長15.1cm、幅2.5cm、厚さ0.1～0.2cmである。

このほかに、図化はできなかったが、SE-1から小型曲物1点、燃えさし2点、ひょうたん類の果皮が出土している。

参考文献

『平城京発掘調査報告』Ⅶ 奈良国立文化財研究所 1976

檜崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯址群分布調査報告Ⅲ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1984

森 隆 「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究会 1988

奈良国立文化財研究所編『木器集成図録』近畿古代編 1985

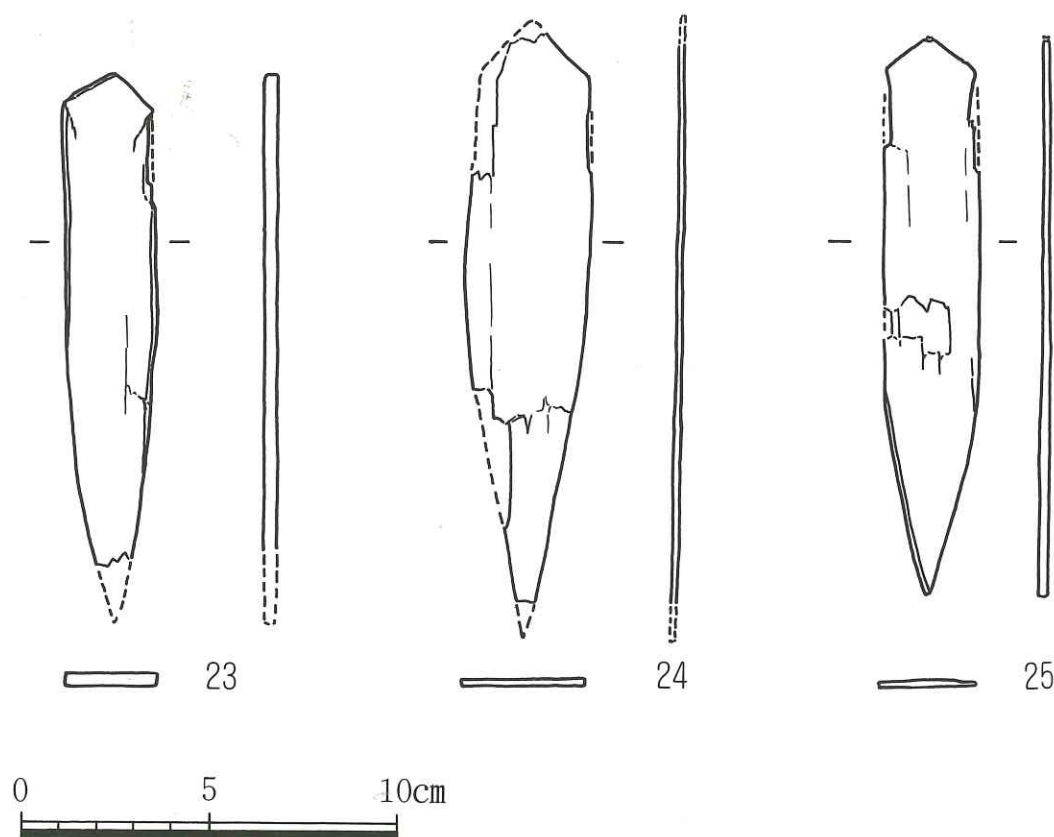


図19 SE-1出土齋串

(3) 1990年度調査区について

T-1の北に隣接する調査区である。1991年2月から3月にかけて、民間の造成工事にともない、建物敷地部分にあたる140㎡にわたり、発掘調査が行われた。調査では総柱建物と考えられる掘立柱建物の一部がみつかったため、北側の駐車場予定地においても、建物の規模を知るための確認調査を行っている。

調査区内の基本土層は、上から耕作土（層厚20cm）、区画整理時の盛土（層厚20cm）、黄色粘質土（層厚10cm）で遺構面にいたる。

区画整理時の盛土中からは、白鳳時代の瓦が数点みつかっている。

検出された遺構は、掘立柱建物3棟、溝2条である。

SB-1は、今回報告した1993年度調査T-1の、SB6の北側柱列にあたる。

SB-2は3間×3間の総柱建物である。柱間距離は2.15m、柱掘り方は隅丸方形で、1辺0.6~1.6mであ

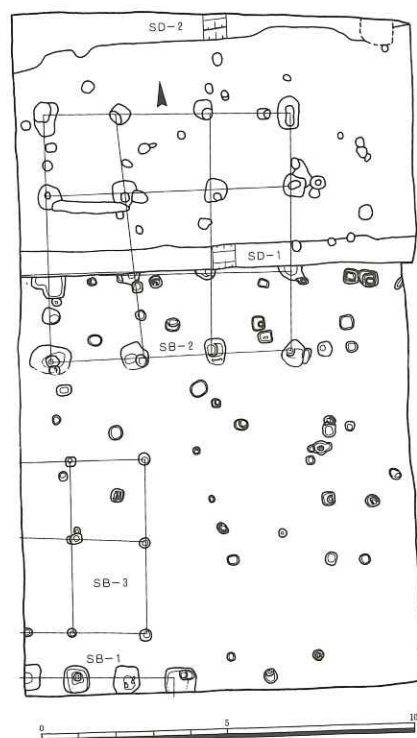
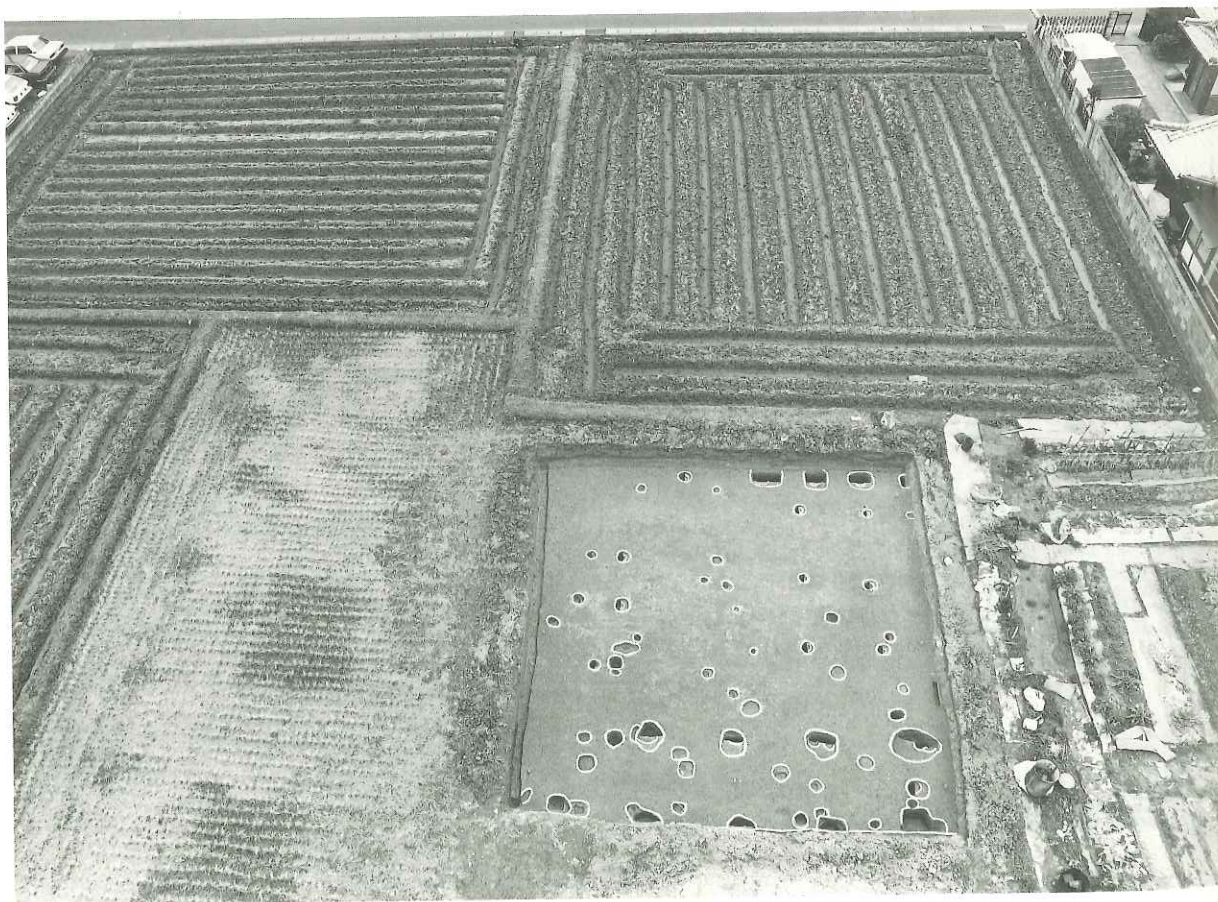


図20 1990年度調査地遺構図



1990年度調査区

る。

S B-3 は2間以上×2間の掘立建物である。柱穴は円形で、直径0.3mと小規模である。

S D-1 はS B-2 埋没後の溝で、幅0.7m、検出面からの深さは0.4mである。黒色土器、土師器、土錘、須恵器が出土している。

S D-2 は拡張部分北端でみつかった東西方向の溝で、須恵器が出土している。

このほかに、小規模な柱穴がいくつかみつかったが、建物としてのまとまりは確認できなかった。

以上の遺構は、S B-1、2 およびS D-2 が奈良時代～平安時代に、S B-3 およびS D-1 は中世の遺構であると考えられる。建物にともなう遺物は、ほとんどみつかっていない。

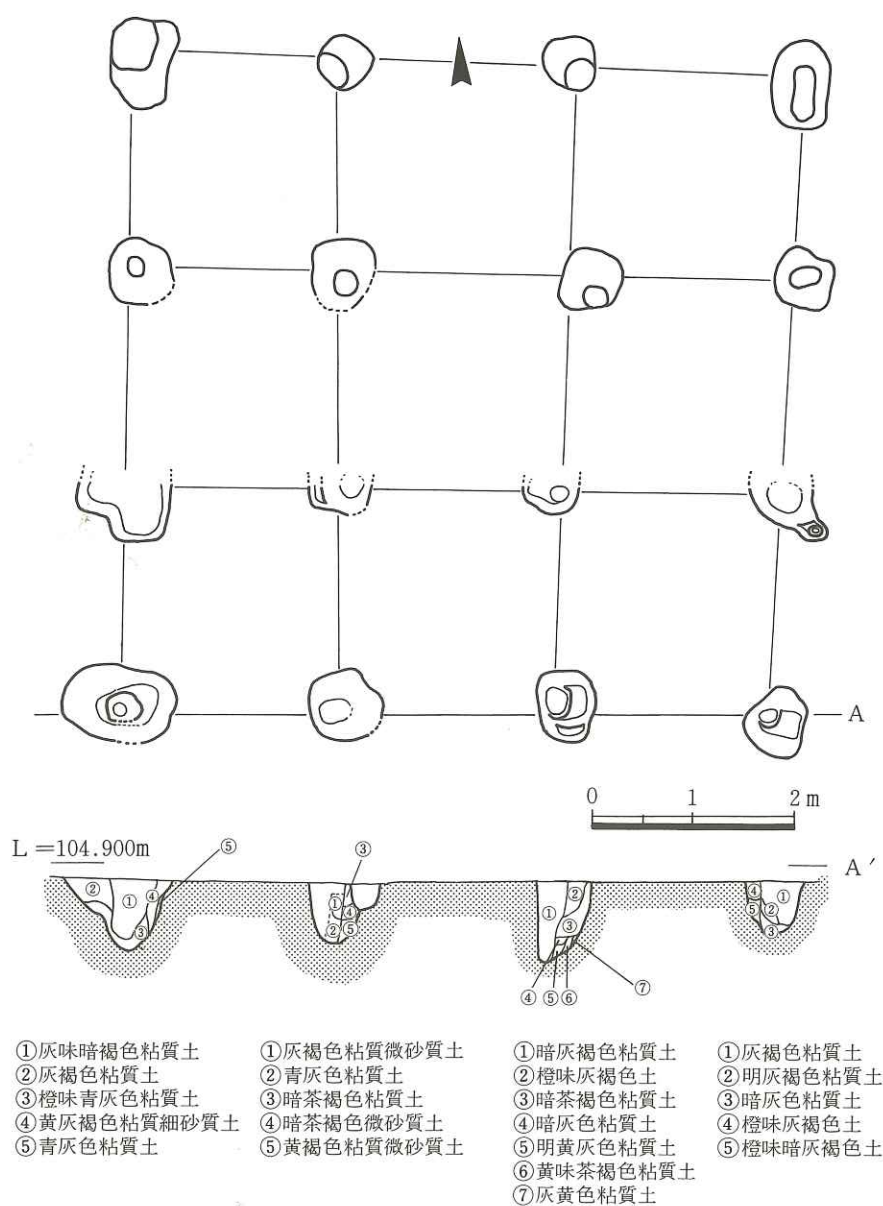


図21 遺構実測図 (S B-2)

4. 小結

(1) 律令期以前の手原遺跡

手原遺跡では、古くから白鳳時代の瓦が採取されていることや、昭和56年以降の調査で総柱建物群を主体とする遺構がみつかったこと、正南北方向の地割がみられることから、古代の寺院や役所跡が想定されてきた。ところが、それを逆る時期の遺構については、従来あまり明らかにされていない。

1993年度調査のT-1、T-2では、律令期を逆る遺構が発見された。T-1のSB-1～SB-3は小規模な掘立柱建物群である。またSK-1も、埋土が類似していることから、同時期のものと考えられる。SK-1の周辺にある弧状の溝も同時期である可能性が高い。各遺構とも、遺物は破片のみの出土で時期を限定するのは難しいが、概ね布留式古段階併行と考えられ、古墳時代初頭の集落であるということが出来る。

栗東町内の弥生時代の集落は、下鉤・野尻・中沢・小柿・坊袋遺跡など、琵琶湖寄りの沖積地でみつまっている。古墳時代がはじまるころになると、集落は野洲川左岸の高野遺跡などでも形成され、大規模に展開する。今回みつかった建物群も、そうした古墳時代初頭における集落の移動・拡大の現象の一端であるといえよう。

さらに、T-1の建物群は、掘立柱建物のみで構成されるという特徴がある。こうした建物群は、弥生時代から古墳時代前期には、栗東町下鉤遺跡のように祭殿等と考えられる建物に付随するものと、近江八幡市出町遺跡の例のように掘立柱建物からなる集落がある。手原遺跡で当該期の建物群やほかの遺構はこれまでに例がなく、集落の全体像は現状では明らかではない。T-1の建物が集落内における祭祀行為を伴う特別の空間であったか、

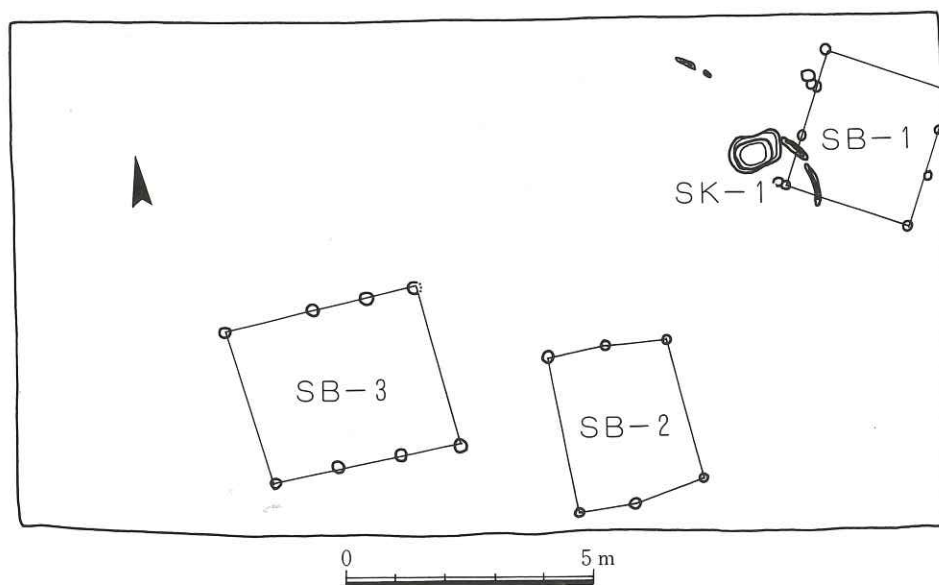


図22 T-1 古墳時代初頭の遺構図

もしくは、掘立柱建物のみで構成される集落であったかは、今後の調査成果に委ねられよう。

T-1、T-2 にわたって、みつまっているSD-1は正南北地割形成以前のものと考えられる。これは断面台形状を呈する溝であるが、最上層より白鳳期の瓦が出土しているので、溝の年代は正南北地割形成をさほど逆のぼる時期のものではないと考えられる。このような溝は手原遺跡内においてはしばしばみつまっている。後述する1992年度調査区でも、SD-1の方向に直交する方向の溝が検出されている。こうした溝は、正南北地割形成以前にも、比較的広範囲にわたる開発が当地においてあったことを示唆するものであろう。

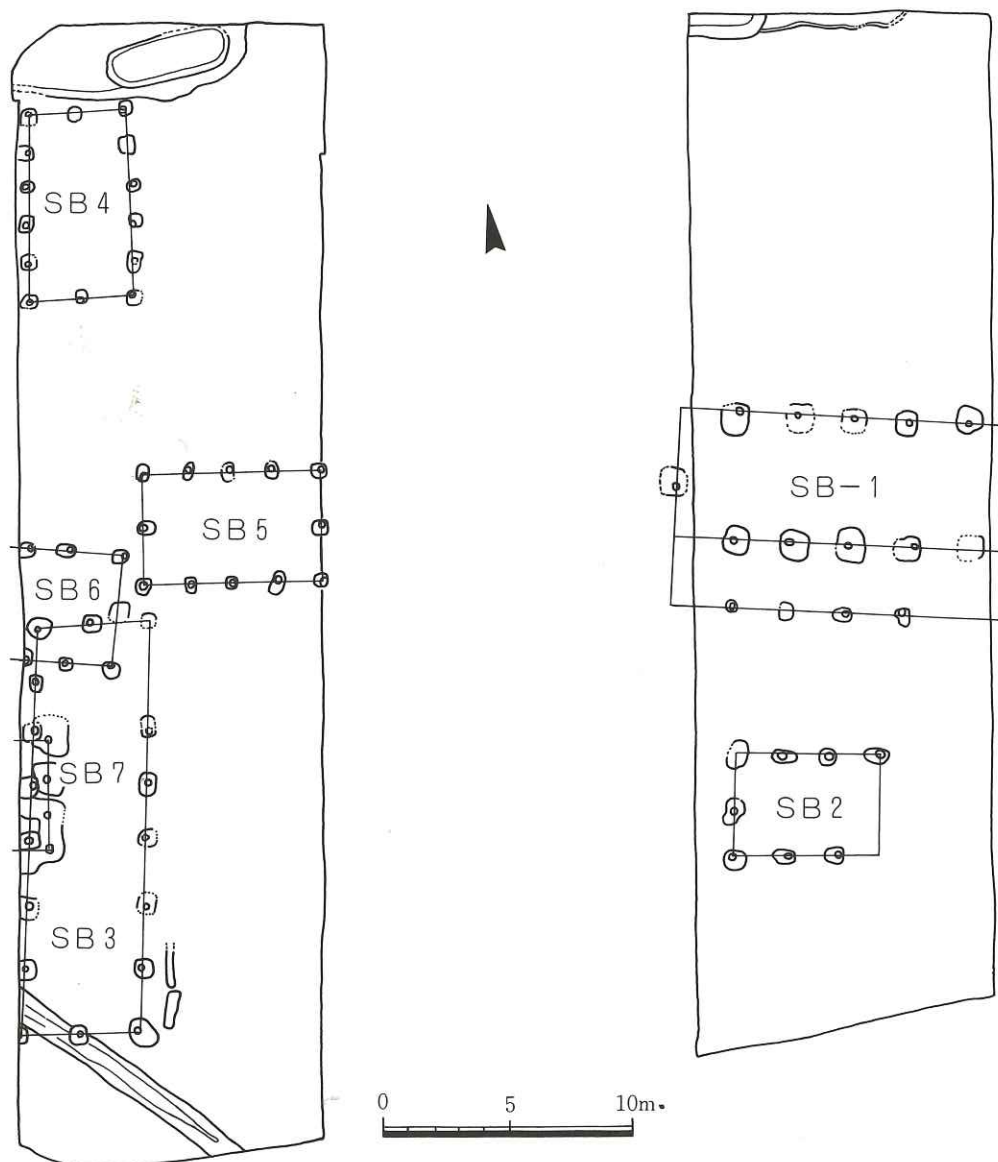


図23 1992年度調査区遺構図

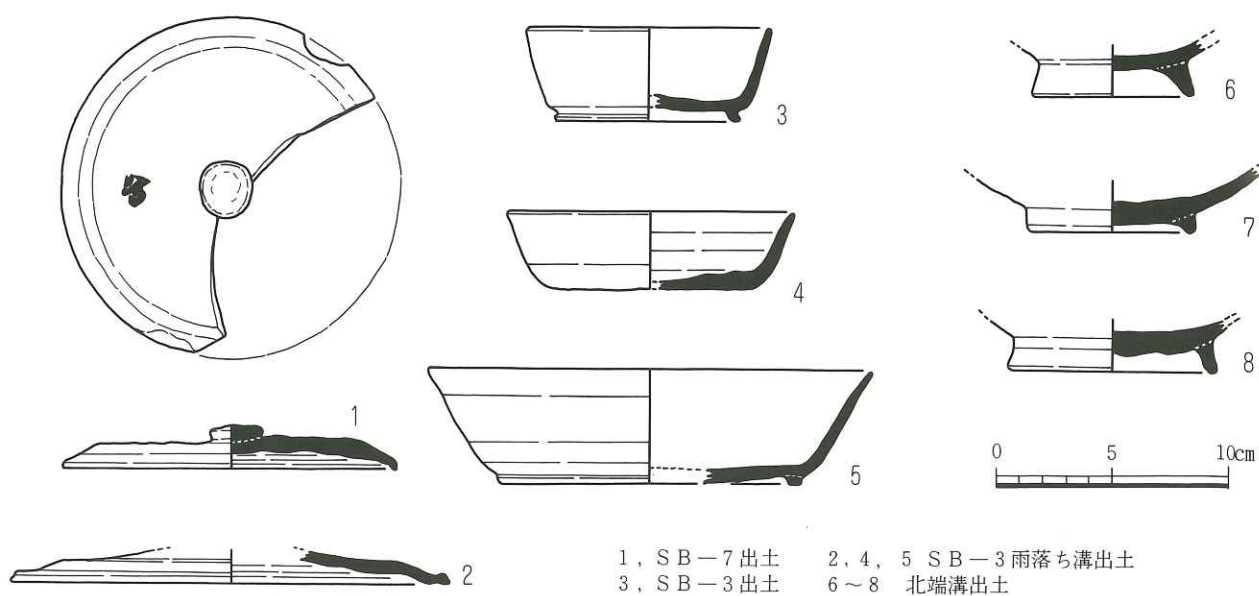
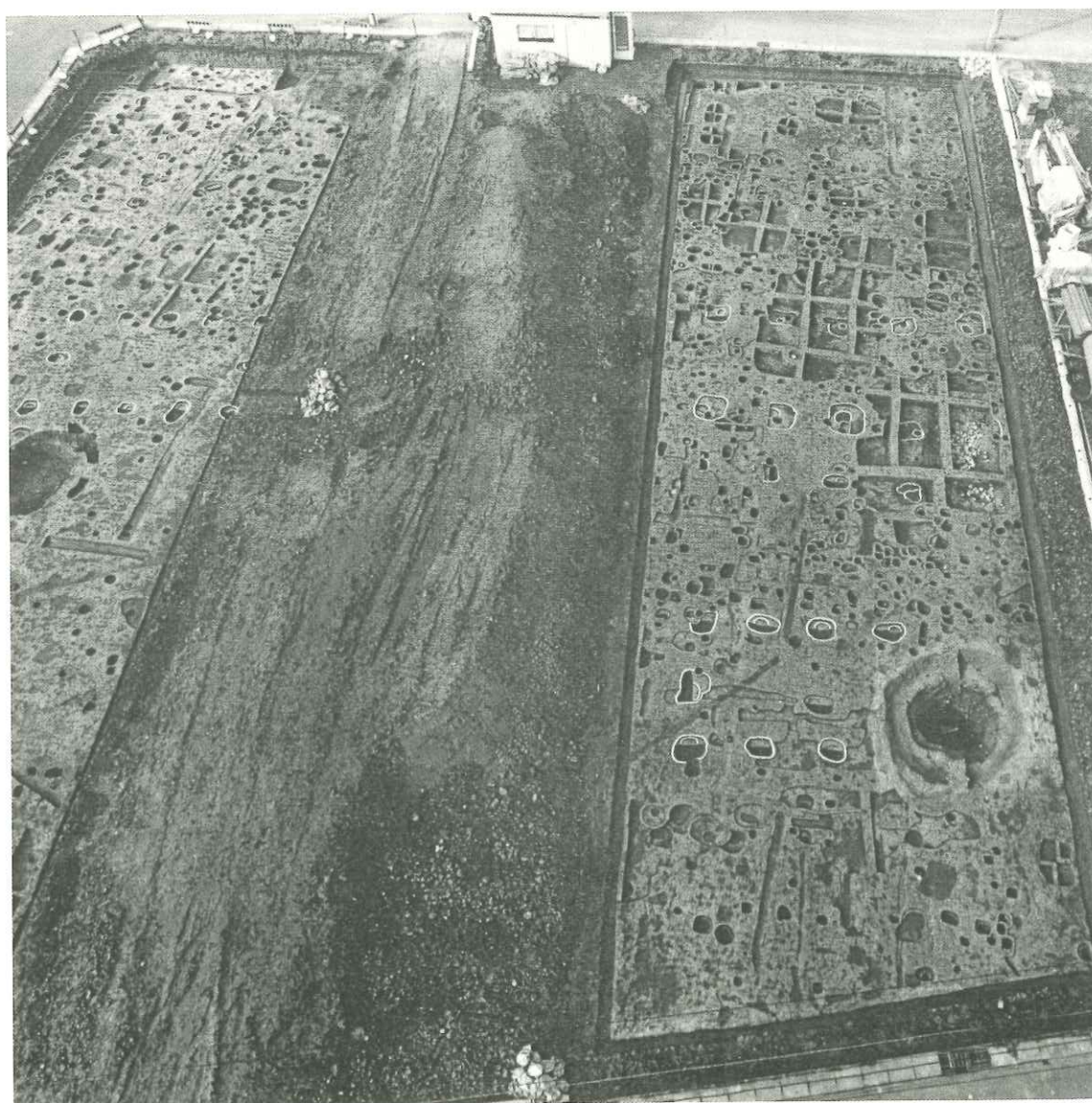


図24 1992年度出土土器（1～5 須恵器、6 土師器、7, 8 灰釉陶器）



1992年度調査区全景写真

(2) 律令期の遺構について

T-1、T-2 から検出された律令期の遺構は、掘立柱建物 8 棟、井戸 1 基である。このうち、掘立柱建物の柱穴から出土した遺物は細片で、時期を特定することは難しい。そこで、伴っている井戸の年代を建物の年代の参考にする必要がある。

SE-1 の曲物枳内および割りぬき枳内から出土した土器は、奈良時代後半～末のものである。さらに上層には 9 世紀後半および 10 世紀後半～11 世紀後半代の土器が含まれており、最終的な井戸の埋没は平安時代中頃であったと推定できる。このうち井戸が実際に使用されていたのは、枳内の土器が示す奈良時代後半～末の年代である。枳内では、土器のほかに斎串や燃えさが出土しており、斎串を使用している層は 1 個体ずつ異っているもので、井戸が継続的に使用・祭祀・堆積を繰り返していたものと考えられる。

建物群は相互の切り合いはないが、SB-4 はやや西に振った方向を示していること、SB-5 および SB-6 は接近しすぎていること、柱穴の形態が大きく異なることなどから、同時に存在していた可能性はひくい。現段階ではその変遷を明らかにすることは、遺物の少なさから難しいが、井戸の年代が示す 8 世紀後半～末を前後する時期に建物の年代幅をあてはめることができよう。北側に隣接する 1989 年度調査区で出土している総柱建物は奈良～平安のものと考えられており、本調査区付近の建物群の存続年代を示すものと考えられる。

(3) これまでの手原遺跡の調査から

これまでの手原遺跡の調査で注目をあつめているのは、柱筋を揃えた総柱建物群である。総柱建物群は手原遺跡北半、小字北原・松黒地区に集中してみられる。建物の規模は、2 × 2 間、3 × 2 間のものがほとんどで、3 × 3 間のものも存在する。床面積は 15～36㎡と小規模である。手原遺跡の北 3 km に存在する岡遺跡（栗太郡衙推定地）の倉庫は、規模は 4 × 3 間、3 × 3 間、床面積が 63㎡～38㎡であるので、規模の違いが明らかにみられる。手原遺跡倉庫群の時期は 8 世紀後半を前後するものである。

1992 年度の調査では、倉庫群が集中する両地区の中間、小字竹ノ花地区で規模が大きい掘立柱建物が検出されている。調査は 907㎡にわたって行われており、古代の掘立柱建物およびそれに先行する溝がみつかった。SB-1 は 6 間以上 × 2 間の南面庇付の東西棟である。柱掘り方は 1 辺 1.8m を計る。SB-1 の前面には 4 × 2 間の掘立柱建物（SB-2）がある。SB-1 の東西には小規模な東西棟（SB-5、および 1991 年度調査区）があるが、SB-1 とは方向がやや違うため、同時に存在しない可能性が高い。SB-4 は SB-5 と軸方向が類似している、5 間 × 2 間の掘立柱建物である。SB-3 は 7 間 × 2 間の桁行が長い南北棟である。SB-3 の東側に並行する溝は雨落ち溝と考えられる。SB-7 は SB-3 に先行する掘立柱建物で、掘り方が隅丸方形で規模が大きい。柱穴から

須恵器杯蓋が出土している。調査区の北端には長楕円形の東西方向の溝が検出されている。

以上の建物群からは8世紀後半代の須恵器が出土している。また、北端の楕円形溝からは灰釉陶器が出土している。

(4)手原遺跡の全体像

手原遺跡では、これらの成果をもとにすると、8世紀後半を中心とする時期には以下のような性格を異にする建物群があったことがわかる。

I. 中心的な建物一庇付大型建物や桁行の長い建物で構成（1992年度調査区）

II. 柱筋を揃えて並ぶ倉庫群

III. 井戸をとめない、大型の建物や倉庫を組み合わせて構成（T-1など）

なかでも、IIはIを中心にシンメトリックに配置されており、高い企画性があったことをうかがわせる。こうした配置は、規模のちがいはあるものの、栗太郡衙と推定されている栗太郡岡遺跡で、郡庁と考えられる回字状の区画の東西に、総柱建物群からなる正倉がおかれているというパターンに類似するものである。

今回報告したT-1をふくむ、IIIの建物群は、中心的な建物をもつIに対して、より周縁部に配置されているようである。

このように、それぞれ性格が異なる建物群をブロックに分けて配置する形は、集落よりもむしろ、官衙にみられる特徴のひとつである。先述した岡遺跡では、その盛行する時期が8世紀前半から後半に求められており、8世紀末から9世紀代になると区画が大きくなって規模を縮小させる。手原遺跡の出現はこうした岡遺跡における動きとも連動している可能性があると考えられ、手原遺跡の性格を考える上で重要な要素であろう。

参考文献

岩崎直也他「出町遺跡（21・22次調査）」『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書XXV』

近江八幡市教育委員会 1993

佐伯英樹「下鉤遺跡」『栗東町埋蔵文化財調査 1992年度年報』（財）栗東町文化体育振興事業団 1993

平井寿一他『岡遺跡発掘調査報告書』 栗東町教育委員会・（財）栗東町文化体育振興事業団 1990

大崎隆志「手原遺跡」『栗東の歴史』資料I 第四巻 栗東町史編さん委員会 1994

大橋信弥・大崎隆志『手原遺跡発掘調査報告書—栗東町商工会館建設に伴う調査』
栗東町教育委員会・栗東町埋蔵文化財調査団 1981

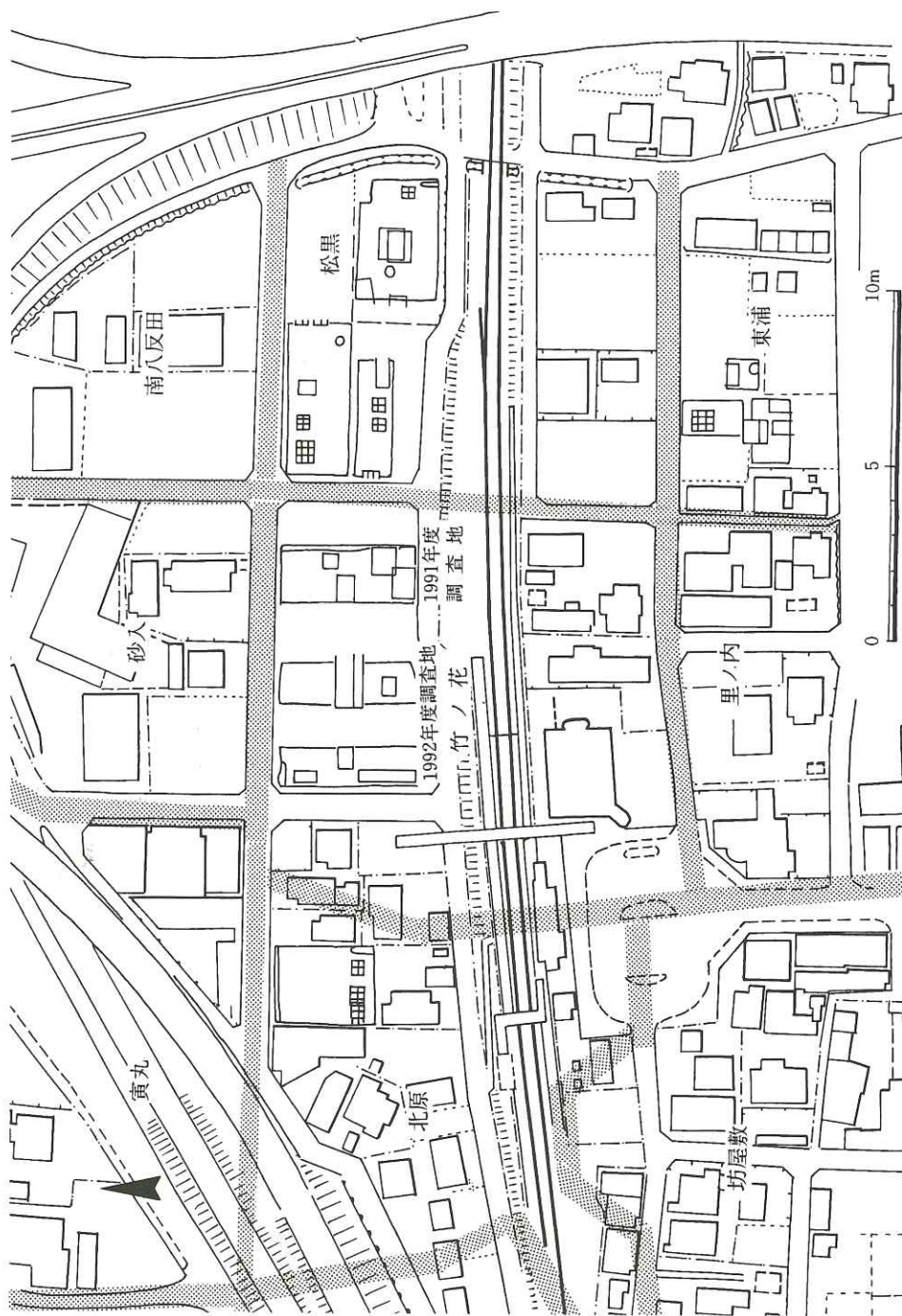
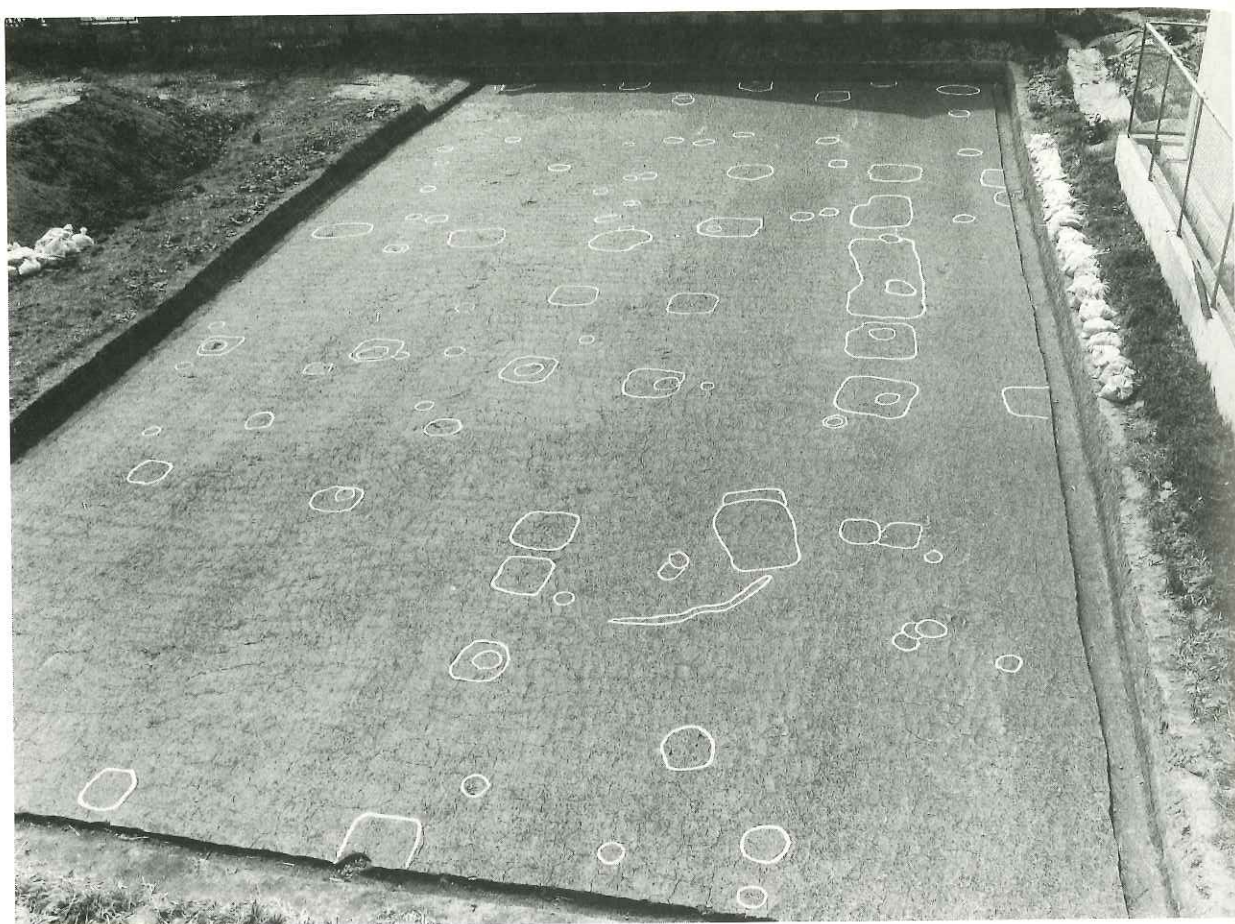
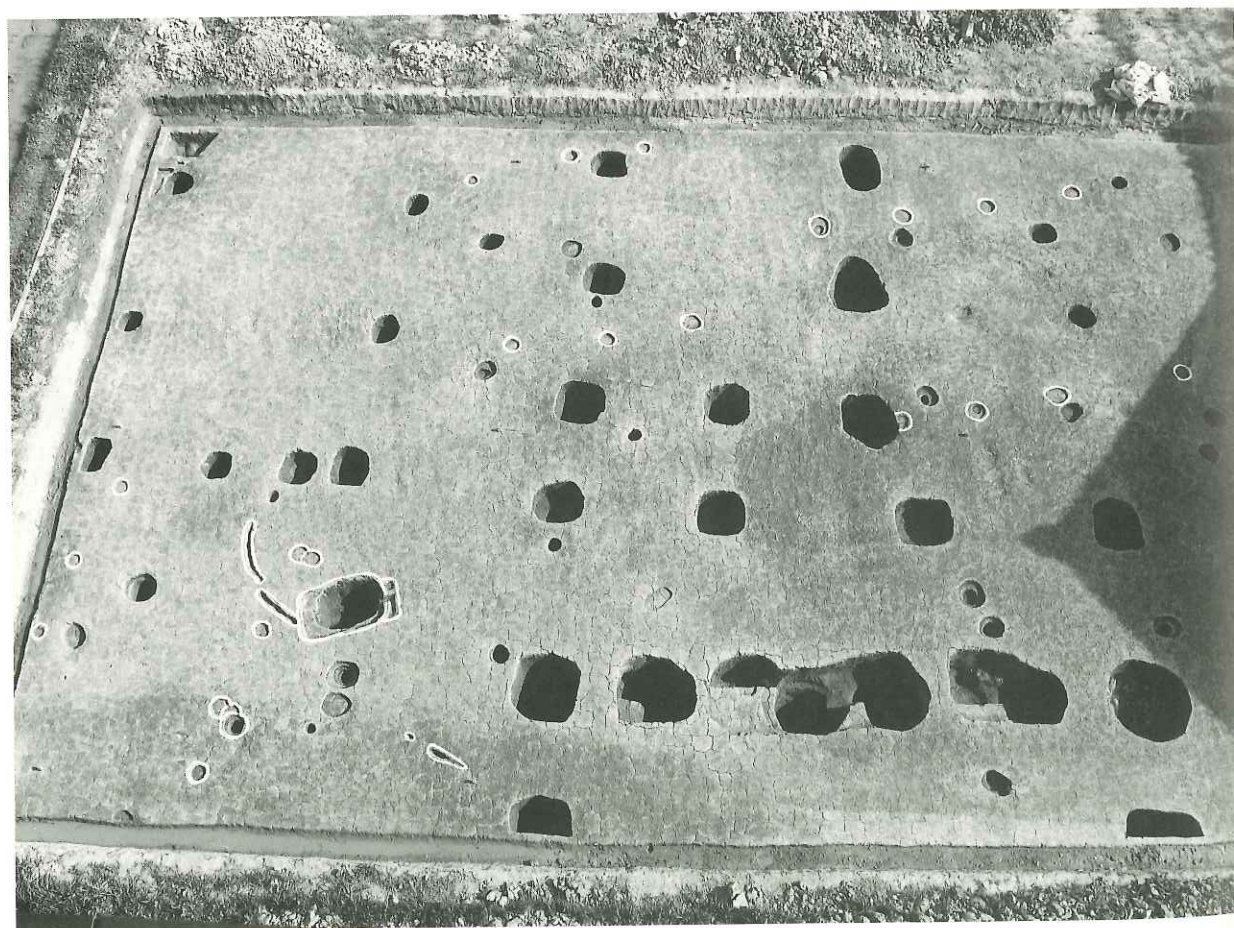


図25 手原遺跡全体図



T-1 検出状況



T-1 全景写真

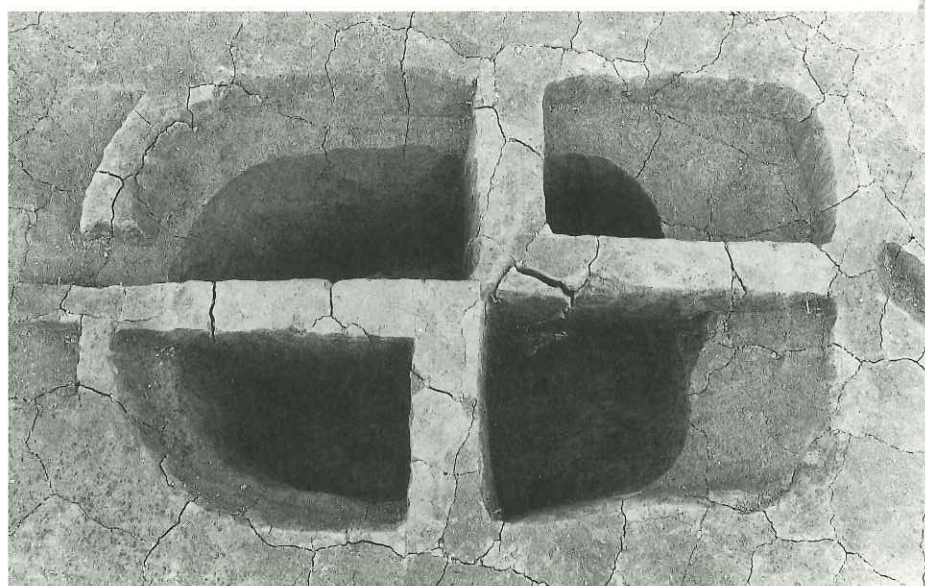
S B - 2 ▶

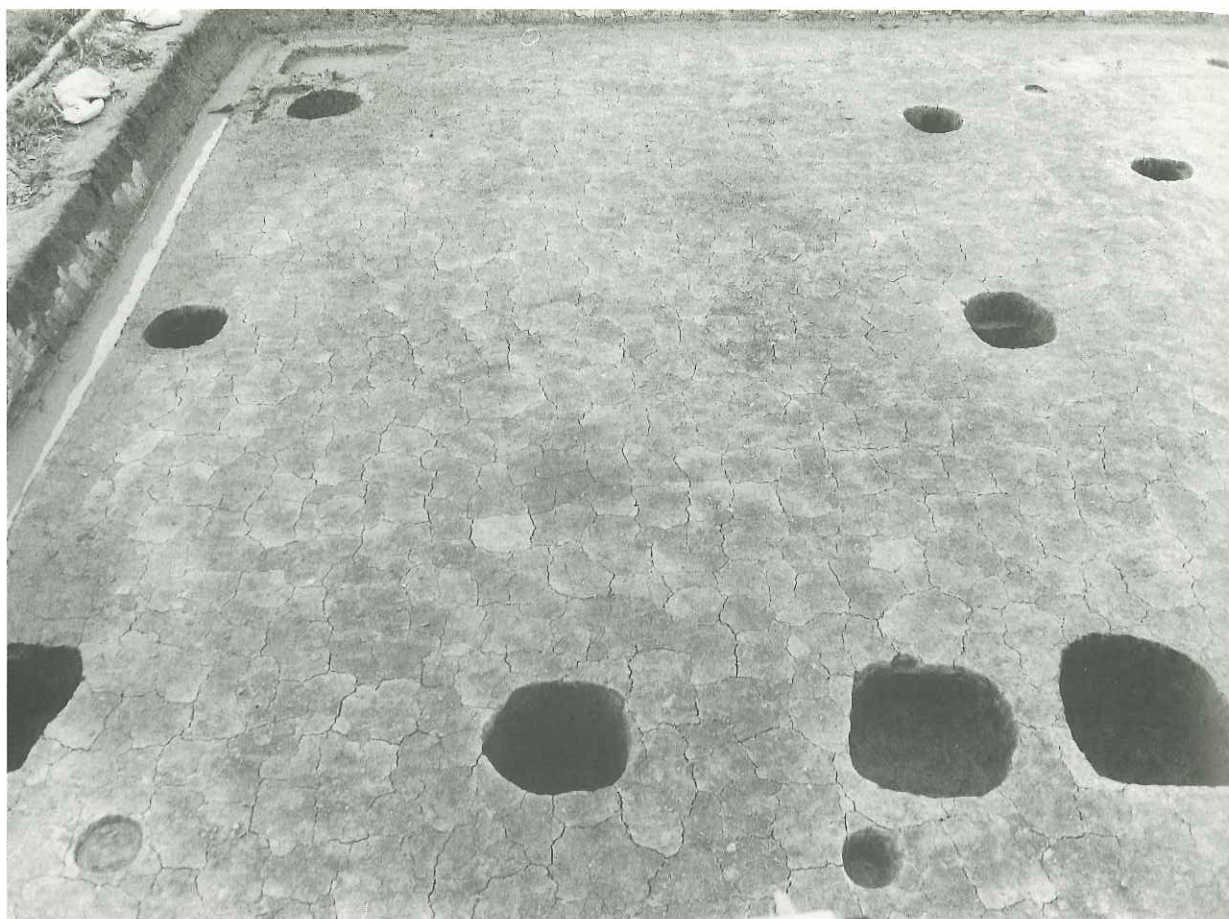


S B - 3 ▶

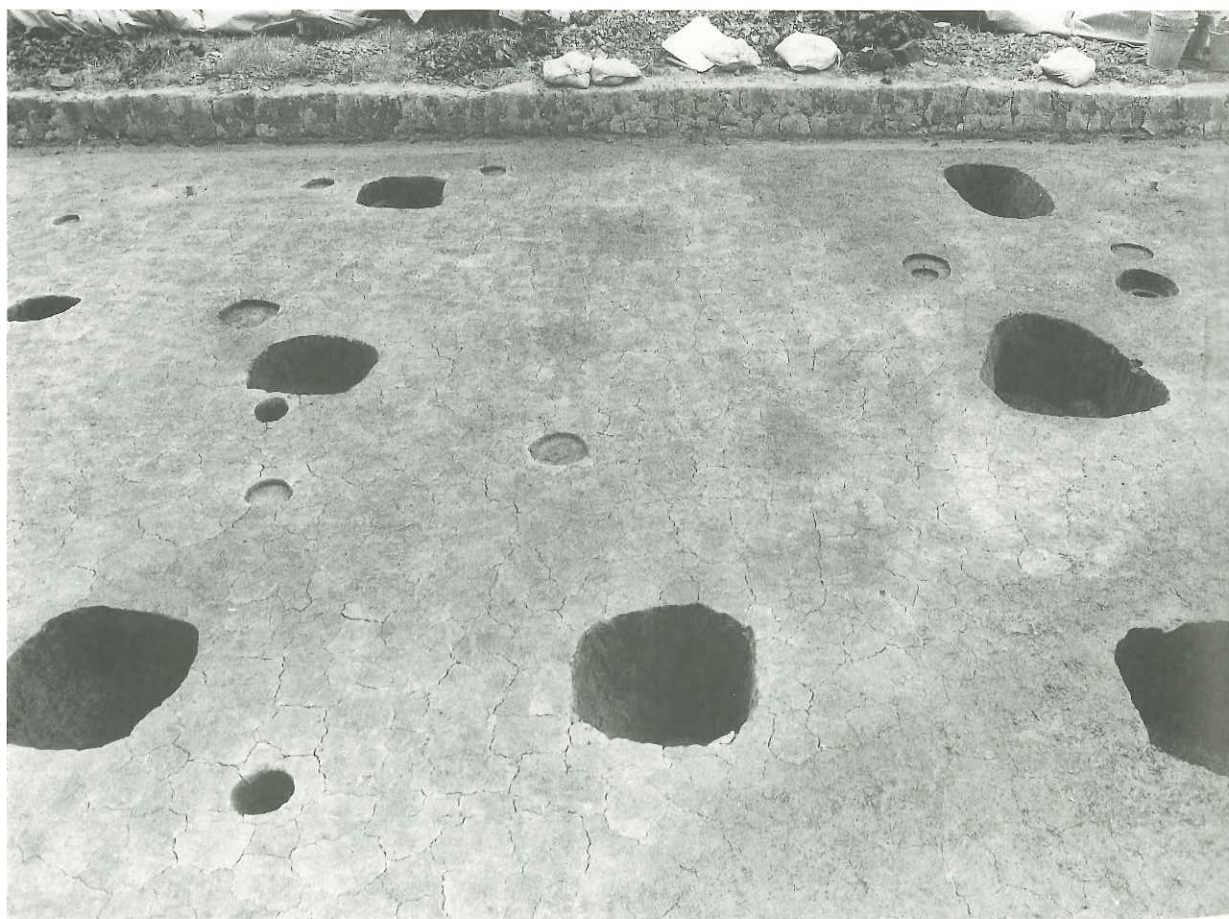


S K - 1 ▶





SB-4



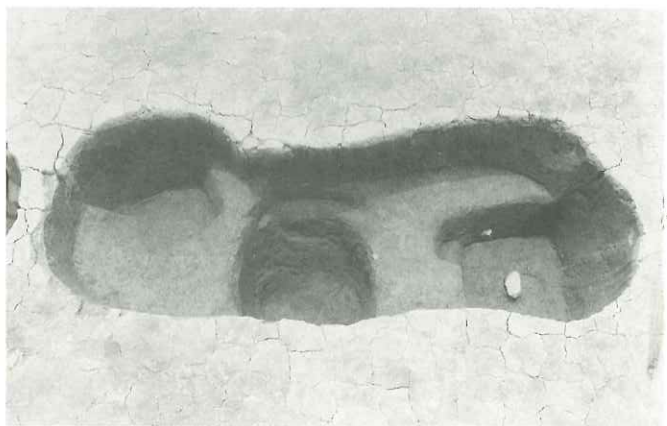
SB-5



SB-6



SB-4 調査状況



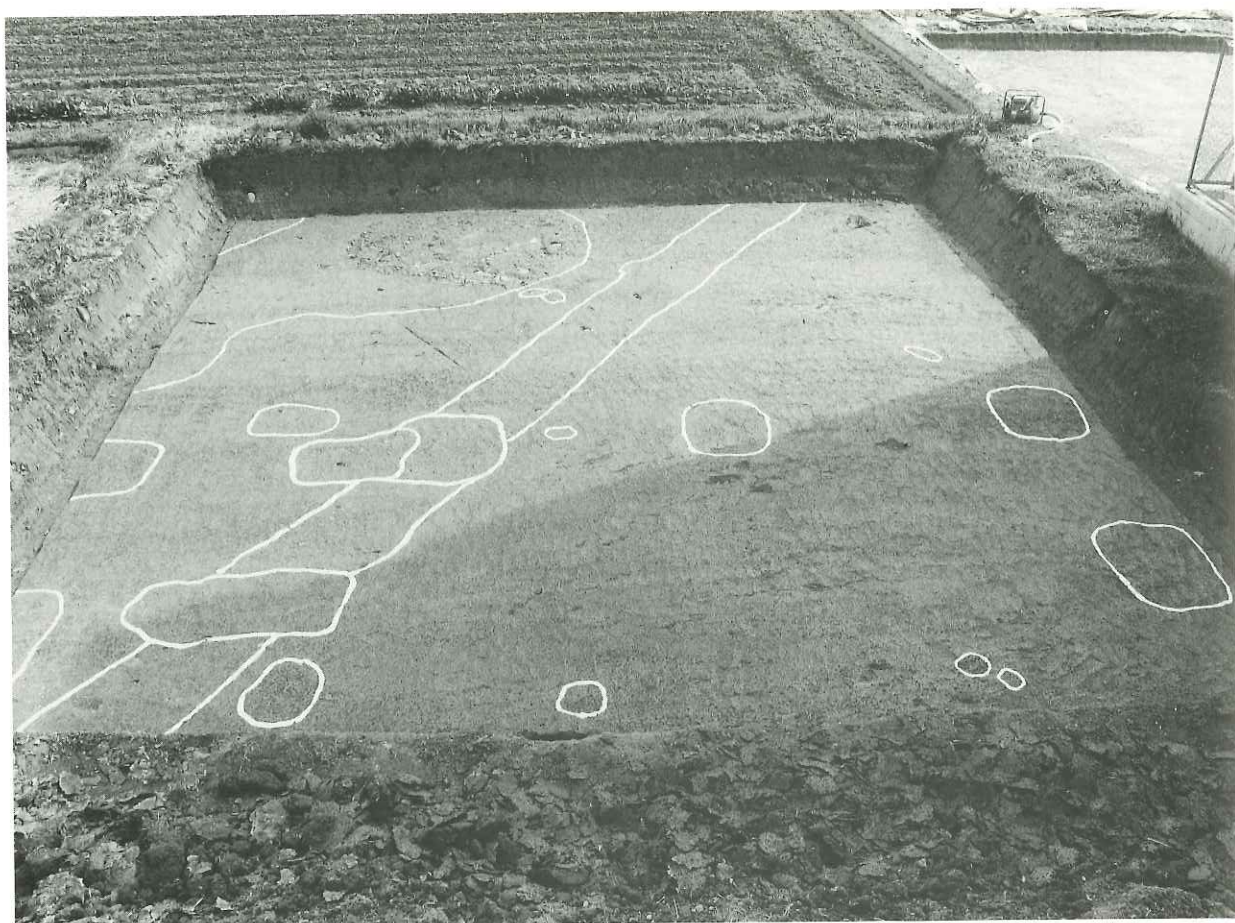
SB-6 柱穴



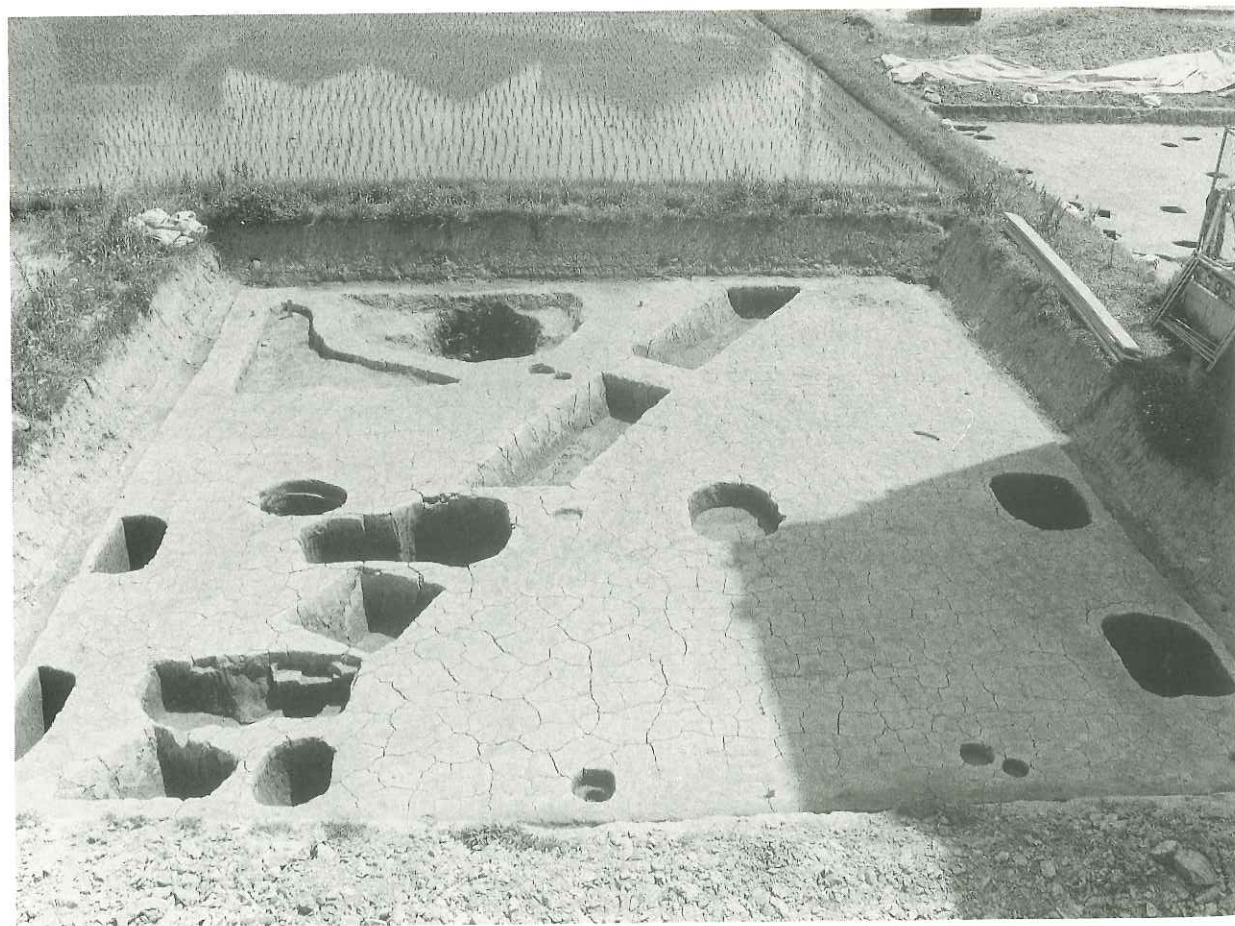
SB-6 掘削状況



SB-6 柱穴断面



T-2 検出状況



T-2 完掘状況

T-2 堀削風景▶



T-2 SB-8柱穴▶



T-2 SD-1断面▶





SE-1 全景



SE-1 底 曲物粹



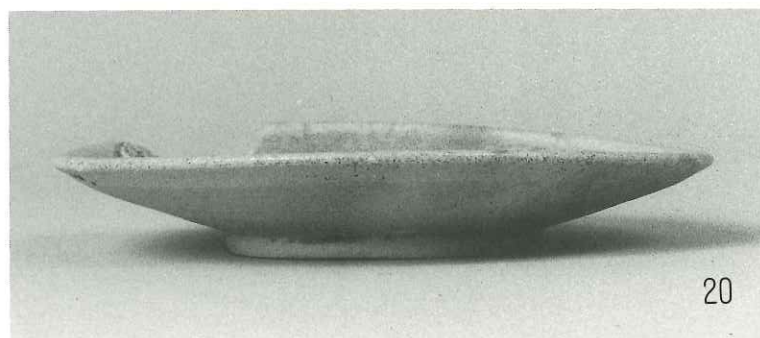
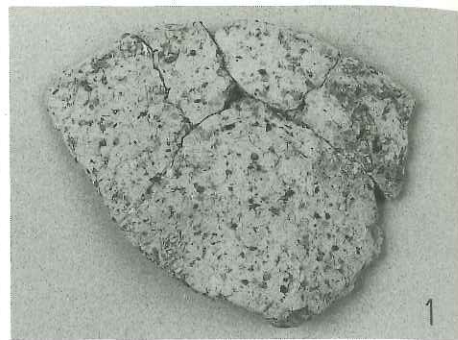
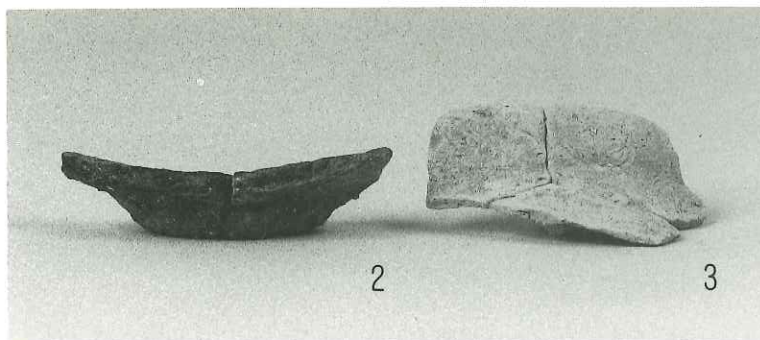
SE-1 上層墨書土器出土狀況



SE-1 漆容器出土状況

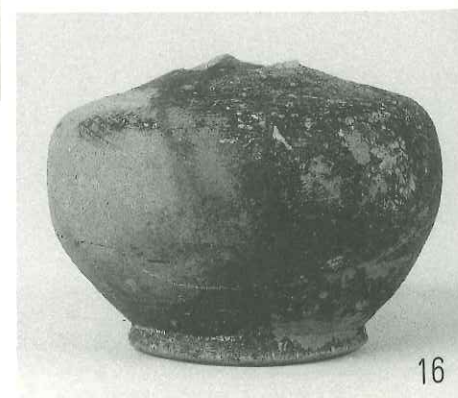


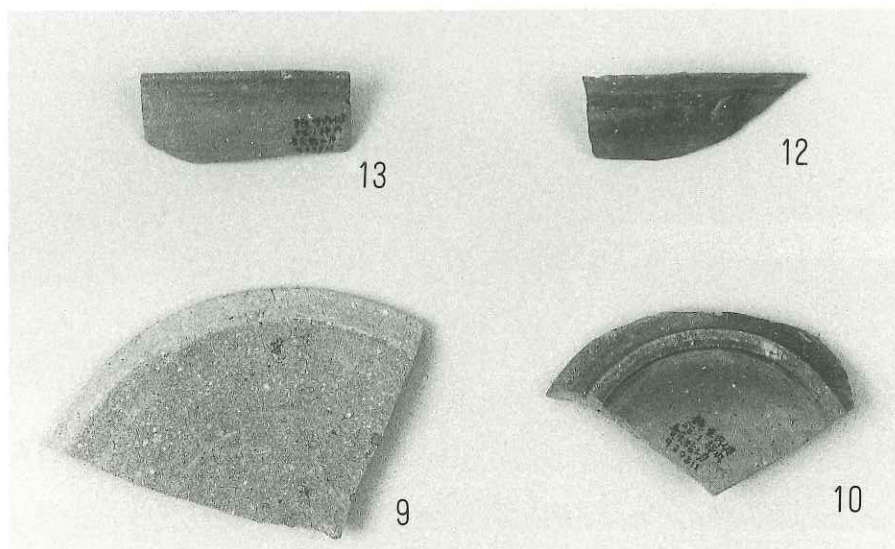
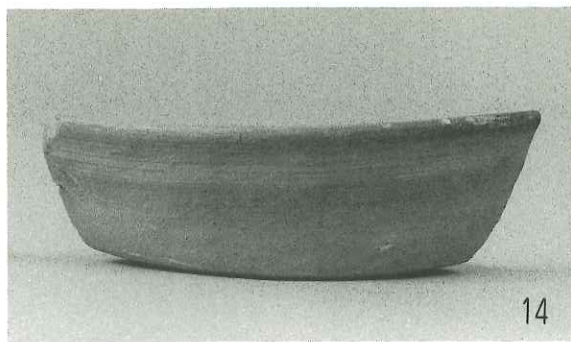
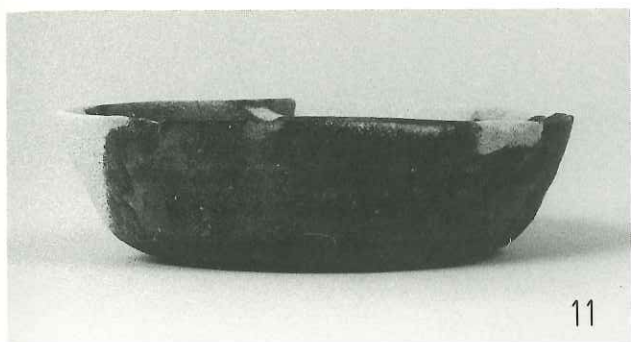
SE-1 把手付長頸壺出土状況



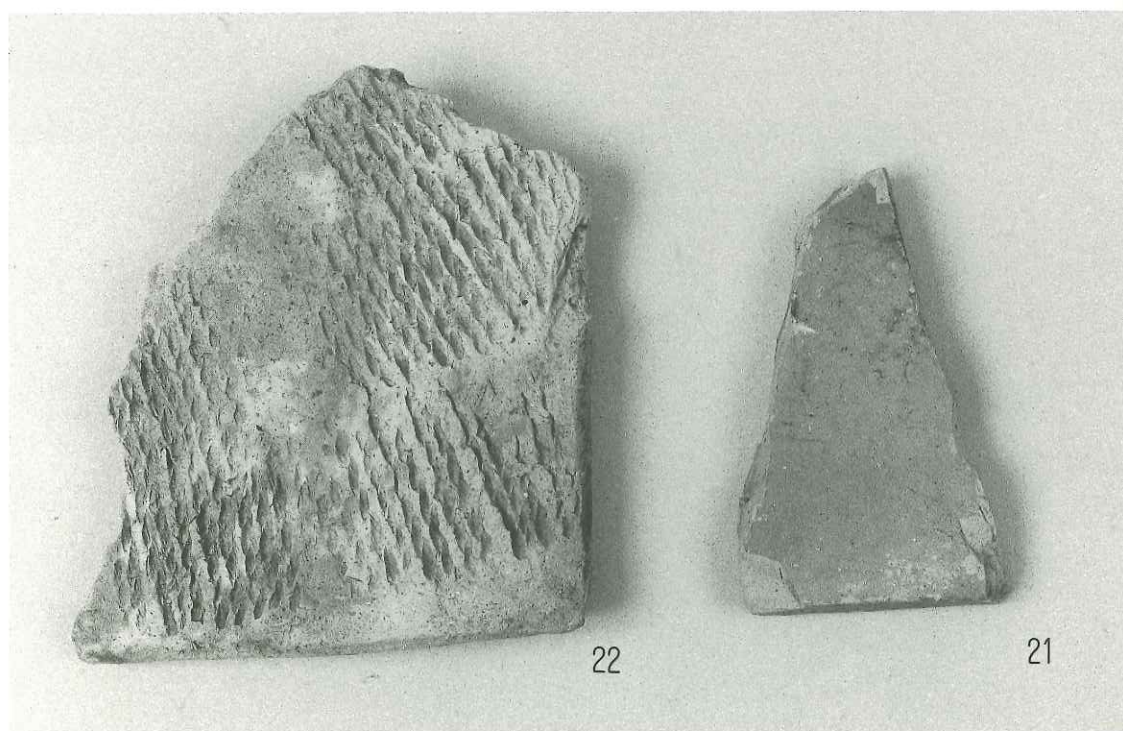
土器16 内付着物

T-2 SE-1 上層出土土器





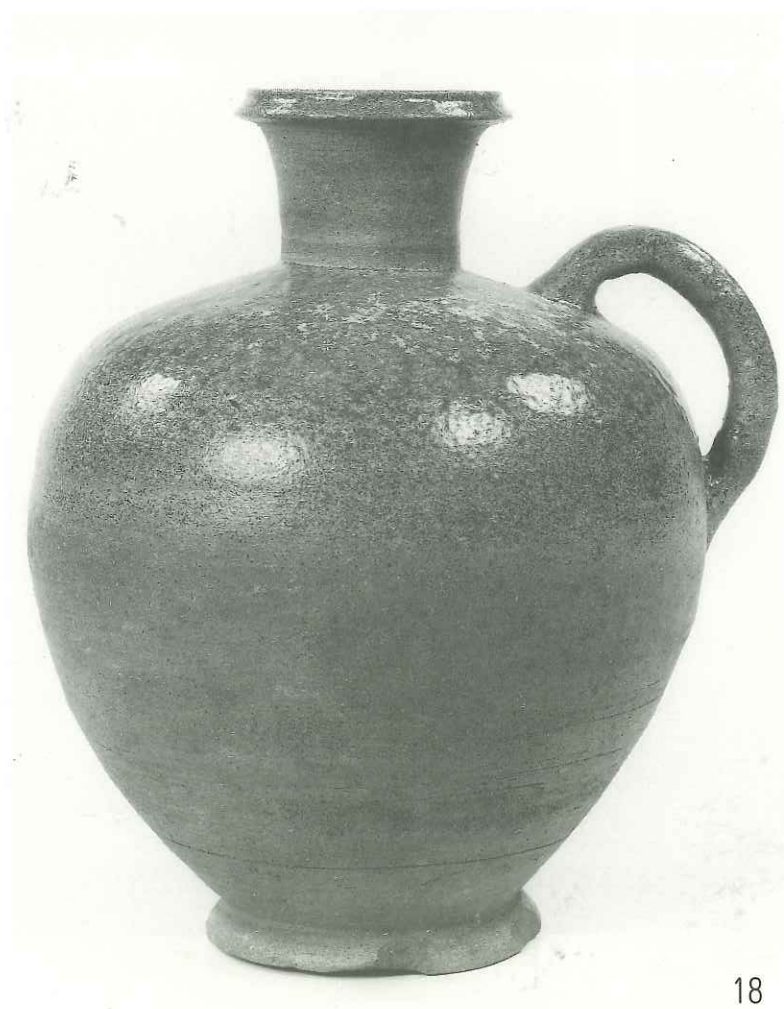
T-2 出土土器



SE-1 出土瓦



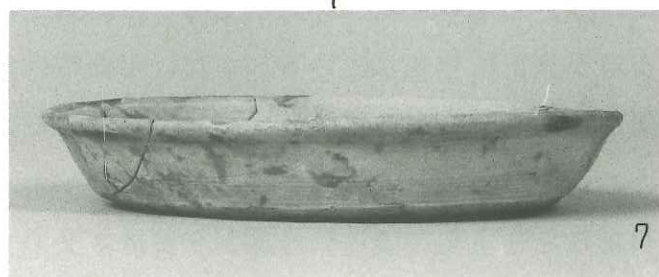
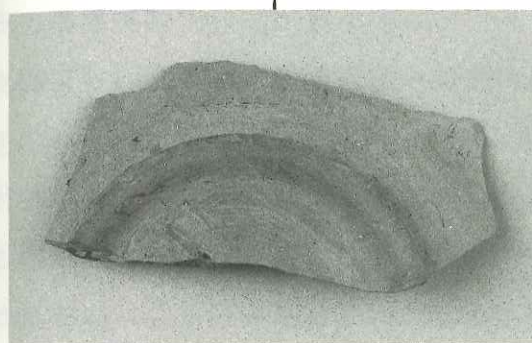
17



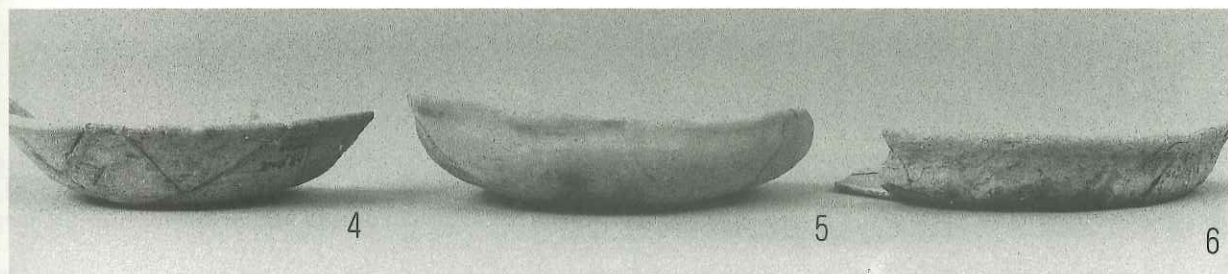
18 SE-1 出土須恵器



19



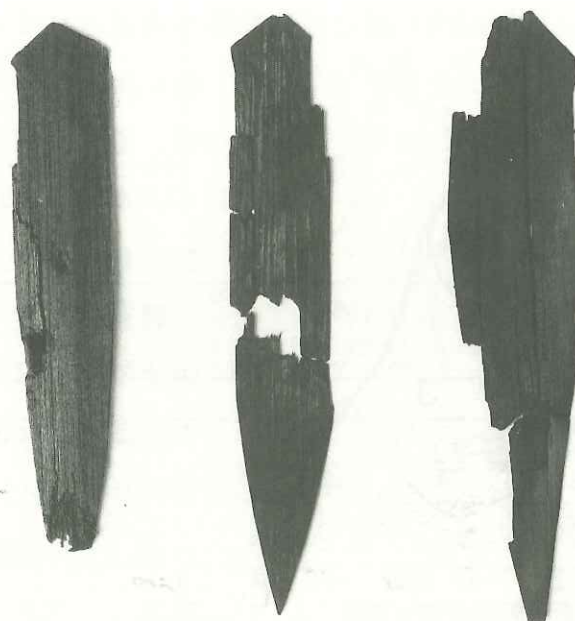
7



4

5

6



SE-1 出土木製品

第2章 辻・高野遺跡

1. 位置と環境

辻・高野遺跡は、野洲川によって形成された沖積平野の扇状地における、自然堤防状微高地上に立地している。遺跡の周辺は、野洲川の支流である中小河川がいくつも流れ、その代表格である中ノ井川が、調査地の中を東から西へ向かって流れている。遺跡の立地する標高は、おおむね106.5m前後である。

辻および高野遺跡の存在する野洲川左岸一帯は、隣接する岩畑遺跡も含めて、古墳時代を中心とする大規模な集落群を形成している。竪穴住居は、これまでに400棟以上確認されており、玉類の生産、韓式系土器や、陶質土器の存在、鉄器保有率の高さ等、注目すべき資料が豊富に存在している。また、平安時代から江戸時代を中心に栄えた「辻の鋳物師」関連の遺構、遺物が近年注目を集めている。

この地域が栄えた背景には、農業用水にはかかせない水が周囲の河川から取り入れやすかったことと、現在国道1号線と8号線が交差する地域であるように、古くから交通の要衝であったこと等が要因としてあげられる。

2. 調査の経緯

本調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字高野字サルガウに所在する。調査地周辺を代表する調査としては、県道高野・守山線特殊改良工事に伴う調査^①があげられる。この調査では、縄文時代から近世にいたる遺構が確認されており、5世紀後半の周溝墓や7世紀の竪穴住居をはじめ、13世紀代の掘立柱建物等が確認されている。また倉庫、共同住宅等の建設に先立ついくつかの調査でも同様な時期の遺構、遺物が確認されている。このような状況から、本調査地においても集落のひろがりが確実視されていた。



図1 調査地周辺遺跡分布図

調査は、辻・小坂西部土地区画整理組合が計画する土地区画整理に伴う事前調査である。第1次調査1994年1月17日～3月31日、第2次調査1994年5月14日～1995年3月31日にかけて行われ、その後整理作業を行った。報告は、この成果の一部を収めたものである。

3. 調査の概要

(1)基本土層

水田面から約0.2~0.4m下げると、古墳時代以降の生活面（第1遺構面）が存在する。上から耕作土（層厚0.06~0.2m）、灰黄色土層（層厚0.85~0.16m）、橙黄色土層（層厚0.02~0.1m）の順で堆積する。第1遺構面からさらに約0.7~1.0m下げると、縄文時代の生活面が存在する。この間の層は黄色粘土層で構成され、大きく2層に分層できる。

(2)検出遺構

第1遺構面では、古墳時代から近代にいたる旧河道、溝、竪穴住居、掘立柱建物等が確認され（図5~8、表1参照）、第2遺構面では、縄文時代前期を中心とした土坑、ピット等が確認されている。また、縄文時代前期以降の地震跡（液状化跡）も確認されている。

今回は、第1遺構面で確認された遺構のみにについて記述する。主な遺構の数値、時期等は表1に示した。時期は、1993年度年報^②で区分した7期（Ⅰ~Ⅶ期）を基本としている。

(3)出土遺物（図2~4）

Ⅰ期の遺物は、縄文時代前期の土器（栗津SZ式、北白川下層式）および石鏃、石錘をはじめ、注目すべきものに炭化したドングリが存在する。（1994年度年報参照^③）

溝・河道

トレンチ	遺構名	深さ(m)	幅(m)	時期	備考
1	SD-101	0.24	4.2~7	Ⅳ?	
"	SD-103	0.88	3.7~4.3	Ⅳ・Ⅴ	旧番号SR-1
2, 5	SD-2	0.87	1.9~2.1	Ⅳ	
4	SD-10A	0.66	2.8	Ⅲ	
"	SD-10B	1.0	2.4	Ⅳ	
"	SD-11	1.2	8~9	Ⅱ~Ⅵ	旧河道①
"	SD-401	1.4	9以上	Ⅱ~Ⅵ	旧河道①
"	SD-401	0.85	2.8~6	Ⅳ~Ⅴ	
4, 5	SD-5	0.48	3.9~4.5	Ⅵ	
6	SD-601	0.53~0.69	2.1~4.6	Ⅳ~Ⅴ	
"	SD-605	0.28	2~3.9	Ⅵ	SD-5の続き
7	SD-701A	1.16	7.6~7.9	Ⅱ	
"	SD-701B	1.15	1.7~2.7	Ⅳ	
"	SD-701B	1.2	3.9~9	Ⅳ	
"	SD-703	0.55	0.63~0.9	Ⅳ	
"	SD-704	0.78	2.2~2.5	Ⅶ	
"	SD-705	1.24	4.8以上	Ⅲ?	
9	SD-905	0.25	2.1以上	Ⅵ	SD-5の続き
"	SD-1101	0.5~0.78	2.0~3.1	Ⅳ~Ⅴ	
11	SD-1102	0.52	1.1~1.9	Ⅳ~Ⅴ	
"	SD-1101	1.88	11以上	Ⅱ~Ⅵ	旧河道① 水辺の祭祀
12	SD-1201	1.52	11以上	Ⅱ~Ⅵ	旧河道① 水辺の祭祀

Ⅱ期の遺物（図2）は、4世紀中頃から5世紀前半（Ⅱa）と5世紀中頃から6世紀後半（Ⅱb）に大きく分けられる。Ⅱa期の遺物として、甕、壺、高杯、小型丸底壺（1~14）等がある。この内（7, 10, 13, 14）は、SR-1101の一括土器（図版1-3）である。甕には、口縁が受口状のもの（1, 2, 5, 8, 11）、くの字状のもの（13）、口縁端部を肥厚するもの（4, 10）がある。須恵器は、杯身（16, 20）、杯蓋（15, 17~19）が中心を占め、図示はして

竪穴住居

トレンチ	遺構名	深さ(m)	長辺(m)	短辺(m)	主柱大	壁溝	炉	時期	備考
7	SH-1A	6.1~6.2	4.9	4.8	4	あり	中央やや西辺より	Ⅱ	
"	SH-1B	0.1~0.2	5.8	4.7	4	あり	中央やや西辺より	Ⅱ	南辺中央に土坑
"	SH-2	0.3	3.8以上	2.6以上	1つ確認	あり	焼土2ヵ所あり	Ⅱ	

掘立柱建物

トレンチ	遺構名	長辺(m)	短辺(m)	間辺(m)	柱間	時期	備考
7	SB-701	3.6以上		2以上×1以上	1.7~1.9	Ⅳ	
"	SB-702	5.2	3.68	3×3	長辺側1.7~1.8 短辺側1.2~1.3	Ⅳ	
"	SB-703	3.6	3.1	2×1	長辺側1.7~1.8 短辺側1.84~1.9	Ⅴ	
"	SB-704	3	2.94	1×1	長辺側2.9~3 短辺側2.7~3	Ⅴ	
"	SB-705	3.8	2.5	2×1	長辺側1.5~1.9 短辺側2.5	Ⅴ	東側に塀もしくは柵になるピットあり
"	SB-706	4.1	2.6	2×1	長辺側2~2.1 短辺側2.6	Ⅴ	"

（時期区分Ⅰ縄文、Ⅱ古墳、Ⅲ白鳳、Ⅳ奈良、Ⅴ平安~鎌倉、Ⅵ室町~安土桃山、Ⅶ江戸~昭和）

表1 主要遺構計測一覧

いないが甕や壺も存在する。時期は、5世紀中頃から後半のもの（15～17）から6世紀後半前後と考えられるもの（18～20）まで時期幅は広い。

Ⅲ期の遺物は、杯身（21, 22）が存在する。7世紀中頃前後のものと思われる。全体としてこの時期の遺物は少ない。

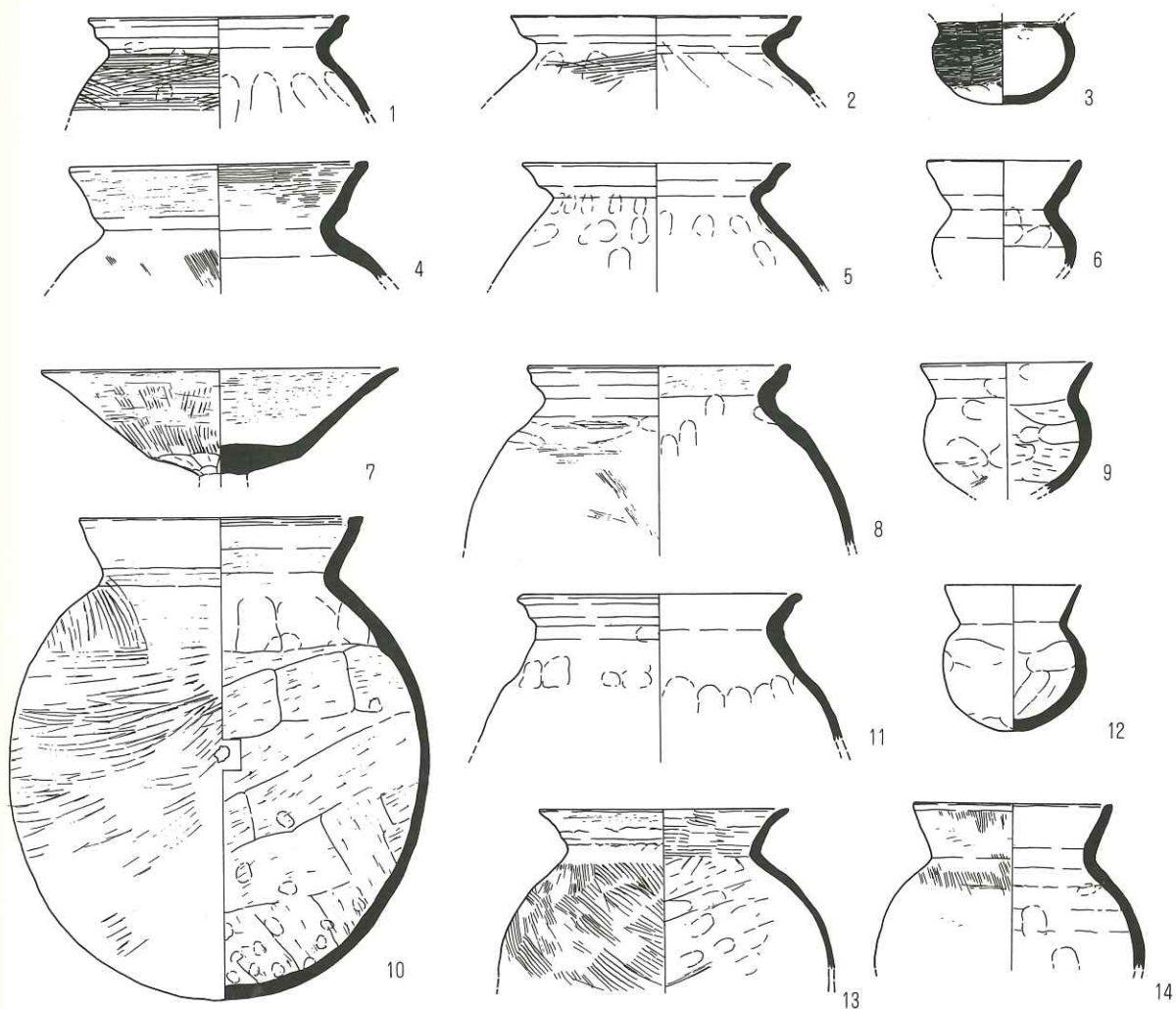
Ⅳ期の遺物は、図2-23～26、図3-27～63に示したように一括の遺物が多く存在している。土師器は、杯、盤、皿をはじめ、甕、鍋（扁平甕）がある。杯、皿等の内面には、放射状や羅線状の暗文がみられ、外面の調整には、ミガキ、ナデが中心であるが、ヘラケズリを施するもの（26, 37, 54）もみられる。甕は、口縁が受口状に立ち上がるもの（40, 47, 62）と、くの字状に短くのびるもの（63）がある。須恵器は、杯、蓋、甕、壺等があり、大半は杯で占められる。杯は高台をもつもの（28～31）と、もたないもの（42, 43, 50, 51）がある。これらの遺物は、8世紀後半を中心とするものと考えられる。

V期は、9世紀代（Va）、10～11世紀代（Vb）、12～13世紀代（Vc）の3つに大きく分けられる。Va期の遺物としては、図示していないが、灰釉陶器の碗、須恵器の杯蓋等が存在する。出土量は少ない。Vb期は、V期で最も遺物が豊富な時期と考えられる。なかでも10世紀中頃から後半にかけての土器が目立っている。回転台成形の土師器をはじめ、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器（両黒、内黒）等がある。回転台成形土師器は杯が中心で、高台のあるもの（64, 65）とないもの（68～72）が存在する。緑釉陶器では、碗、皿以外に、SR-401から小壺（73）が出土し、その入手背景が注目される。また字は判読しにくいですが、灰釉陶器の皿の底に墨書をもったものが出土している。Vc期の遺物もそれほど多くはない。黒色土器の碗（75～77）が中心であり、中には吸着炭化させていない黒色土器と同等の形態をしたものも存在する。この他皿（78）がいくつか存在する。いずれも13世紀前後のものと思われる。さらにV期の遺物では、土器以外に木製品が多量に出土している。旧河道（SR-1101, 1201）から出土したもので、棒状木製品、刀形木製品、斎串状木製品（図版2-1）をはじめ、大小さまざまな燃えさし（図版2-2）等が出土している。また、一緒に桃の種がいくつか出土している。これらの遺物は、このあたりで水辺の祭祀をしていたことを裏付けるものである。

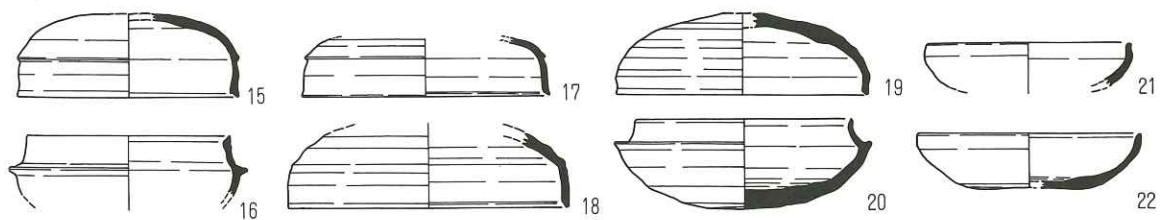
Ⅵ期の遺物（図4）は、SD-5から出土したものが中心を占める。信楽焼のすり鉢（79, 80, 83）、甕をはじめ、瀬戸美濃系の灰釉碗（82）、皿、天目茶碗（81）等が存在する。15世紀後半から16世紀前半頃のものと思われる。

Ⅶ期の遺物は、18世紀から19世紀中頃（Ⅶa）と、19世紀後半以降（Ⅶb）の2時期に分けられる。（84, 85）は、伊万里の碗と皿で、18世紀後半頃の所産と思われる。この他、信楽焼の甕、瀬戸・美濃等の碗、皿等、各地の陶磁器がみられる。Ⅶb期は、明治・大正期のプリントによる絵柄をもった碗、皿から昭和期の陶・磁器まで、多種である。

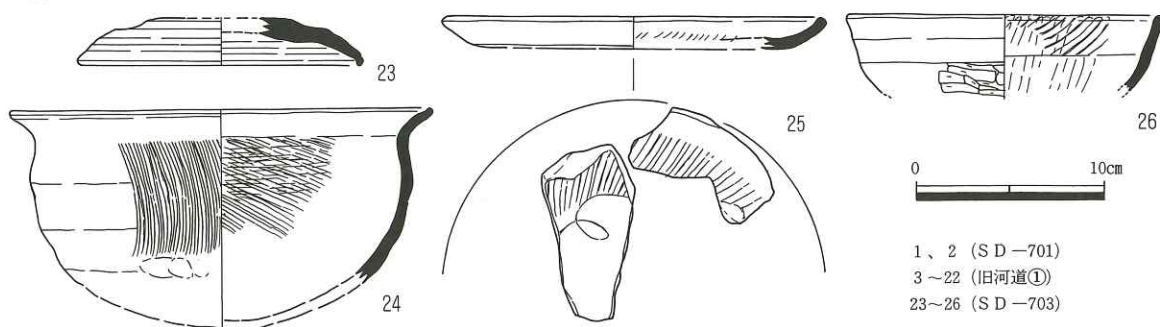
Ⅱa期



Ⅱb～Ⅲ期

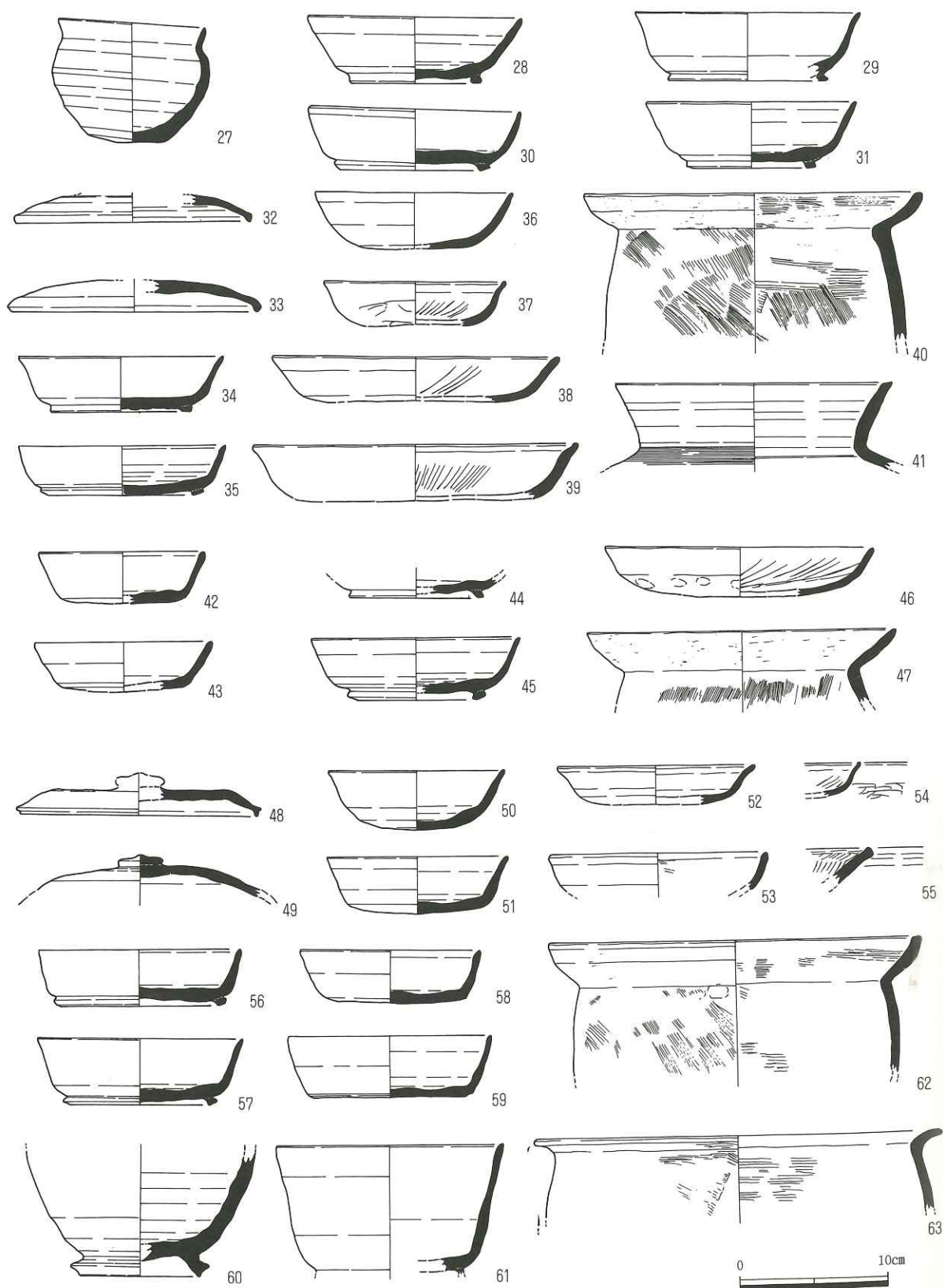


Ⅳ期



1、2 (S D -701)
3～22 (旧河道①)
23～26 (S D -703)

図2 Ⅱ～Ⅳ期の土器



27~31 (S D -701) 48~63 (S D -2)
32~41 (S D -702) 42~47 (旧河道①)

図3 IV期の土器

4. 小結

第1遺構面で確認された遺構（Ⅱ～Ⅶ期）の変遷を図5～8に示した。

Ⅱ期は、南端に竪穴住居が建て替えも含めて3棟存在するが、ここより北には建物の存在が確認されていない。このことから、このあたりが古墳時代における高野集落の最北端とすることができる。また、旧中ノ井川と旧河道①は、おそらく東端から2つに分かれ、その間に中州を形成していたと思われる。中州となるT4, 5およびT9, 10の地区は、明確な遺構が存在しなかったことから、田畑として利用されていたのかもしれない。

Ⅲ期は、溝、旧河道のみで、建物等は全く存在していない。この時期の集落は、旧河道①の東方向にいった地区に、県道の調査で竪穴住居が確認されている。

Ⅳ期では、T7においてⅡ、Ⅲ期で溝、河道であった場所が完全に埋まり、Ⅱ期で竪穴住居が存在していた付近に、溝が新たに掘削される。この場所と旧中ノ井川にはさまれた狭い場所に、倉庫と考えられるSB-701, 702が建てられる。この他の地区には建物はみられない。また旧河道①や旧中ノ井川から水を取り入れるための用水路的な溝（SD-2, 401, 601, 701B、703等）が何条か存在する。

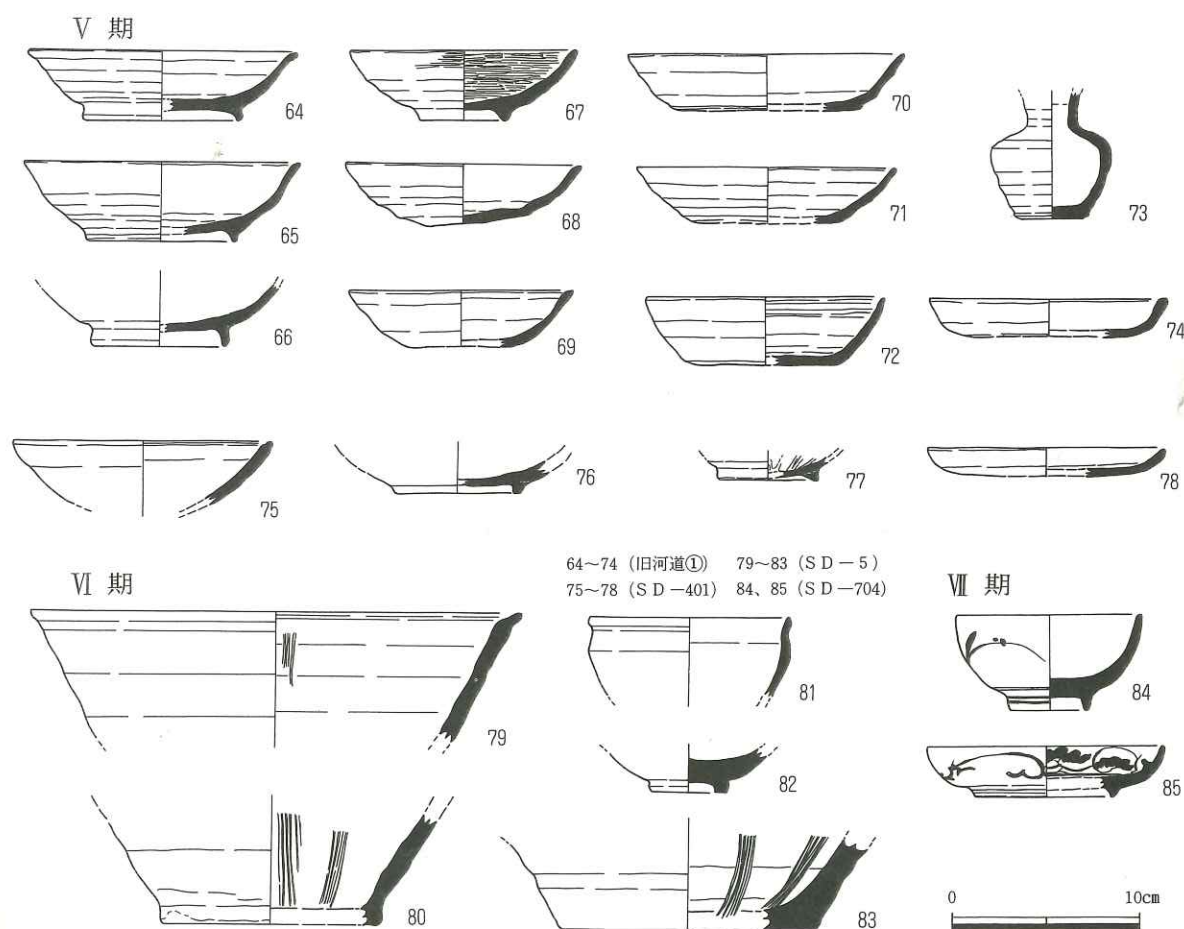


図4 V～Ⅶ期の土器

V期では、前段階に倉庫が存在していた周辺に、その後も2棟1組で2時期にわたって建物が建てられる。建物の平面形態や立地条件から、居住用の建物ではなくIV期同様に倉庫のような機能をもつ建物であったと考えられる。同様な性格の建物が、現中ノ井川の北側にも存在していたものと思われる。この時期の集落の存在は、県道の調査で、Ⅲ期の竪穴住居が存在した地区から東方向に広がっていたと思われる。

Ⅵ期では、旧河道①以外はその支流と考えられるSD-5のみとなり、周囲は全て水田や畑に変化したことが想定できる。SD-5は、用水路として機能していたと思われる。

Ⅶ期になると、現在とあまりかわらない状況になっていたと思われる。SD-5も全て埋まり、このあたりも水田に包括される。この時期の特徴とすべき遺構に、瓦の原料となる粘土を採取していたとされる土坑がところどころに存在する。以前旧河道や溝が存在していた場所の土は、瓦の原料に適していないため、その部分をさけて採取しているのが、SD-5周辺の状況からよくわかる。土坑の形態もT5を中心に存在する連続した不整形から、T9, 10にみられる基則的な方形の2種類が大きく存在する。前者は後者に比べて古い時期の所産と思われる。この他Vb期では、少しずつ埋まりながらも昭和期まで機能していたSD-704が存在する。

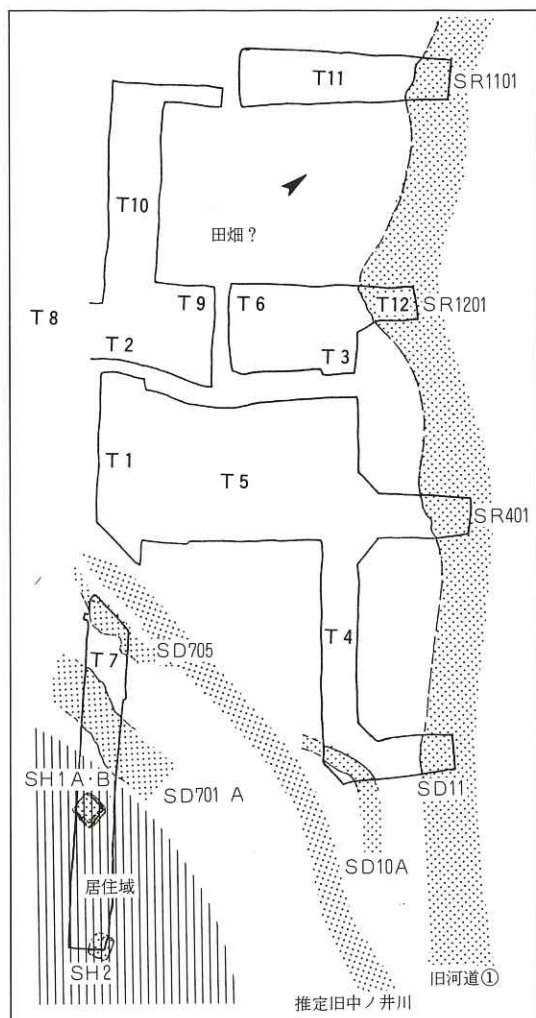


図5 遺構編遷図①(Ⅱ～Ⅲ期)

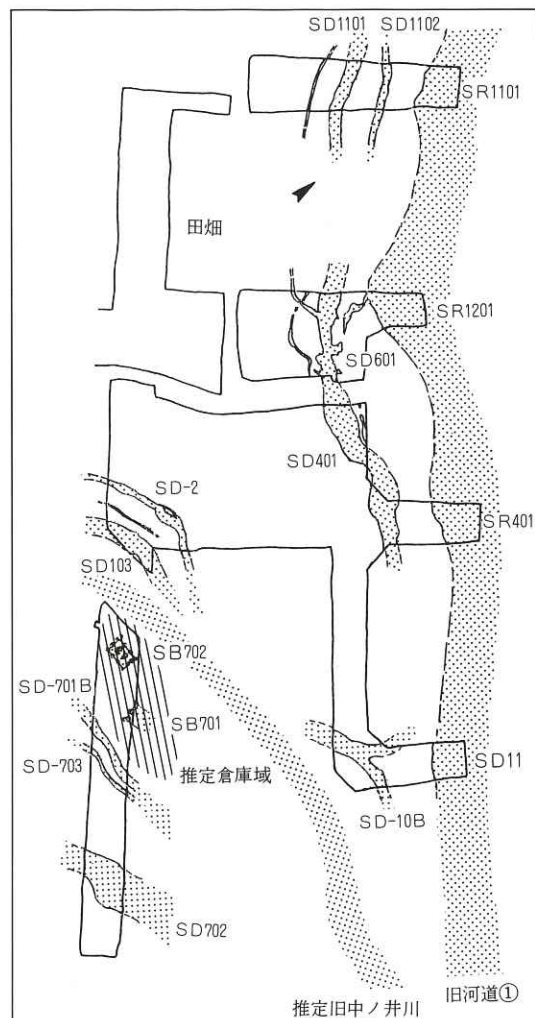


図6 遺構編遷図②(Ⅳ期)

以上Ⅱ期からⅦ期における遺構の変遷を追ってきた。この中でⅣ、Ⅴ期における中ノ井川沿いに建てられた建物を倉庫と想定した。性格としては、中ノ井川を利用した舟運によって運んできた物資をたくわえておく場所、もしくは周囲に広がる田畑から収穫した農作物を保管しておくための倉庫であった可能性を想定しておきたい。また、遺物の中心となるⅤb期では寺院や官衙等、特殊な場所では出土しない緑釉陶器小壺の存在や、旧河道①における水辺の祭祀跡は、付近に有力氏族の存在を想定できるものである。今後の調査で、これらの想定にこたえるような具体的な遺構、遺物が発見されることを期待したい。

参考文献

- ①細川修平ほか『高野・辻遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1990
- ②『栗東町埋蔵文化財発掘調査 1993年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1994
- ③『栗東町埋蔵文化財発掘調査 1994年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1995

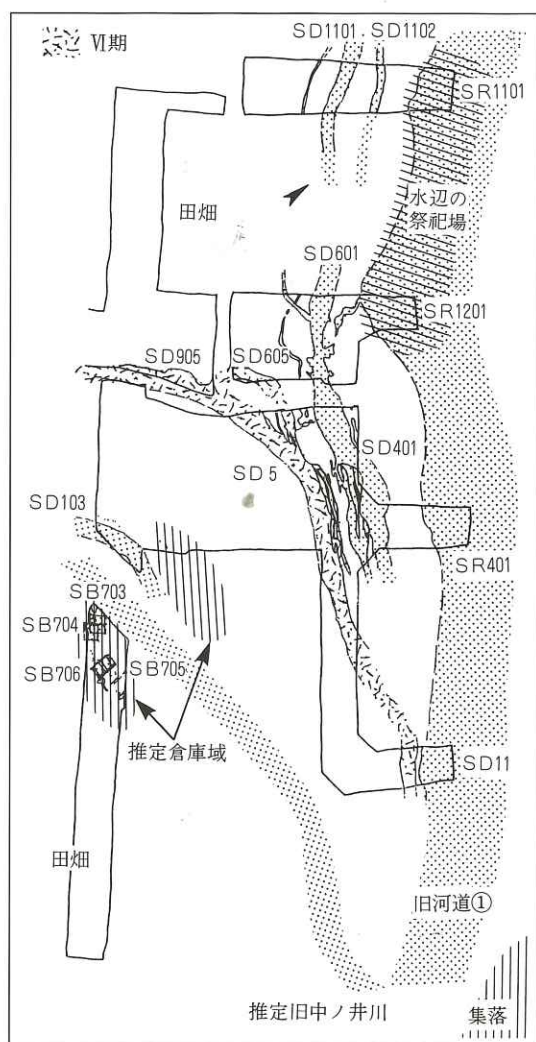


図7 遺構編遷図③ (Ⅴ～Ⅵ期)

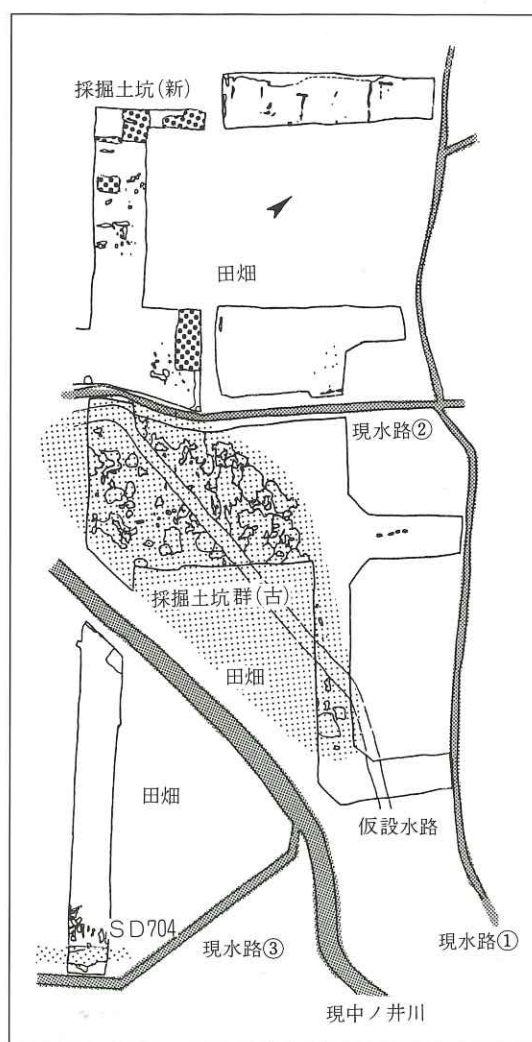


図8 遺構編遷図④ (Ⅶ～現代)



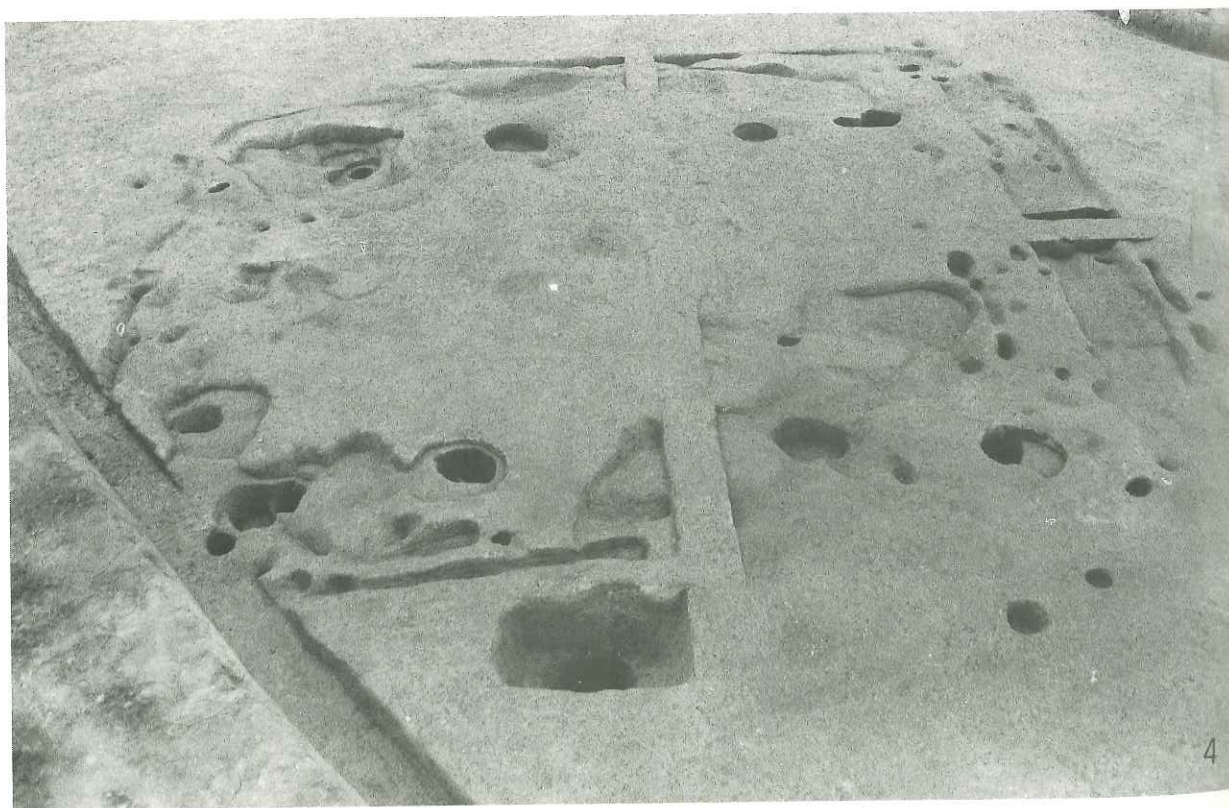
T 5・SD-2、探掘土坑（南から北方向をみる）



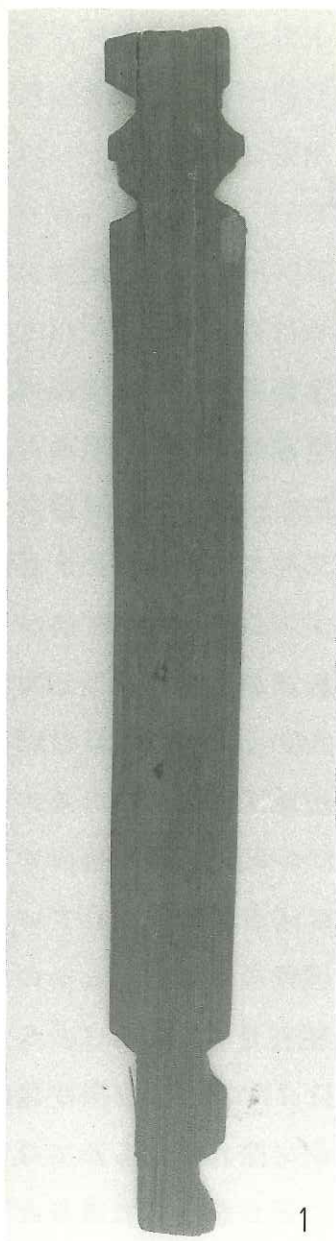
T 4・SD-10周辺（東から西方向をみる）



T11・SR-1101土器出土状況

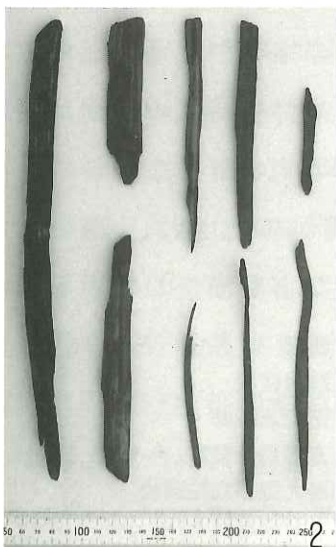


T 7・SH-1全景（南から北方向をみる）



1

SR-1101出土
斎串状木製品



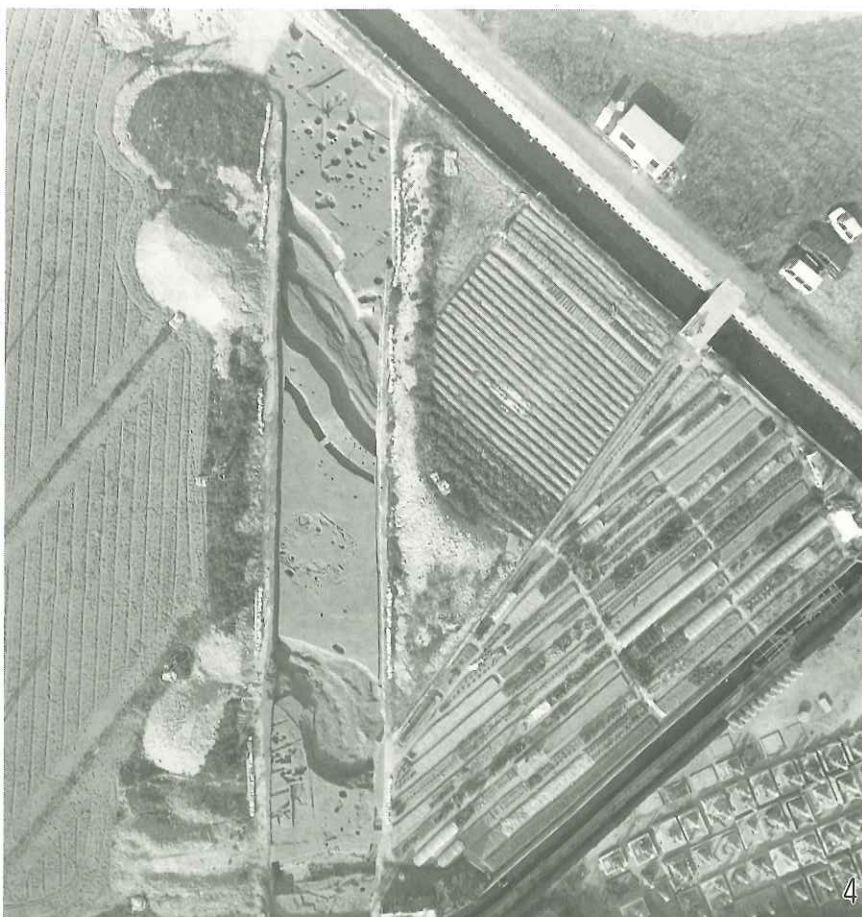
2

SR-1101出土 燃えさし



3

T 6, T 9 ~ T 12 調査区全景 (上空より)



4

T 7 調査区全景 (上空より)

第3章 伊勢遺跡

—野尻地区出土の大型掘立柱建物—

1. 位置と環境

伊勢遺跡は守山市南部にあたる伊勢町を中心に栗太郡栗東町大宇野尻に広がる遺跡である。現在の遺跡周辺を概観すると西に接してJR東海道本線（琵琶湖線）、中山道（古代東山道）、さらに東には東海道新幹線、国道1号線・8号線の分岐点と名神高速道路栗東I.Cが選地されるなど交通の要衝である。遺跡は近江最大の河川である野洲川により形成された広大な沖積平野の標高約96～100mの微高地上に立地し、主に弥生時代後期から古墳時代前期の集落を中心とする遺跡である。これまでに守山市教育委員会により30次に及ぶ発掘調査が実施されていて、河川と濠により囲郭された東西700m、南北400mの居住空間を持つ大規模集落である事が確認されている。集落東側の大洲地区では2条の濠が検出されているが、内側のものは礫層を掘り込んだ幅6.5m、深さ2mの大規模なものである。集落内ではこれまでに55棟の竪穴住居や多数の掘立柱建物、区画溝が確認されているが、中でも大型掘立柱建物群は現在までに計8棟出土しており全国的にも傑出したものとなっている。さらに集落中心部の18・21次調査地では4×2間の総柱建物（88㎡）、5×1間（58㎡）と3×1間（45㎡）の近接棟持柱建物、2×1間（11㎡）の独立棟持柱建物が方形に区画された柵列内に規格的に配置された事が確認されていて全容は明らかでないが、計画的な街づくりが行われ諸機能を備えていた集落であったことが想定されてきた^①。一方栗東町域の調査では居住域の南西側で方形周溝墓や、河川が確認されているが、その

南側に広がる野尻遺跡では河川が乱流する沼沢地状の様子が明らかとなっている。そのため弥生時代の遺構は希薄であるが、93年度の調査で幅3m、深さ1.2mの大溝が確認され、鋤などの木製品や銅鏃などが出土している^②。

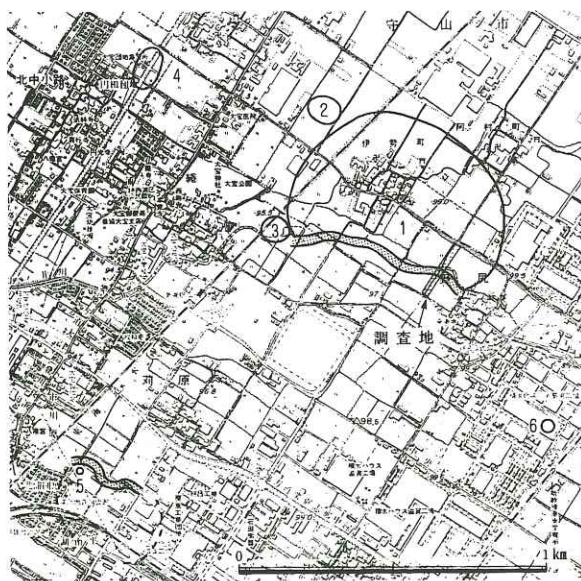


図1 調査地位置図

- 1. 伊勢遺跡居住域
- 2・3 方形周溝墓群
- 4 総遺跡方形周溝墓群
- 5 下鉤遺跡大型掘立柱建物
- 6 野尻遺跡豪族居館

野尻遺跡の低地を挟んで南側の微高地上に分布するのが下
 鈎遺跡である。弥生時代中期末～後期初頭には幅3m、深さ
 2mのV字溝をもつ集落で掘立柱建物、竪穴住居、井戸、大
 型柱穴列（径80cm、柱痕20～25cm）等が確認されている。遺
 物は磨製石剣、翡翠製勾玉2点、碧玉製管玉、銅釧等が河川
 から出土しており注目される。後期後葉では河川と数棟の掘
 立柱建物、溝などが確認されていて、遺物は河川から銅鏃9
 点、銅滓、石剣2点等が出土している^③。その河川に隣接し
 て大型掘立柱建物が検出された。5×2間、48㎡の規模をも
 つ独立棟持柱建物で径37cmの柱根（ヒノキ材）が9本残存し
 ていた。さらにその南東60mには柱間3.9m、柱根径38cmの鳥
 居状遺構も検出されその特異性が注目された^④。

伊勢遺跡周辺にみられる方形周溝墓群からなる墓域は、図
 1の2・3の地点で検出されているが、北西約600mの縄遺
 跡で検出された十数基の方形周溝墓群（中期末～後期中葉）
 はいずれも陸橋部を持つもので、中には一辺20mの大規模な
 ものや、陸橋部の拡張がみられるものが確認されている^⑤。
 その他古墳時代（5世紀末～6世紀初頭）の豪族居館が野尻
 遺跡で検出されている（図1の6）。長辺50m、短辺40mの
 方形に巡る溝の内側に30m四方の柵列を構えたもので区画内
 からは掘立柱建物と竪穴住居が各2棟検出されている^⑥。

2. 調査の経緯

調査は栗東町が計画する道路新設工事に先立ち1994年10月
 6日～1995年3月10日の期間、面積2700㎡で実施した。遺構
 密度は低かったものの大型掘立柱建物の発見は重要な成果と
 考えられた為、12月17日に現地説明会を開催し、同月末に山
 砂で遺構を保護し埋め戻した。なおこの調査についてはすで
 に「年報」にて簡単にではあるが報告を行った^⑦。それでは
 遺跡名を「野尻遺跡」として報告をしたが、野尻遺跡の一部
 が内容的に守山市伊勢遺跡の弥生集落に含まれる事から、こ
 の度の遺跡地図の登録名称変更にともない、伊勢遺跡に変更
 されたため本報告では「伊勢遺跡」となった。

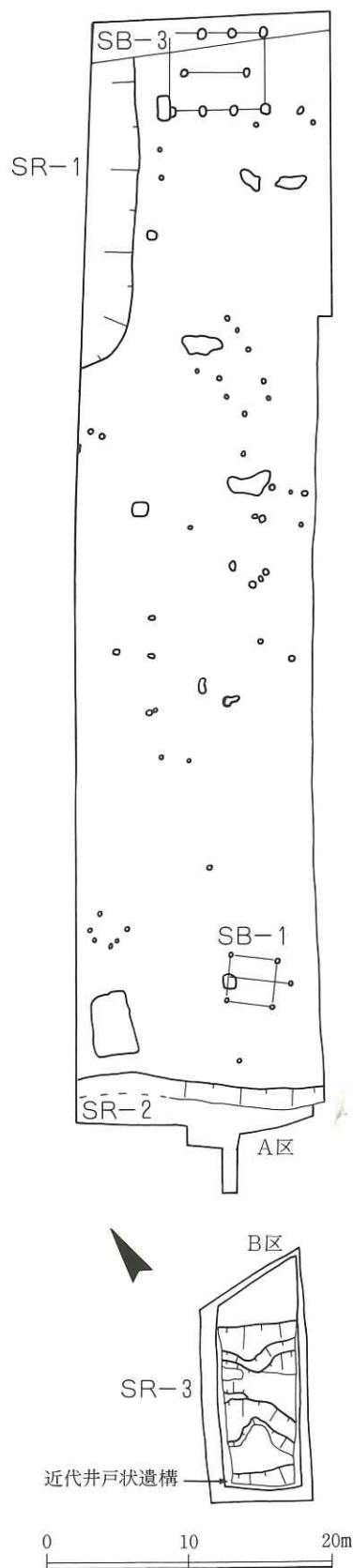


図2 遺構配置図（S=1:500）

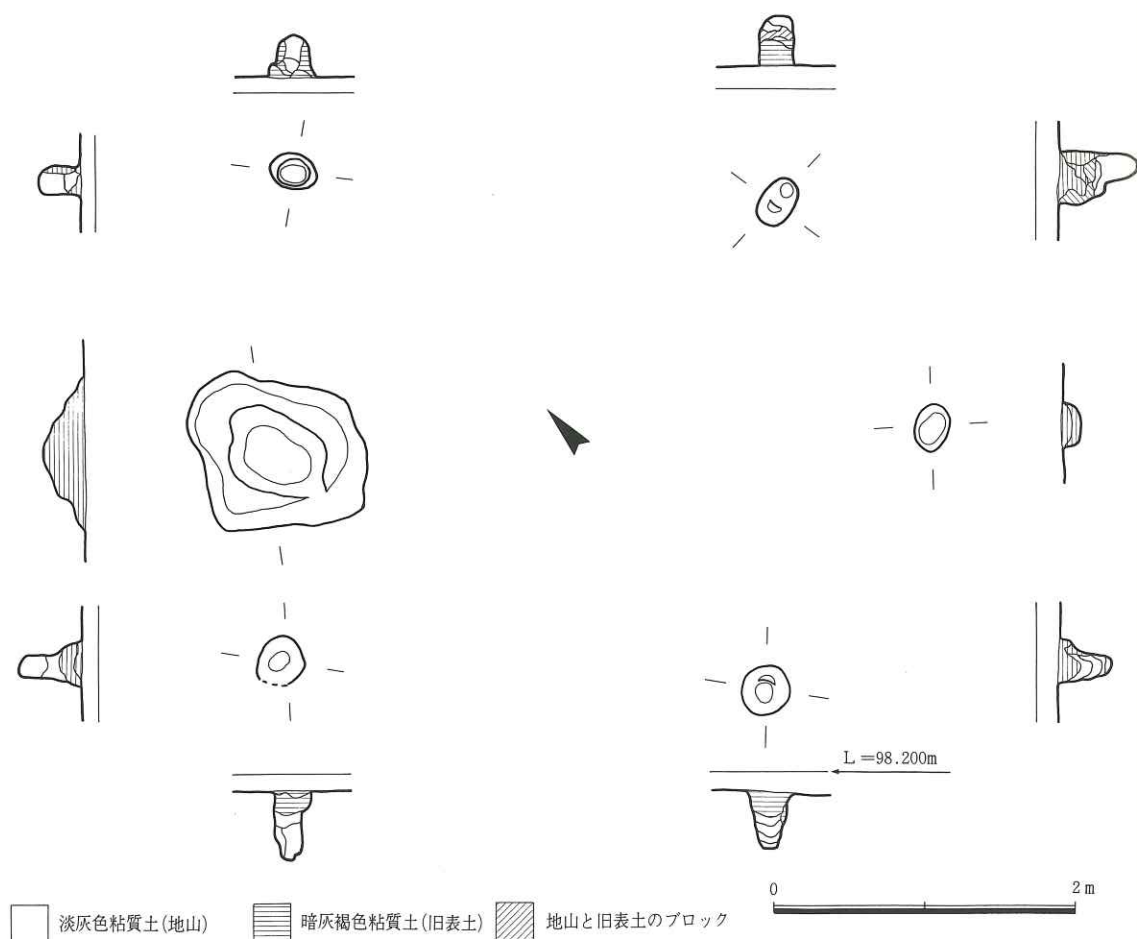


図3 SB-1 実測図 S = 1:50

3. 調査の概要

調査区は道路幅18m、長さ190mの範囲で、中央のB区を挟んで北側微高地をA区、南側低地をC区とした。基本層序は耕作土下に黄灰色の床土、床土直下で黄色粘質土の地山遺構面が検出される為、遺物包含層は認められない。遺構の埋土は弥生時代後期、中世ともに茶褐色系粘質土で、近世の埋土は灰色系砂質土である。しかしそれらは堆積層には認められず、遺構面がかなり削平された事が窺える。C区については近代の土地改良のため、それ以前の遺構は検出されなかった。A区では守山市に接する北端部において大型掘立柱建物1棟、南端部にて掘立柱建物1棟を検出した他、時期不明の柱穴や風倒木痕、中世期の土坑、河川、明治期の土坑を検出した。B区は弥生時代後期から布留式併行期の河川を確認した。このように弥生時代後期～近世に至る遺構・遺物の出土をみたが、この概要報告では弥生時代のものを扱うことにする。以下、各遺構についてみていきたい。

SB-1 1×1間、柱間距離3.2m、面積9.4㎡の掘立柱建物跡で、主軸方位はN-45°-W。妻側柱筋外側1.1mに独立棟持柱を持つ。柱穴規模は約25～30cm、深さ30～50cmで、棟持柱は浅く深さ10cmである。遺物は出土していないがその形態や埋土、周辺遺構の状況から弥生時代後期の建物と考えられる。小規模な高床式倉庫であろうか。

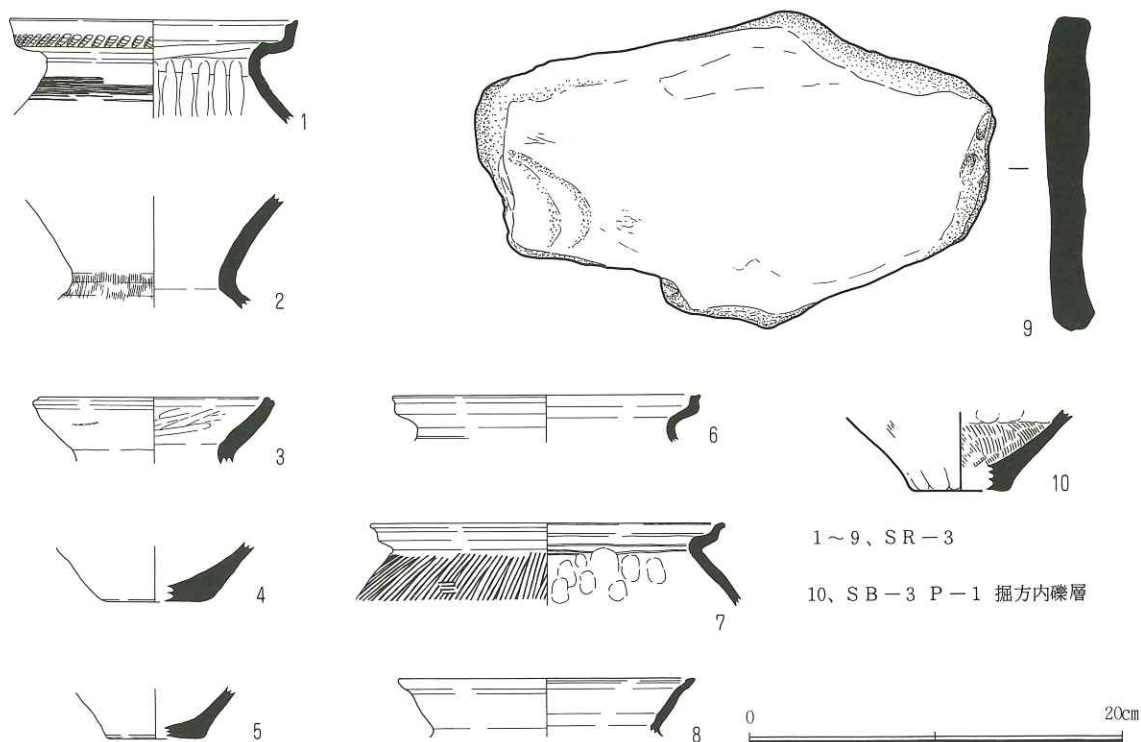
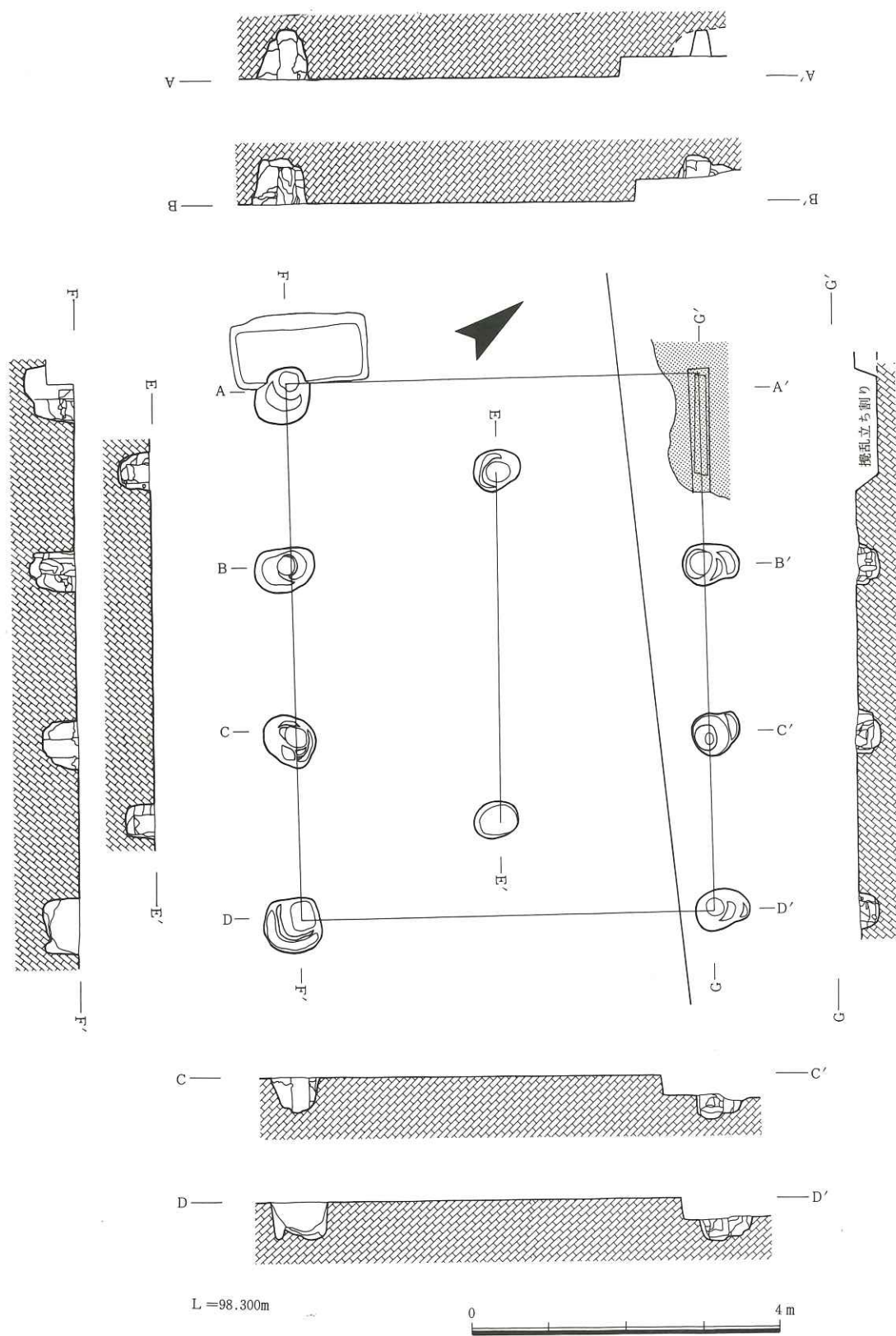


図4 出土遺物実測図 S = 1 : 4 9のみS = 1 : 8

S D - 3 河川跡である。その北側は近代の土地改良痕の為残存しないが残存幅 9 m、深さ 2 m、川幅は周辺地形からの推測では最大でも幅 20 m 程度であったと考えられる。堆積土は上層から暗灰色粘土層、スクモ層、砂礫層に大別される。主に弥生時代後期から布留式併行期の遺物が出土した（図 4）。中には縄文時代の石皿（9）や東海系の甕（7）等がみられる。居住域の南を限る河川と考えられよう。

S B - 3 調査区北端の守山市域に接して検出した屋内に 2 本の棟持柱を持つ大型掘立柱建物跡である。規模及び構造は、桁行き 3 間で 6.9 m、柱間距離 2.3 m。梁行き 1 間で 5.3 m、面積は 36.6 m² で、建物主軸方位は N - 56° - W。柱痕跡は直径約 25 cm、そのうち 4 ケ所に残りは悪いがヒノキ材の柱根が残存していた（P 2・3・4・6）。側柱掘方は梁方向に長い楕円形で（P 1・2・6・7・8）その内側に柱を寄せて据えている。南側掘方内の柱側面には、礫（4 ~ 10 cm 程度の河原石）が詰め込まれている。北側については、上部が削平されているためか礫は認められない。なお、P 6 のみ柱は抜き取られたようで、掘方内全体に礫が詰まっていた。柱を抜いた際に流入したはずの土層がみられない状況は、遺構面の削平の大きさを窺わすものである。また、柱の底部には、精緻な粘土が貼られていた。遺物は柱穴掘方埋土および柱痕流入土中から約 140 点の土器片が出土した。刺突列点文を施す受口状口縁甕の口縁部も見られるが、いずれも小破片であり図示し得たのは P - 1 礫層から出土した図 4 の 10 のみである。出土土器や伊勢遺跡内の他の大型掘立柱建物の状況から S B - 3 の時期は弥生時代後期後葉に求められる。



SB-3 平面・断面実測図 S=1:80

はじめに

伊勢遺跡は野洲川左岸の沖積低地の微高地上に位置し、野尻地区では、弥生時代後期の掘立柱建物・柱穴、弥生時代以降の河川、鎌倉時代の土坑、明治時代の土坑、時期不明の土坑・柱穴が検出されている。このうち、弥生時代の掘立柱建物の柱穴内からは柱材が検出された。本報告では、この柱材の樹種を明らかにし、当該期の柱材の用材選択について検討する。

1. 伊勢遺跡

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の S B 3（掘立柱建物）の柱穴から検出された柱材 4 点（P 2, 3, 4, 6）である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

4 点の柱材は、全てのヒノキ属に同定された（表 1）。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表 1 樹種同定結果

検出遺構名（遺構の性格）	時代・時期	用途	柱穴番号	樹種名
S B 3（掘立柱建物）	弥生時代後期	柱材	P 2	ヒノキ属
			P 3	ヒノキ属
			P 4	ヒノキ属
			P 6	ヒノキ属

・ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.） ヒノキ科

早材部から、晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、水平壁はじゅず状に肥厚する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で 1～4 個。放射組織は単列、1～15細胞高。ヒノキ属には、ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）とサワラ（*C. pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）の 2 種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に

分布し、また各地で植栽される常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木である。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

(4) 考察

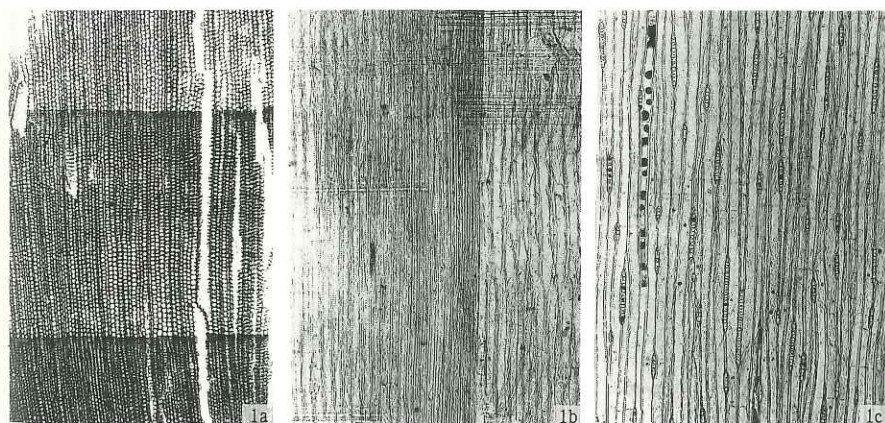
S B 3 の柱材は、いずれもヒノキ属であった。ヒノキ属の木材は、強度・耐朽性が高いことから柱材として適した木材である。調査した4点が全て同じ樹種であった結果は、ヒノキ属が特に選択・使用されていた可能性を示唆する。しかし、全ての柱材について樹種同定を行っていないため、断定には至らない。近畿地方では、これまで平安時代の宮殿の柱材や寺院の建築材にヒノキ属が多く、日本書記の記述とも調和的なことが知られている（島地・伊東，1988；西岡・小原，1978）。弥生時代の柱材に関しては、出土例はいくつか知られているが、今回のように柱穴内から出土した柱材の樹種を同定を行った例は知られていない。今回の結果から、弥生時代にはすでに柱材として適した木材を選択・使用していたことが窺える。その一方で、近江八幡市の古墳時代の住居等から出土した柱材に広葉樹材（ヤマグワ・サクラ属・ヤマハゼ）が確認されている結果（高橋，1988）は、必ずしもヒノキ属が選択されていたのではなかったことを示している。今回調査した建物がやや特殊な建物であること等を考慮すると、建物の用途・性格等により木材の使い分けがあった可能性もある。これについては、今後さらに資料の蓄積を行った上で再検討する必要がある。

<引用文献>

島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．269 P，雄山閣．

西岡常一・小原二郎（1978）法隆寺を支えた木．226 P，NHKブックス．

高橋利彦（1988）出土材同定「近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書X V II」，P 19－21，近江八幡市教育委員会．



図版1 木材

1. ヒノキ属 (SB3 P2)

200 μ m:a

200 μ m:b,c

4. 小 結

最後にSB-3についてその諸特徴と問題点を列記し、まとめとしたい。

1. 柱穴は梁行き方向に楕円形を呈し、その内側に柱を据えている。これは、他の大型掘立柱建物に見られる柱穴掘方の斜路（落とし込み）に通じる立柱技法である。また、柱穴内の柱の側面には礫が詰め込まれ^⑧、さらに底面には精緻な粘土が貼られている。

2. 残存していた柱根4点は全てヒノキ材であった。28次調査の独立棟持柱建物の柱穴全てに残っていた15本の柱根や、下鉤遺跡の独立棟持柱建物の9本、鳥居状遺構の2本も全てヒノキ材であったことから、両遺跡の大型掘立柱建物の柱材にはヒノキが選択されていた可能性が非常に高い。

3. 3×1間で中軸ラインに2本の棟持柱を持つ。直径25cmの太い柱とその配置から上屋構造は入母屋造りの高床建物に想定復元される^⑨。入母屋造りの高床建物は、弥生絵画には見られないが古墳時代では家屋文鏡や埴輪に見えるように居館的性格の建物と言える。

4. 河川の近くにつくられていることから、物資輸送や水利に関係した建物の可能性がある。

近年北九州地方、近畿地方において弥生時代の大型掘立柱建物が相次いで発見され、その性格や機能についてもいくつかの考察がなされている。九州地方の大型掘立柱建物については、吉武高木遺跡や吉野ヶ里遺跡の北内郭遺構例のように墳丘墓との有機的関係から祖霊祭祀に関わる祭殿との見解が出されている。一方近畿地方では伊勢遺跡、下鉤遺跡、大阪府池上曾根遺跡の独立棟持柱建物は後の神社建築形式につながる可能性から農耕祭祀等に関わる祭殿の性格が考えられ、また伊勢遺跡や兵庫県加茂遺跡の方形区画を伴う大型掘立柱建物は豪族居館へのつながりが指摘されている。しかし伊勢遺跡ではこれまでに5種類の大型掘立柱建物の建築形式が確認されており、それぞれが異なった機能を持ち合わせていたことが予想される。いずれにせよ現段階では今後も発見される可能性の高い大型掘立柱建物等周辺調査の成果を待ち、総合的に集落の様相を解明していく中で、大型掘立柱建物の性格も考えていく必要がある。

注. 参考文献

- ① 伴野幸一 「伊勢遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財報告書第42冊』（守山市教育委員会 1991）
伴野幸一・佐伯英樹 『ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—』（第37回埋蔵文化財研究集会追加資料 1995）
伴野幸一 「滋賀県二ノ畦横枕遺跡と伊勢遺跡」『季刊 考古学』第51号（雄山閣 1995）
- ② 猿向敏一 「野尻遺跡」『栗東町埋蔵文化財調査 1993年度 年報』（勸栗東町文化体育振興事業団 1994）
- ③ 松村 浩 「下鉤遺跡」『栗東の歴史』第4巻資料I（栗東町 1994）
大崎隆志・近藤 広 「下鉤遺跡」『埋蔵文化財発掘調査 1989年度 年報』（勸栗東町文化体育振興事業団 1990）
雨森智美 「下鉤遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査 1992年度 年報』（勸栗東町文化体育振興事業団 1993）
- ④ 佐伯英樹 「下鉤遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査 1992年度 年報』（勸栗東町文化体育振興事業団 1993）
- ⑤ 伴野幸一・佐伯英樹 「弥生時代における野洲川流域の墓制」（考古学フォーラム定例会資料 1995）
- ⑥ 清水好洋 「野尻遺跡」『栗東の歴史』第4巻資料I（栗東町 1994）
- ⑦ 佐伯英樹 「野尻遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査 1994年度 年報』（勸栗東町文化体育振興事業団 1995）
- ⑧ 南西の側柱のみに礫の詰め込みが見られる。北東の側柱は削平により柱穴1ヶと各柱穴の上半部を欠いてはいるものの、状況から礫は入れられていなかったと思われる。詳しくは述べないがこのような側柱の列による構造上の違いは他の大型掘立柱建物にも見られ興味深い。
- ⑨ 石野博信・宮本長二郎両先生から御教示を得た。

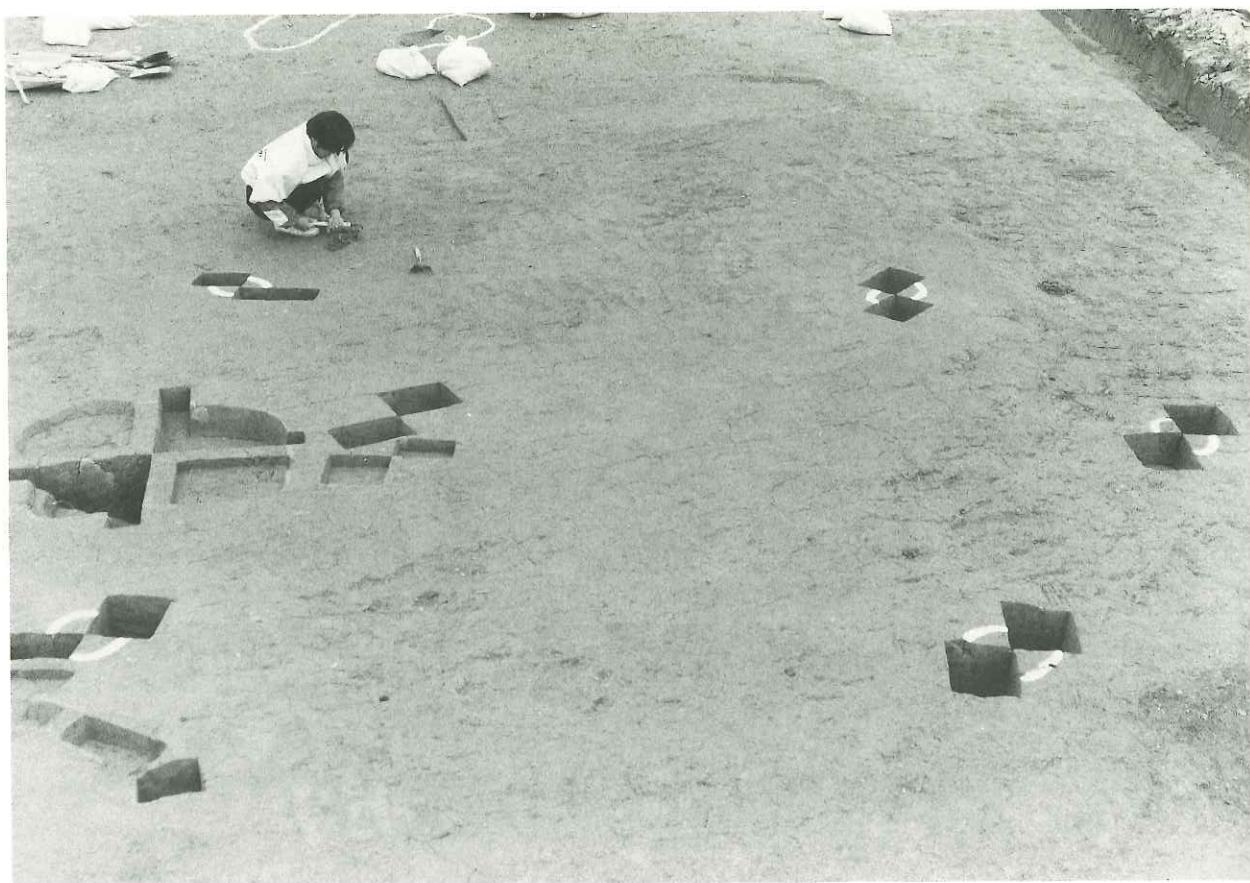
調査に際しては、多くの方々から有益な御教示、指導を賜った。以下に御芳名を記して感謝申し上げます。 石野博信、岩崎 茂、小笠原好彦、小島睦夫、佐原 真、伴野幸一、宮本長二郎



調査地遠景 右は三上山



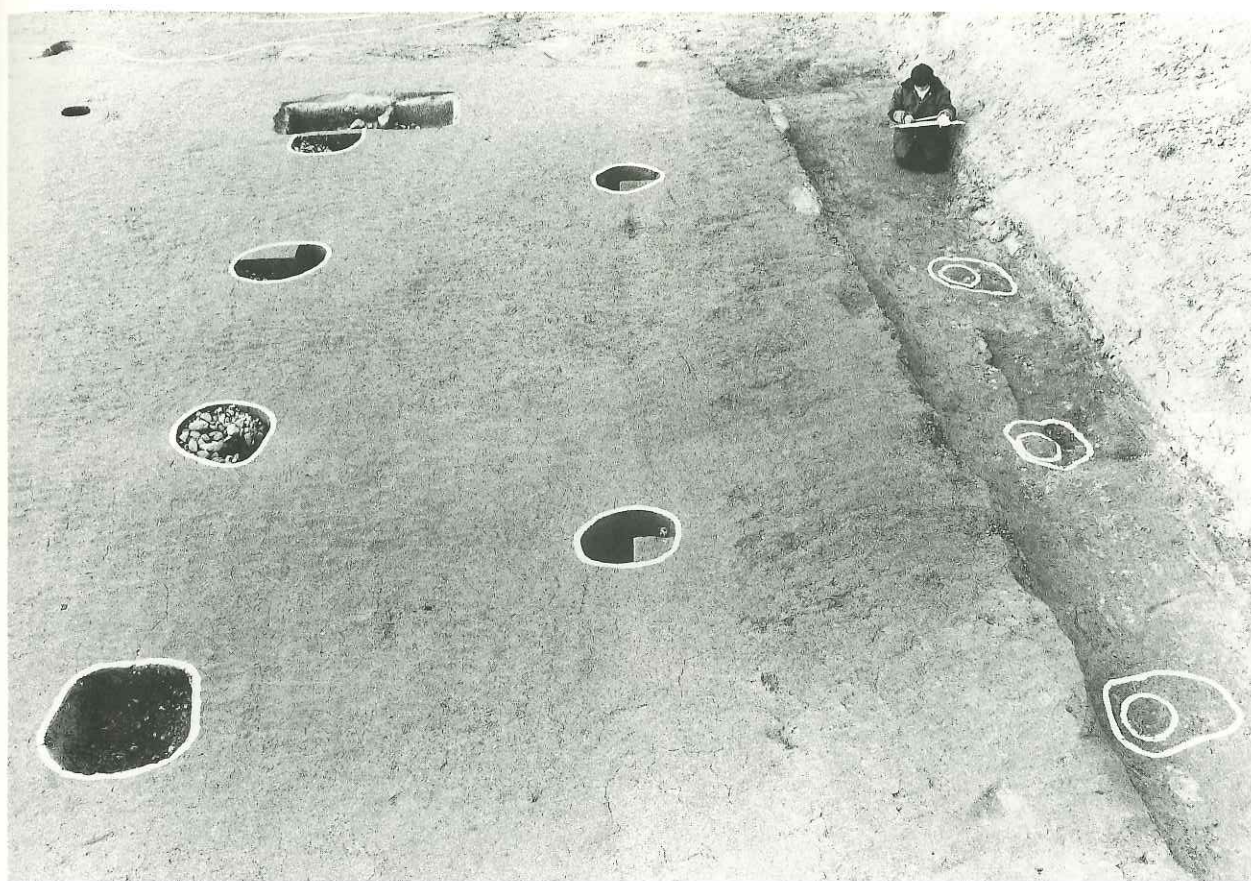
SR-3 完掘状況



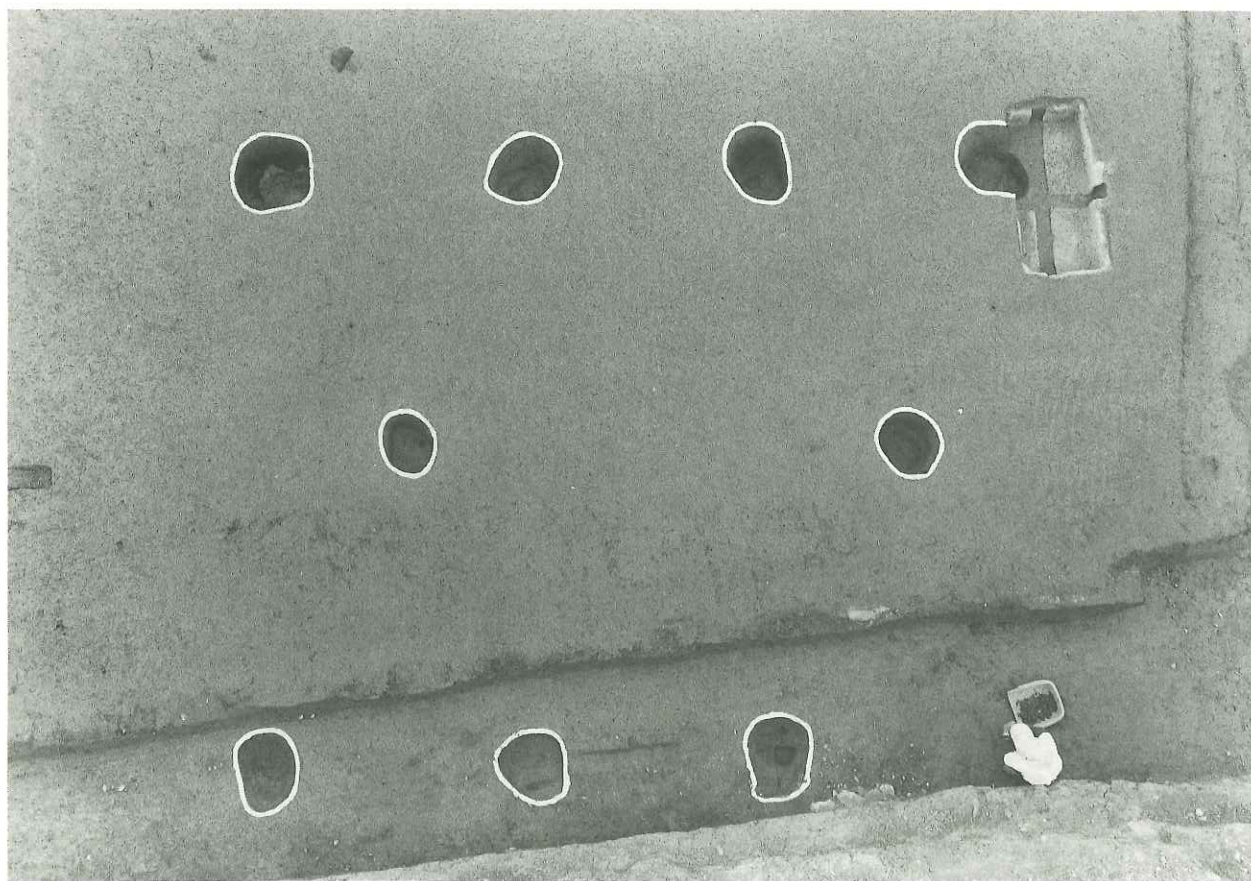
SB-1 全景（南西から見る）



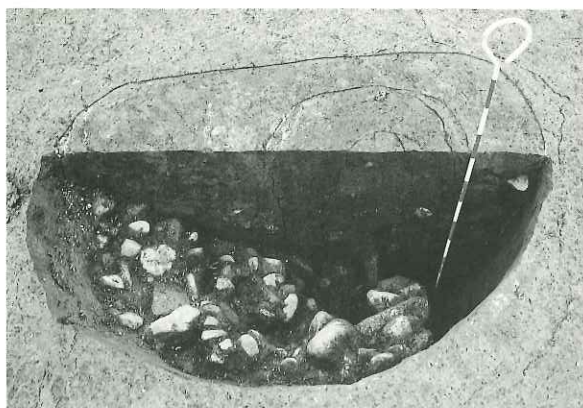
SB-3 検出状況 南側柱と棟持柱



SB-3 全景（南東から見る）



SB-3 完掘状況



P-2 (南東から見る)



P-4 棟持柱断面 (南西から見る)



P-2 礫上面及び柱根



P-6 断面 (東北から見る)



P-3 と明治期の土坑



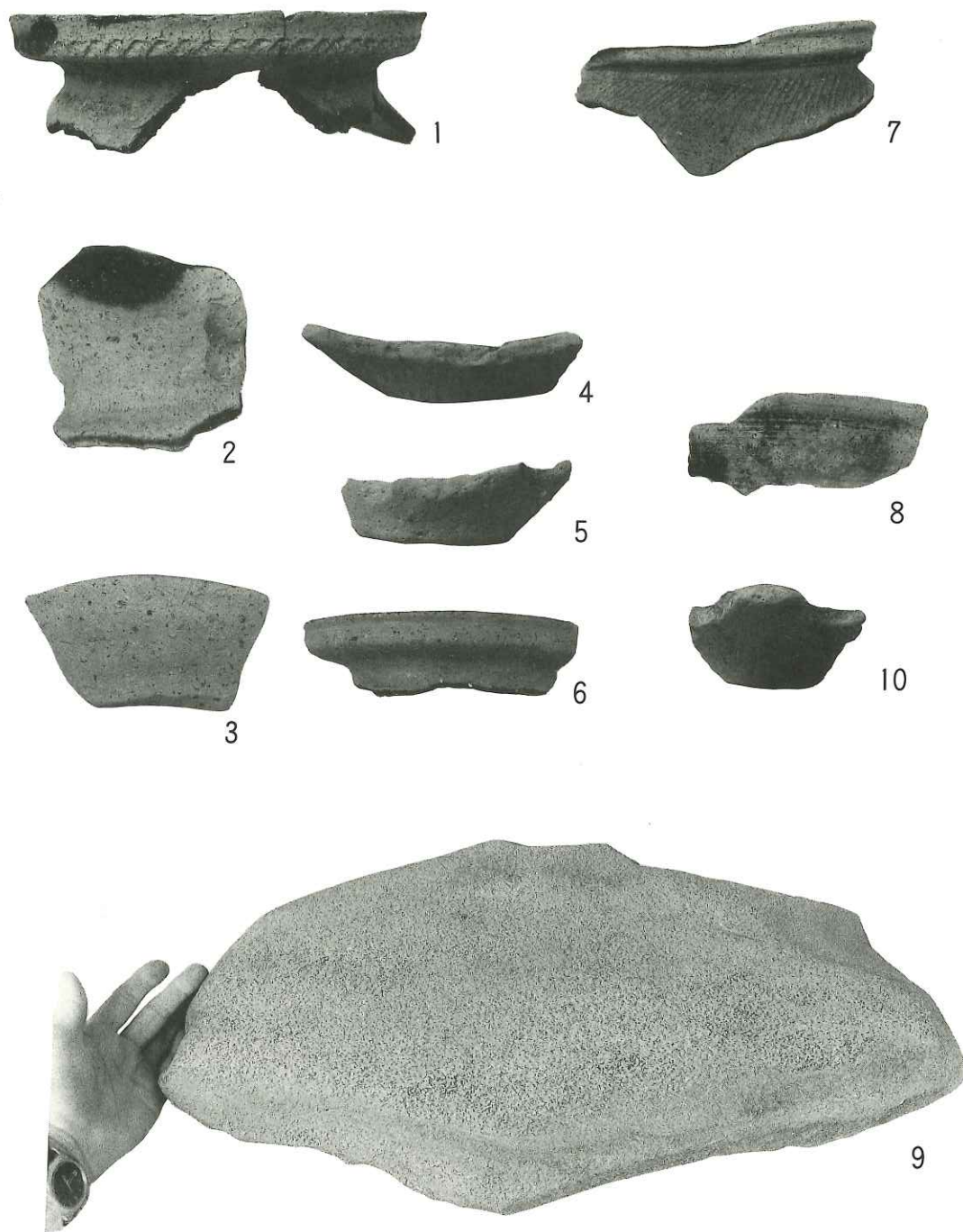
P-3 礫の状況



P-3 断面 (北西から見る)



P-3 柱 根



SR-3・SB-3 出土遺物



現地説明会風景

第4章 下鈎遺跡

1. 位置と環境

下鈎遺跡は六地蔵の古琵琶湖層丘陵地に源を発する葉山川の北岸に位置する。周囲は野洲川と草津川が形成した沖積層からなる扇状地であることから、過去の調査でも多くの旧河道が確認されている。当調査地は下鈎遺跡の南西部にあたる。

遺跡の歴史的環境を見ると縄文時代前期から室町時代まで住居跡が認められる。遺跡として盛行するのは過去の調査によると弥生時代中・後期である。遺跡範囲中央部では大型の掘立柱建物が検出されており、当地域が政治的な中心集落であった可能性が伺える。

古墳時代では、集落の存在は確認されていないが、遺跡範囲の南端部で4世紀代の掘立柱建物や、円形状に廻る溝が検出されている。

奈良時代から鎌倉時代にかけては、流路や掘立柱建物が散在的に確認されているが、室町時代以降の集落はほとんど確認されておらず、この時期には集落の位置等、現在の景観構成に近づいていたと考えられる。

2. 調査の経緯

調査は倉庫建設工事に先立ち実施した。町教委による事前の試掘調査では、図2に示した2カ所のトレンチで、旧河道と思われる遺構の岸部や奈良時代の遺物が確認された。

この内倉庫建設の対象となる南側トレンチにおいて、平成6年10月13日から10月26日を現地調査期間として110㎡の範囲を発掘した。現地調査は河道発掘が目的であったが、下層より堰遺構を確認したため堰遺構の検出に重点を置いた。それにより関係者間の調整の上、調査期日の延長がなされた。



図1 調査地位置図 (1:25000)

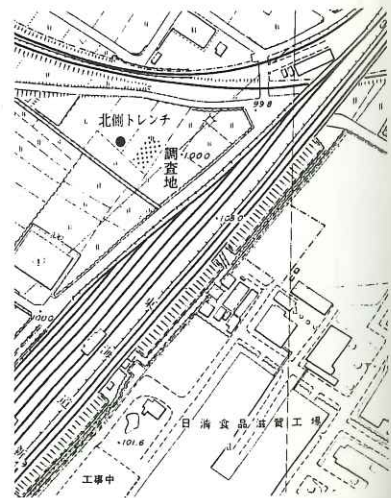


図2 調査地トレンチ位置図 (1:5000)

遺構の掘削は11月14日に終了し、遺構実測・写真撮影・遺物取り上げを行った後、11月25日に埋め戻しを行って全ての現地調査を終了した。

3. 調査の概要

基本土層 調査地は旧河道の北岸部分にあたる。試掘調査の結果では北側トレンチで旧河道の北岸が確認されていることから、旧河道は南西方向に延びると考えられる。調査地周辺の現行地形は葉山川に向ってゆるやかに傾斜する。

調査地の基本土層は上から順に耕作土（暗褐色粘質土）、次に奈良時代の包含層たる黄褐色粘質土があり、この下層から遺構面となる。

遺構面は大別すると2つの層からなる。1つはトレンチ東側で確認した黄灰色系粘質土を地山とする部分。2つは青灰色系粘質土と白色砂質土系の河川堆積（以下この堆積層を旧河道と称する）土である。旧河道は時間の制約上、基底部は一部しか検出しなかったが遺構面からの深さは約2mとなる。

旧河道の堆積土は大別すると、青灰色系粘質土（上層）と白色系砂質土（下層）の2種類がある。両層の土質差は旧河道の埋没過程に伴うものであるが、便宜的に前者をSD-1、後者をSD-2と称する。SD-2基底部からは堰遺構を検出した。

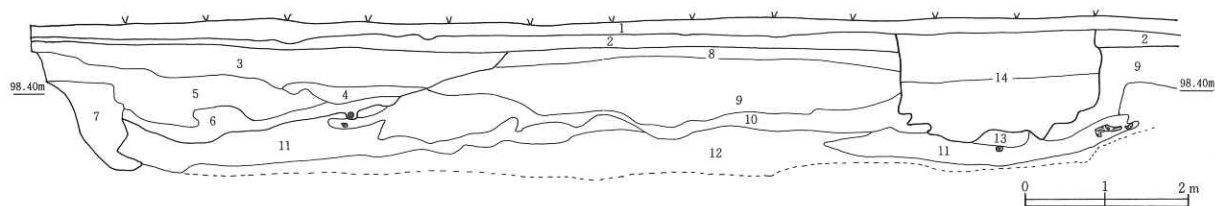
検出遺構

1) SD-1 トレンチ東南から北西に延びている。検出面での規模は、幅約8m、深さ約1.2mである。

堆積状況は、上層は灰褐色系粘質土層、中層は灰褐色系粘質化に粗砂が混入したもの、下層は青灰色系粘質土となる。下層から上層に従い堆積土は粘質化して行く。出土遺物には須恵器・土師器・流木がある。

2) SD-2 トレンチ内では南岸が未確認であるため川幅は不明だが、検出幅14m以上、深さは約2mある。

基本土層は上層から白色砂土に黄褐色細砂質土が混入したもの、中層は白色系細砂質土、



1.暗褐色粘質土（耕土）2.黄褐色粘質土（包含層）3.灰褐色系粘質土（SD-1上層）4.暗青灰色粘質土（SD-1上層）5.灰褐色系粘質土（SD-1中層）6.青灰色系粘質土（SD-1下層）7.明青灰色系粘質土（SD-1下層）8.灰色粘質土9.白色系黄褐色砂土混入土（SD-2上層）10.白色系砂質土（SD-2中層）11.白灰色系粗砂質土（SD-2下層）12.暗青灰色系粘質土（SD-2基底部）13.青灰色粘質土粗砂混入土14.後世攪乱土

図3 トレンチ南東壁面断面図

下層は白灰色系粗砂質土であるが、実際には土色を異にする砂が複雑に入り混じる。流路の方向は特定できないが、先述通り南西に延びると考えられる。

3) 堰遺構 検出した堰遺構の旧河道内での立地は、SD-2の北東岸の角度から、岸に直角に取り付いていた可能性がある。堰遺構は暗青灰色系粘質土層上に存在するが、この層はSD-2下層の直下であり、堰構築時におけるSD-2の基底部をなしていたと思われる。

SD-2の基底部は、堰遺構の北側で落ち込みを見せる。この落ち込みは、トレンチ南端から北端に向かって約0.8mの比高差で傾斜する。SD-2基底部と落ち込みの比高差が0.2m弱と小さい南端部は、堰の構築部材が途切れるため、この落ち込みは堰遺構の構築に対応するものと考えられる。

堰遺構の検出規模は、基底部からの高さは南端では0.3m、北端では1.5m、全長は6.3m以上である。構築部材の上側は堆積土中において部材の流出がほとんど認められないため、構築当初の高度を保っていると思われる。

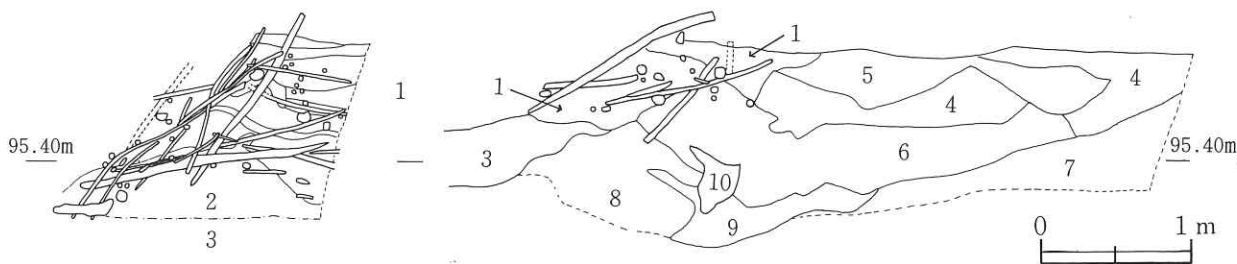
4) 堰の構造 堰遺構は、SD-2基底部に対し斜めに据えられる「斜材」と、直角に打ち込まれる「縦杭」と、横に据えられる「横木」から構成される。構築手法は南端部と北端部で大きく2パターンが存在する。以下復元的に構築手法を概観する。

①堰遺構南端部 ここでは構築部材の基礎として、長さ2～3mの横木を北端へ傾斜する落ち込みの地形に沿って据え、次にこれを固定化するため横木を挟むように縦杭を基底部に打ち込む。南端は横木と縦杭のみが使用されている。

②堰遺構北端部 落ち込みの基底部に据えた横木を挟み込むように斜材を打ち込み、次にその斜材を固定する縦杭と横木が設置される。横木-斜材-縦杭の使用を2～3回繰り返して堰を高く構築している。

堰を高く構築するための斜材は南端部では見られないが、南端部の基礎となっていた横木は、北端部では構築部材の上側となり、北端部の部材と組み合わせられている。

上述した構築手法は模式的なものであり、部分的には多様な形状を示す。しかし遺構自体は大幅に改修を受けた形跡はないと思われるため、①・②の構造差は水圧に対する堰遺



1: 白灰色系粗砂質土 (SD-2下層) 2: 茶褐色粘質土 3: 青灰色系粘質土 (SD-2下層) 4: 茶褐色色素細砂質土層 5: 白灰色系細砂質土 (礫混入) 6: 白灰色系粗砂質土 7: 灰色細砂質土 (礫混入) 8: 暗灰色系粗砂質土 9: 暗灰色系粘質土層 (SD-2下層) 10: 流木

図4 堰遺構断面図

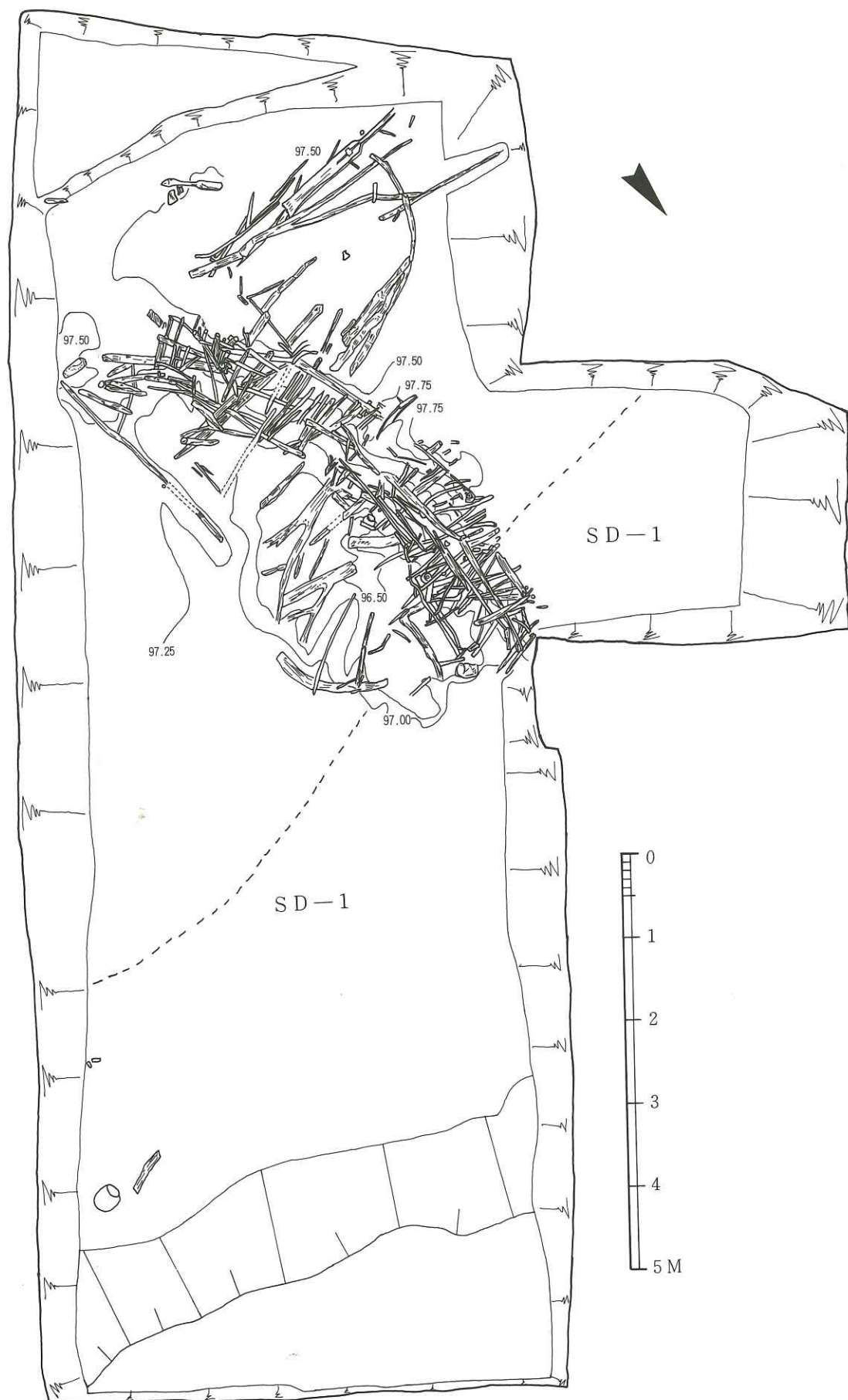


図5 調査地遺構図

構の強度差によるものと考えられる。

出土遺物

出土遺物は全て旧河道のものであり、コンテナ 5 箱程度の量である。この内 S D - 2 の遺物量は 3 箱であるが、ここでは残存が良好なものを取り上げた。なお甕と高杯は、甕の場合口縁部に受け口を持つ甕を「甕 A」、くの字の口縁を持つものを「甕 B」とした。高杯は、杯部に底面を持ち口縁が外湾するものを「高杯 A」、杯部に底面を持ち斜めに口縁が延びるものを「高杯 B」、杯部が丸味を帯びるものを「高杯 C」と分類した。

S D - 1 1994年度年報に紹介したため、図面は割合したが、須恵器・土師器が出土した。上・中・下層共に S D - 2 上層出土土器と類似する器種や時期の土器であり、8 世紀中期の時期に比定される。

S D - 2 上層では須恵器・土師器が出土した（図 7）。1 ～ 4 は 8 世紀中頃の時期と考えられるが、5 のように、5 世紀前半頃の土器が混入している。

中層（図 8）でも、甕 A 類や B 類の時期を異にする土器が混在する。甕 A 類は 5 世紀代、B 類は 6 世紀代に比定できる。16 は一般に瀬戸内系の壺とされるもので、色調や胎土が他の土器と異っており搬入品と考えられる。

下層（図 9）は、甕 B 類・高杯 A 類の他甕が出土し、6 世紀中期頃の時期に比定される。

図 10 は、堰遺構の基底部や部材間から出土した。甕 B 類・高杯 A・B・C 類や壺が存在するが、大部分の土器は、6 世紀中頃のものである。25 は櫃の構築部材の裏側から出土しており、堰の構築時期を知る上で重要な存在である。なお、中・下層では木製品も出土し（図 6）、櫃遺構からは鞘尻さやじりと見られる木製品を確認した（図 6 - W 2）。

4. 小結

今回の調査では、5 世紀前期から 8 世紀中期にかけて存続した旧河道と、6 世紀中期頃に存在した堰遺構を検出した。

堰遺構は多くの部材を組み合わせた頑丈な構造であり、大規模な灌漑事業が行われたと思われる。出土遺物は器種の構成上、一般集落と変化がなく、土器の側面では必ずしも経済的に優位な集落の構築によるものとは見なせない。

栗東町内では古墳時代の旧河道が多数検出されてきたが、堰遺構の検出ははじめてであった。堰は隣接する集落の自立（自給）的な生産との関わりでとらえる事が多いが、当地の堰は規模の上で広範囲にわたる生産地の灌漑を目的として構築されたものと思われる。

生産地の調査は集落に比べて重点が低いが、当時の社会を認識する上で重要であり、生産体系や集落との関わりを含め、今後の調査に期待したい。

〔参考文献〕『埋蔵文化財発掘調査 1991 年度年報 II』 財団法人栗東町文化体育振興事業団 1993 年

『能登川町埋蔵文化財調査報告書第 10 集 斗西遺跡』 能登川町教育委員会 1988 年

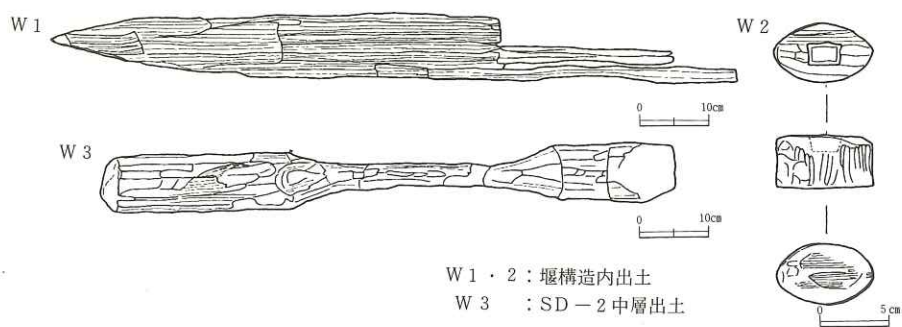


图 6 SD-2 出土木製品実測図

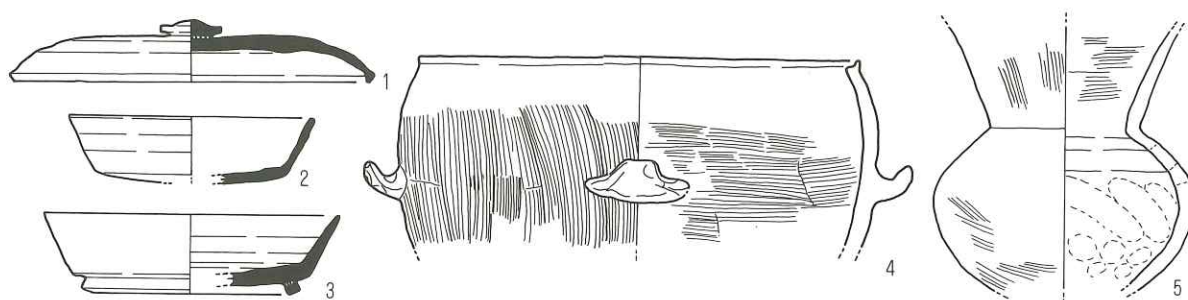


图 7 SD-2 上層出土土器実測図 (S=1/4)

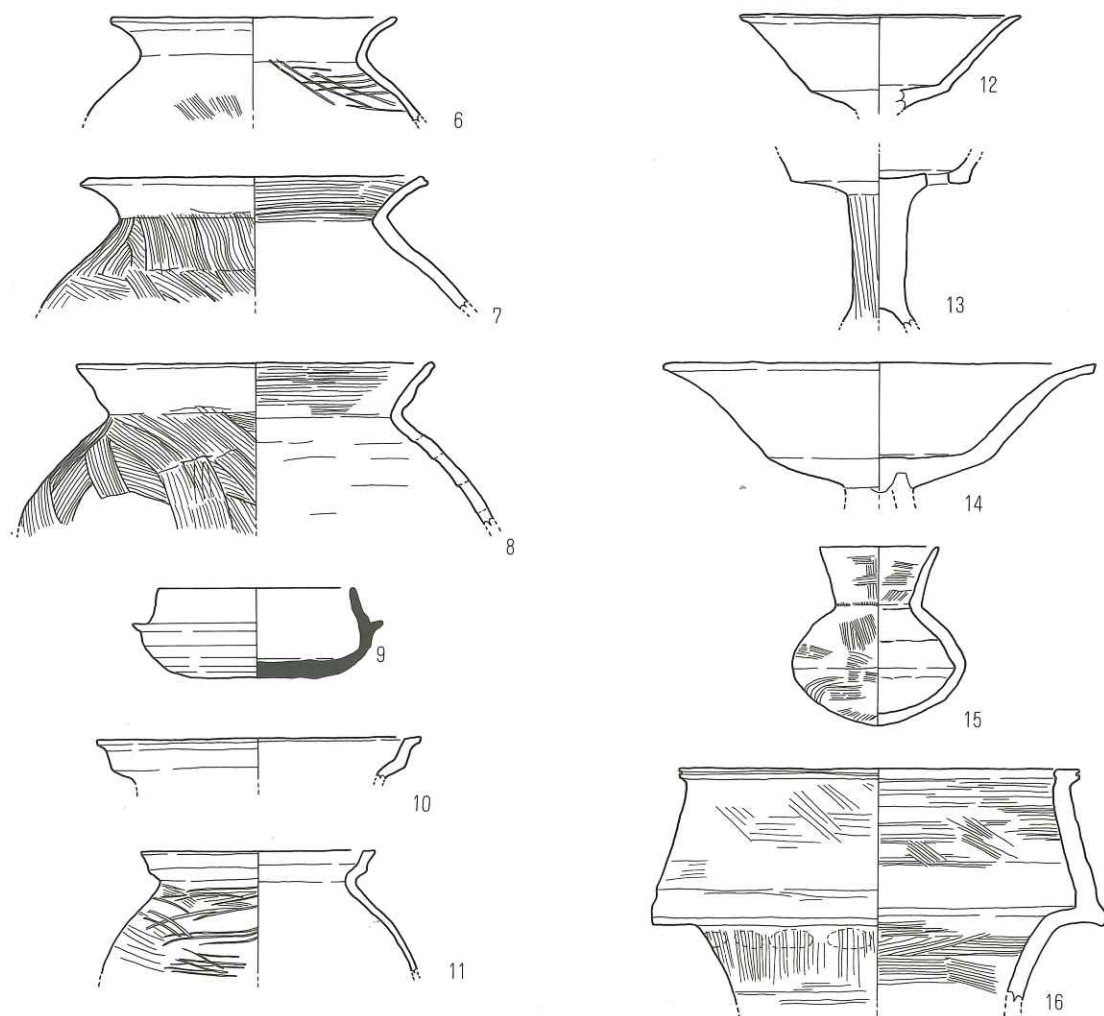


图 8 SD-2 中層出土土器実測図 (S=1/4)

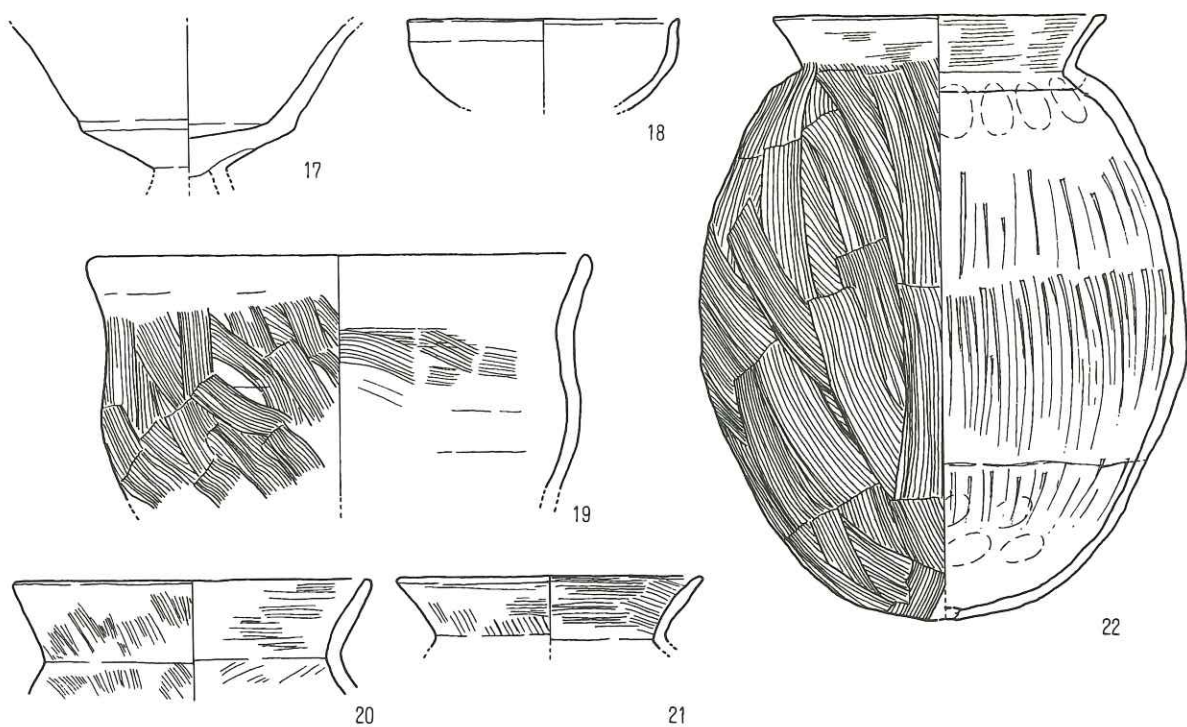


图9 SD-2下層出土土器実測図 (S=1/4)

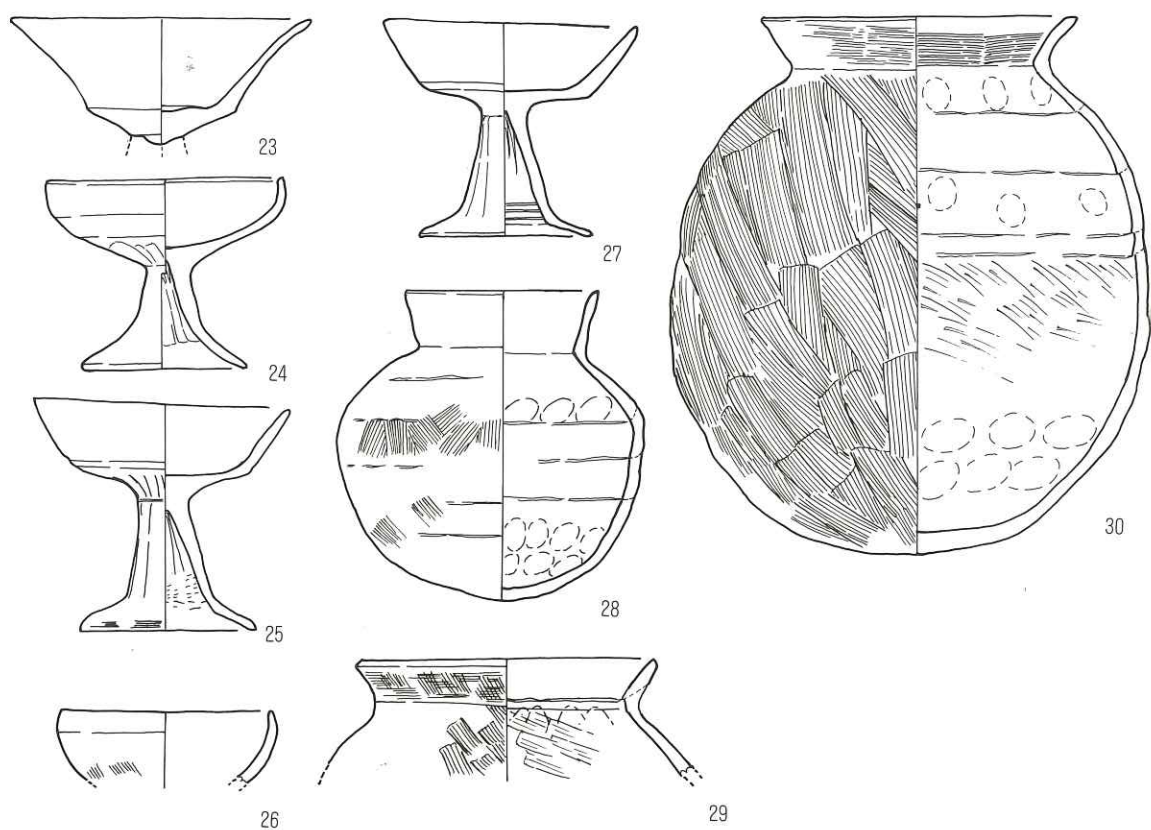


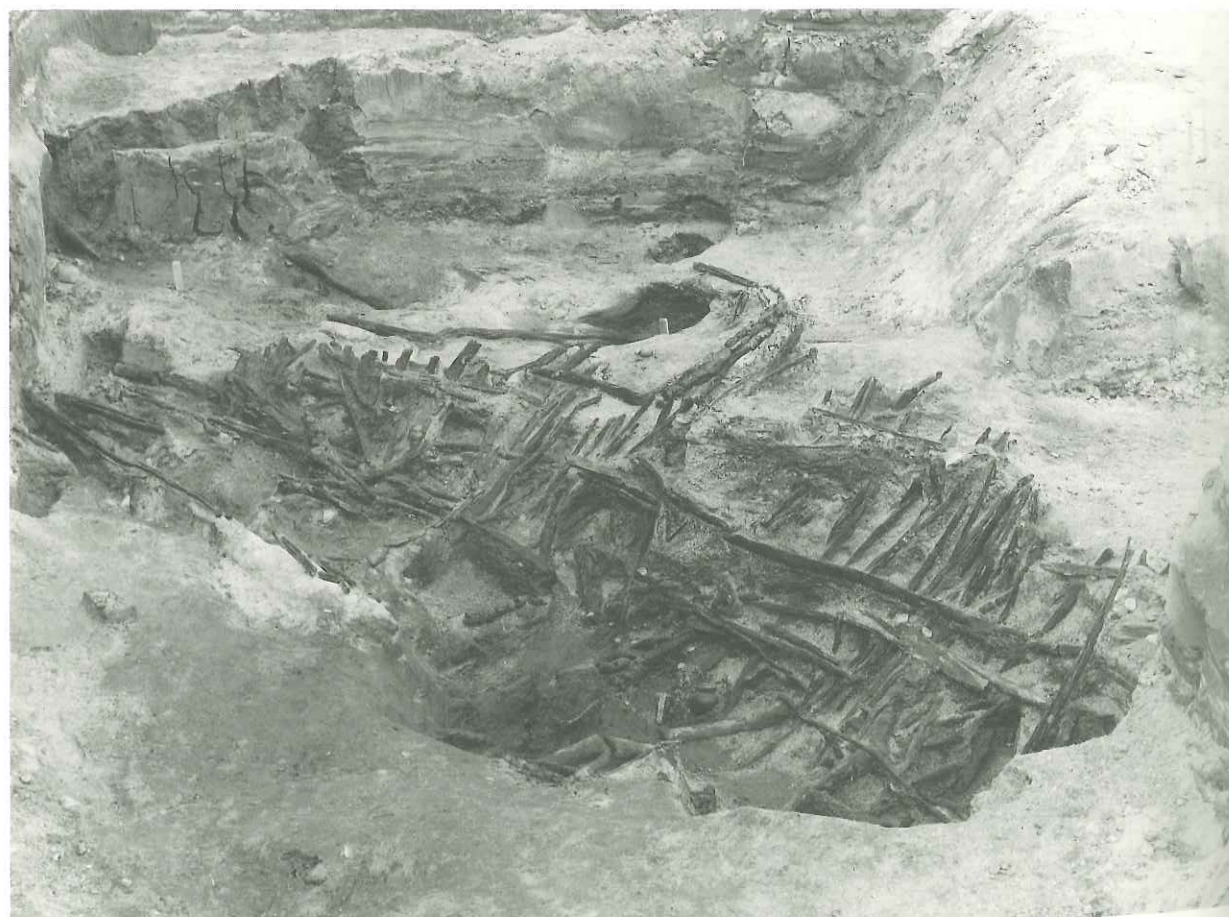
图10 SD-2 堰遺構出土土器実測図 (S=1/4)

表1 土器観察表

番号	器種	器形	法 量	口 縁 部 (杯 部) 調 整		体 部 (脚 部) 調 整		色 調	胎 土	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
SD-3 上層										
1	杯フタ		口径 19.0	ナデ	ナデ	回転ヘラケズリ ・ナデ	ナデ	灰色	砂粒含	須恵器
			器高 3.4							
2	杯身		口径 15.6	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰色	砂粒多含	須恵器
			器高 4.3							
3	杯身		口径 13.0	回転ナデ	ナデ			黒灰色	砂粒多含	須恵器
4	鍋		口径 23.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ハケ	乳褐色	小石粒多含	
5	壺			ハケ	ハケ→ ナデ	ハケ	指圧、ナデ	乳褐色	砂粒多含	
SD-3 中層										
6	甕	B	口径 15.0	ヨコナデ	ハケ→ ナデ	ハケ	ハケ→ヘラケズリ	乳褐色	砂粒多含	
7	甕	B	口径 17.8	ヨコナデ	ハケ	ハケ	ナデ	黒褐色	砂粒多含	
8	甕	B	口径 19.0	ヨコナデ	ハケ	ハケ	ナデ	乳褐色	砂粒多含	
9	杯身		口径 10.0	回転ナデ	回転ナデ	%以上回転	回転ナデ	黒灰色	小石粒多含	須恵器
			器高 4.8			ヘラケズリ				
10	甕	A	口径 17.0	ヨコナデ	ヨコナデ			褐色	砂粒含	
11	甕	A	口径 12.4	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ナデ	黒褐色	砂粒多含	
12	高杯	A	口径 14.8	ヨコナデ	ヨコナデ			乳褐色	砂粒含	
13	器台			磨減	磨減	ヘラミガキ		乳白色	砂粒多含	
14	高杯	A	口径 23.0	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ			乳灰色	砂粒多含	
15	壺		口径 6.4	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	ハケ	ナデ	黒灰色	砂粒含	
			器高 9.6							
16	壺		口径 21.0	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ			灰白色	砂粒多含	
SD-3 下層										
17	高杯	A		ヨコナデ	ヨコナデ			乳褐色	良好	
18	杯			ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	茶色	砂粒含	
19	鍋		口径 26.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ハケ	乳褐色	小石粒多含	
20	甕	B	口径 19.0	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	ハケ	ハケ	茶褐色	砂粒多含	外面→ 煤付着
21	甕	B	口径 16.0	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ			灰黄褐色	砂粒含	
22	甕	B	口径 17.6	ハケ→ヨコナデ	ハケ	ハケ	ハケ→ナデ	茶褐色	小石粒多含	肩部以下煤付着
			器高 32.0							
堰構造内										
23	高杯	A	口径 16.0	ヨコナデ	ヨコナデ			橙	良好	
24	高杯	C	口径 12.4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	砂粒多含	
			器高 10.1							
			脚部高 5.5							
25	高杯	B	口径 13.2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ→ヘラケズリ	赤褐色	砂粒含	
			器高 12.1							
			脚部高 7.0							
26	高杯	C	口径 11.0	ナデ	ナデ	ハクリ	ナデ	淡橙	砂粒多含	須恵器
27	高杯	B	口径 12.6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ	乳褐色	砂粒多含	
			器高 11.3							
			脚部高 6.8							
28	壺		口径 10.4	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	指圧、ナデ	淡褐色	砂粒多含	黒班有
			器高 16.5							
29	甕		口径 15.6	ハケ→ ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ	ヘラケズリ	浅黄橙	砂粒多含	
30	甕	B	口径 16.0	ナデ	ハケ→ ヨコナデ	ハケ	ナデ→ヘラケズリ	灰黄褐色	砂粒多含	
			器高 27.5				指押え			



旧河道全景（北東から）



堰遺構全景（北東から）



堰遺構全景（南から）



27



24



25



30

堰遺構出土遺物

栗東町埋蔵文化財調査 1993・1994年度 年報Ⅱ

発 行 日 1996年3月31日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団

滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1
栗東町民体育館内

TEL. 0775-53-4321

FAX. 0775-53-4379

印刷・製本 中 村 印 刷 所

滋賀県栗太郡栗東町下鉤681-5

TEL. 0775-52-2420